17 世紀のグローカルなキリスト教会史

―コルネリウス・ハザルト『世界教会史』の射程―

中　砂　明　徳

はじめに

1667 年から 71 年にかけて，ネーデルラント南部のイエズス会士コルネリウス・ハザルトの『世界教会史』がアントワープで刊行された。その名の通り，全世界（タイトルには「世界の四部分」－すなわちアジア，アフリカ，ヨーロッパ，アメリカ―という表現も見られる）のキリスト教会史をネーデルラント語で叙述し，フォリオ版全 4 冊で本文計 1757 頁（1 頁左右 2 段組各 61 ～ 62 行）という大作である。しかし，1682 年に再刊されただけでその後版を重ねることはなく，翻訳もドイツ語しか刊行されなかったのを見れば，国内・国外ともに大した反響はなかったとみてよいだろう [1]。現代においても「世界」の一部分（日本 [2], 中国 [3], ブラジル [4]）を切り取って論じられる程

---

[1] 南ネーデルラント , ドイツ語圏のイエズス会の学校で学生たちによる日本を舞台とした演劇のプロットにハザルトが用いられたことに注目する研究はいくつかある。Kateřina Bobková-Valentová and Magdaléna Jacková, “Japan and the Japanese in Jesuit School Plays from the Bohemian Province of the Society of Jesus,” Haruko Oba et al. eds., *Japan on the Jesuit Stage: Transmissions, Receptions, and Regional Contexts*, Brill, 2022, pp.189-232. Goran Proot and Johan Verberckmoes, “Japonica in the Jesuit Drama of the Southern Netherlands,” *Bulletin of Portuguese-Japanese Studies*,5,2002, pp. 27-47. 新山カリツキ富美子「ヨーロッパにおける日本殉教者劇 ――細川ガラシャについてのウィーン・イエズス会ドラマ――」『世界の日本研究』2017, pp. 284-294.

[2] Johan Verberckmoes, “Immers kloekmoedig. Emoties van zeventiende-eeuwse japanse christelijke martelaars,” Mark van Voeck et al. eds., *De Steen Van Alciato : Literatuur en visuele cultuur in de Nederlanden opstellen voor Prof. Dr. Karel Porteman bij Zijn Emeritaat*, Peeters, 2003, pp.615-632.

[3] Manjusha Kuruppath, “Caught in Confessional Crossfire: Representations of Johann Adam Schall von Bell in Dutch Sources in the 1660s,” Shu-Jyuan Deiwiks et al. eds., *Europe Meets China/China Meets Europe: The Beginnings of European-Chinese Scientific Exchange in the 17th Century*, Institute Monumenta Serica, 2014, pp.131-154.

[4] Johan Verberckmoes, “How Dutch Brazil Affects Your Emotions: The Antwerp Jesuit Cornelius

度で，本書全体の性格を論じた研究は管見の限りではビルギッテ・マルテンスの研究しか存在しない[5]。氏は本書をハザルトが長らく活動したアントワープの市民に語りかけたものととらえる。これから見ていくように，この点が本書の大きな特徴の一つであることは確かだが，その射程はそこにとどまるものではない。

著者ハザルトについても，その驚異的な多作ぶりにもかかわらず，同時代のイエズス会の著述家に比べれば影が薄い。90 点近い彼の著作の大半はネーデルラント語で書かれ，それらが翻訳されることもあまりなかった[6]。同時代のハンガリーのイエズス会士ヤーノシュ・ナダシ（1614-1679）の著作のかなりがラテン語で記されていたために弘通していたのとは対照的である[7]。

ただ，論争家としての彼の側面にはオランダやベルギーの研究者から一定の注意が払われてきた。前掲のマルテンスがそうだし，カトリックとカルヴァン派の論争を扱ったユープ・ファン・ヘニップの大著でも，カトリックの論争家の一人としてハザルトに一章があてられている[8]。諸家の研究の上に独自の調査も行われているので，これによって略歴を紹介しておく[9]。

Hazart on Early Colonial Brazil," Michael van Groesen ed., *The Legacy of Dutch Brazil*, Cambridge U.P., 2014, pp.146-167.

5 Birgitte Martens, " Geschiedschrijving, stedelijke identiteit en cultureel burgerschap. Cornelius Hazart en ' De kerckelycke historie vanden gheheelen wereldt' (1667-1671)," Margo de Koster et al. eds., *Werken aan de stad. Stedelijke actoren en structuren in de Zuidelijke Nederlanden 1500-1900*, VUB Press, 2011, pp.175-189. また , 同氏は未公刊の博士論文 "De Antwerpse jezuïeten en het grote mediadebat in de zeventiende eeuw: Een communicatiehistorische analyse van de Nederlandstalige religieuze controverseliteratuur (ca. 1595–ca. 1690)," PhD. diss., Vrije Universiteit Brussel, 2010 でも本書を取り上げるが , 内容に立ち入ったものではない。

6 彼の著作の書誌情報については , Carlos Sommervogel, S.J. ed., *Bibliothèque de la Compagnie de Jésus, Tome 4*, *Haakman-Lorrette*, Librairie Alphonse Picard et Fils, 1890, 181-197.

7 Gabriel Maria Verd Conradi, S.J., "János Nádasi SJ. (1614-1679), su difusión en Europa del soneto《No me mueve, mi Dios, para quererte》y su bibliografía hispánica," *Archivo Teológico Granadino*, 70, 2007, pp.5-53.

8 Joep van Gennip, *Controversen in Context. Een comparatief onderzoek naar de Nederlandstalige controversepublicaties van de jezuïeten in de zeventiende-eeuwse Republiek*, Verloren, 2014. 他には , イエズス会士 H.J. Allard, "Pater Cornelius Hazart S.J.," *Volksalmanak voor Nederlandsche Katholielken*, 20, 1871, pp.3-75 があるが , 彼の伝記的事実を確定しようとするものではなく , もっぱらカルヴァン派との論争を扱っている。R. Hardeman, *Cornelius Hazart. Woorden voor dezen tijd*,Alken, 1921 は未見。

9 上掲書 , pp. 402-420.

ハザルトは1617年にフランドル東部のアウデナールに生まれた。アウデナール，ドールニク（トゥルネー）のイエズス会の学校で学び，33年にドゥエーで哲学課程に進んだが，翌年父の死により帰郷しそのままアウデナールに残り，35年に入会した。37年にルーヴァンに移って後進を教育しつつ，神学課程を修了し，47年にアントワープの聖母大聖堂で司祭に叙任され，ブリュッセルで教鞭を取った後，50年からダンケルクに移って最終養成期間を過ごした。52年にブリュッセルに戻り，54年にアントワープに移ると，以後90年に亡くなるまで同地で活躍した。

1648年のミュンスターの和約により，ネーデルラント南北の往来が盛んになり，アントワープにも多くのプロテスタントが訪れるようになった。ハザルトが説教師・著作家として語り掛けたのはオランダの「異端」だけではなく，こうした帰郷者に対してでもあった。彼はこの異端との論争に向けての研究に一日8～10時間を費やしたという。その成果が旺盛な説教と著作に投入された。大作は『世界教会史』に限られない。たとえば，1664年にダニエル・ピーニウスに対する反論として著わされた『オランダのイカルス』は700頁に達する。また，晩年にはヤンセニストにも攻撃の矛先を向けた。

ファン・ヘニップは彼の著作を，①オランダに住むカルヴァン派牧師に対する応答，書簡，②聖体の実体変化などの特定のテーマをめぐる論文，③説教，④歴史叙述に分類する。彼の著作の大半はアントワープの出版業者クノバート（Cnobbaert）家によって出版された[10]。同家はアントワープのボランディストによって編集された『聖人伝』（*Acta Sanctorum*）を刊行するなど，イエズス会御用達の業者であった。

この分類のうち，ハザルトの本領は通常①～③に認められ，たとえばイエズス会公認の歴史辞典のハザルトの項目には「17世紀後半において，ネーデルラントのカトリッ

[10] Joep van Gennip, “ Cornelius Hazart S.J., Kerckelycke historie（1669）,” Paul Begheyn S.J. et al. eds.,*Jesuit Books in the Low Countries 1540-1773: A Selection from the Maurits Sabbe Library*, Peeters, 2009, pp.183-186. 本書は，副題が示すように，図書館の蔵書（もともとはイエズス会の北ベルギー・オランダ管区からルーヴェン・カトリック大学の図書館に長期貸し出されたもの）の図録・解題である。第3巻のみが取り上げられている（ウェブ上のカタログ（Jesuitica Catalogue）では1～3巻の所蔵が確認できる）のは，本巻にネーデルラントが含まれているからである。カップリングされるイングランドへの言及が全くないのは，著者の研究対象がネーデルラントのカトリック・プロテスタント対立にあるからだろう。結局，この文章からは第3巻全般の内容はまったくわからない。

ク改革論争における最大の論争家」という評言が見られる[11]。④にも当然それは色濃く出ているが，やはりそれだけでは本書の性格を言いつくせるものではない。

本稿は，この浩瀚な歴史書の内容を紹介しつつ，同時代の布教史の観点から適宜コメントを加えてその性格を確認したうえで，本書を同時代の文脈に位置づけようとするものである[12]。

まず，4巻の書誌情報，結構とスタイルについて最初にまとめておく。『世界教会史』というのは略題で，実際には *Kerckelycke historie vande gheheele wereldt,namelyck vande voorgaende ende teghenwoordighe eeuwe, inde welcke verhaelt worden de gheleghenheden der Landen, manieren, ceremonien, ende Religion der inwoonderen, maer namelijck de verbreydinghe des H.Gheloofs, Martelaren, ende andere cloecke Roomsche Catholijcke daeden, inde vier Ghewesten des wereldts, met verscheyden copere platen verçiert* という，当時の洋書によくある長大なタイトルである。長いだけに本書の性格をよく説明していて，扱う時期（「前世紀と今世紀」[13]），テーマ（世界各地の地誌，住民の風習，儀礼，宗教，そしてとくに布教，殉教者，その他のローマ・カトリックの勇敢な行為），銅版画による装飾という基本情報が得られる。1667年に刊行された第1巻は海外布教を扱い，68年刊行の第2巻にはアフリカ・ドイツ・フランスが収録され，69年の第3巻はネーデルラントとイングランド，そして71年刊行の第4巻はトルコ[14]，モスクワ，ペルシア，モロッコ，タルタリアをカバーする。これを見てもわかるように，世界を広く覆っている一方で，カトリックのコアである南欧がない。南欧でも当時「もう一つのインド」と呼ばれた農村地帯への布教が行われていたが[15]，本書は「外なる異端・異教」とその臨界地域しか扱わないということである。

---

[11] Charles E. O'Neill ,S.I. and Joaquín Maria Dominguez eds., *Diccionario Histórico de la Compañía de Jesús: Biográfico-temático*, Institutum Historicum, S.I., 2001,vol.2, p.1892. 執筆者 O.Van de Vyver.

[12] 使用するのは，インドの Pranava Books によるリプリント版である。1・2巻については，上智大学のラウレスキリシタン文庫データベースに画像が公開されており，適宜参照した。

[13] ただし，後述するように，この枠組みはしばしば破られる。

[14] タイトル頁には「トルコ，パレスチナ，シリア」とするが，本文での括りはトルコである。

[15] Adriano Prosperi, ""Otras Indias": missionari della controriforma tra contadini e selvaggi," Id., *America e Apocalisse e altri saggi*, Istituti editoriali e poligrafici internazionali, pp. 65–87 参照。

各巻にはそれぞれ献辞（第 2 巻は「読者へ」），著者の声明，使用文献リスト，特許と検閲による承認状が載る。「声明」では「本書の中には超人的で奇跡に見えるようなことも含まれるし，時には殉教者という呼称も使っているが，読者各位に注意していただきたいのは，これらは教皇に承認されているわけではなく，引用した文献のままに記したのである」と述べる。これは教皇ウルバヌス 8 世が各地で澎湃と沸き起こっている列福・列聖運動に必要な奇跡や殉教の「氾濫」を統制するようになったことに対するエクスキューズであって，当時の他の文献にもこうした言い訳は間々見られる[16]。本書のタイトルには「殉教者（Martelaer）」が顔を出してはいるが，本文での使用は抑制的である。各篇では「信仰のために殺される」話がおおむね後ろのほうにまとめられているが，そうした章のタイトルには「死（doodt）」が使われ，章題に「殉教者」が使われることはほとんどない。

各巻に載る使用文献リストは，当時の書物にはかなり珍しいものだと思う。ラテン語，スペイン語，イタリア語，フランス語，低地ドイツ語（Neder-Duitsche 今日のオランダ語。以下蘭語とする），ポルトガル語に分類して書物が並んでいるが，ラテン語の数が他を引き離している。そのためか，本書に出てくる登場人物の大半の名にはラテン語風に -us が付されるが，こういう表記になっているからといって情報源がラテン語本であるとは限らない[17]。

一方，4 巻を通じてスペイン語は 11 点あるが，イタリア語，ポルトガル語は各 1 点しかない。海外布教に充てられる第 1 巻が一番多様だが，アジアの宣教師のリンガ・フランカであり，布教関係の書物も多く刊行されているポルトガル語がリストには皆無である（ポルトガル語 1 点は第 2 巻のエチオピア布教を扱った本）。アントワープに暮らしたハザルトの読書環境が反映されているということだろう。ただし，原著を必ずしも見ているわけではなく，蘭語やラテン語への翻訳も使っている。第 3 巻ではイングランドを扱うが，英語文献はリストにはまったく挙がっていない。

しかし，このリストが本書で使用される文献のすべてではなく，むしろその一部と

[16] Simon Ditchfield, “How Not to Be a Counter-Reformation Saint: The Attempted Canonization of Pope Gregory X, 1622-45,” *Papers of the British School at Rome*, 60, 1992, p. 381 参照。

[17] ファースト・ネームは蘭語化されていることが多いが，本稿でのカタカナ表記は一般的なものを使う。

いったほうがよく[18]，本文に姿を現す文献の多様性には眩暈を覚えるほどである。出典は比較的示されているほうだが（特に「異端」を批判する際には「動かぬ証拠」を突きつけるために頁数まで示されることがしばしばである），引用のアマルガムともいえる本書の記述の来源を一一突き止めることは困難である。

また，書簡や演説（異教・異端のそれも含む），論争的内容を含む文章を多く引用し，彼のフィルターを通してのこととはいえ，一種のポリフォニーが現出していることも指摘しておきたい。これらがすべて原文引用ではなく，蘭語訳されており，それに注がれたエネルギーも驚嘆に値する。

こうしてできあがった書物に対して，イエズス会の管区から出版許可が与えられ（第1・2巻 1666.5.24，第3巻 1669.5.6，第4巻 1671.6.1），アントワープの教会人が検閲を行って内容に対する承認を与えた（第1巻 1667.1.5，第2巻 1668.5.14，第3巻 1669.5.6，第4巻 1671.8.12）。各巻に載る当時の君主スペイン王カルロス2世による特許状は同じ1667年2月4日付のもので，出版社には9年間の出版・販売の独占権を与えている。

各篇の冒頭には，韻文が載せられるケースがほとんどだが[19]，作者がハザルトだとは限らない。少なくとも，日本篇の詩はハザルトに日本人信者が捧げた結構をとっており，最後にP．A．Pと署名があり，ハザルトのものではない[20]。

銅版画はそれほど多く挿入されているわけではない。当時のネーデルラントとくにオランダの書物は銅版画で飾られることが多いが，旅行記や地誌の場合，現地の人々や建築物，都市の光景などが多数挿入され，読者の目を文章よりもむしろこちらに向

---

[18] 重要なものだけ挙げているわけでもなく，刊行年が不正確な場合も間々あり，整備された書目とは言い難い。

[19] ヴィジャヤナガルにはない。第4巻には冒頭に「シオンの聖母の悲歌」が載り，その内容は十字軍を扱ったものなので直接に関係するのはトルコだけだが，著者の意図としては本巻全体に冠したつもりだったかもしれない。

[20] イエズス会の Adriaen Poirters とされる。W.J.C. Buitendijk, *Het calvinisme in de spiegel van de Zuidnederlandse literatuur der Contra-Reformatie*, J.B.Wolters' Uitgevers- Maatschappij, 1942, pp.302-305. 彼は詩人として名高く，1640年にラテン語版が刊行されたイエズス会創立百周年の書物 *Imago primi saeculi* のネーデルラント語版にも詩を寄せている。注11所掲書，vol.4, p.3167.

けさせる[21]。しかし，本書の第１・２・４巻のヨーロッパ外を扱う諸篇では各地の民俗・宗教も叙述しているとはいえ，それはあくまで「布教前」の状況を示す役割しか与えられておらず，彼らの元来の信仰の状況を示すような画は全くない。服（Kleedinghe）を着た現地民のサンプルが散見するが，その半分以上は半裸ないし全身に刺青を施し，武器を持った男である。民族誌的な書物であれば通常男女のカップルを載せるものだが，本書ではカナダ人の男女の１点しかない。多いのは，宣教師・支配者の肖像あるいは宣教師・信者の処刑場面である。後者はおよそ現実離れしているが，当時イエズス会の学校等で演じられていた異世界劇の書き割りにはふさわしいものだろう。

また，各巻末に部・章のタイトル一覧と索引（人名・事項）がある。つまみ読みも想定しているということか。著者は，私のような酔狂な読者がいることをあまり期待していなかったのかもしれない。

以下解題に入る。非常に長くなるが，辛抱強くお付き合いいただければ幸いである。

第１章　海外布教のアドヴァンテージ　日本―中国―ムガル―ヴィジャヤナガル―ペルー―メキシコ―ブラジル―フロリダ―カナダ―パラグアイ―マラニャン

第１巻ではアジア・アメリカでのカトリックの宣教の成果が論じられる。「なぜここから始めるのか」は述べられないが，プロテスタントに対する優位を示すためであろうことは，アントワープの貴顕に宛てられた献辞を見ればわかる。その内容を以下に簡約する。

ローマ教会は各修道会士や在俗司祭の働きによって地の果てまで広がっている。信仰の光がメキシコ・ブラジルなどの地方の人食い（menschen-eters）やアジアの蛮人の間にも広がっていることは，私自身がイエズス会の教会の説教壇においてあなた方に語ってきたところである。それを書物として公刊することでこの事業をさらに深く心に刻むことができよう。神への奉仕の点ですばらしくまた驚くべき模範を示

[21] こうした銅版画の効用については ,Benjamin Schmidt, *Inventing Exoticism Geography, Globalism, and Europe's Early Modern World*, University of Pennsylvania Press, 2015 を参照。

すことになるが，その中にはアントワープ出身者もいて，信仰において同胞市民が他の人々に引けをとることはない。本書には，当地出身のドミニコ会士ルイス・フローレスが長い火あぶりにあいながら，世界の片隅で（op de leste hoecken des wereldts）彼を拷問責めにしたオランダのカルヴィニストの残忍や日本の暴君の非人道的なふるまいに対して勝利したことが記される[22]。勇敢な指揮官ルイス・ピーテルセン[23]が1623年に日本で恐ろしい拷問に耐え抜き，カルヴィニストや異教徒（heydenen）を驚嘆させたことも記される。二人は古代ローマで国家のために深淵に身を投じたクルティウス[24]，炎に腕を焦がされても耐えたスカエウォラ[25]に比しうる。パラグアイでは1651年に蛮族700家を改宗させたイエズス会士ユストゥス・ファン・スルクも，彼の同胞で布教地に着く前に船が難破して亡くなったアントニウス神父も当地出身である。アントワープは数世紀にわたって，神・宗教・王に貢献し，世界が金の指輪なら，アントワープは宝石である。私は本書によって，あなた方の支援を受けているイエズス会士とともに，アントワープの栄誉をさらに高めるように努める。

さらに，読者に向けた序言では，異端の説教者には宣教の熱意がないのと対照的に，ローマ教会が布教においてあげた成果を宣揚したあと，古代に異端と戦った司教たち[26]はとりあげず，インドで戦ったフルメンティウス[27]，アルビ派・ワルド派と戦った聖ドミニコ，フランシスコについても黙し，前・今世紀についてのみ扱うとする。そして，「布教の先鞭をつけたのが誰で，多くの成果を挙げたのは誰だ」といった話は他にまかせ，一体としてのカトリック教会の事業を扱うと言う。コンゴでは在俗司祭が，モロッ

---

[22] キリシタンの平山常陳の船で日本に密航を図り，オランダ人の手におちた2人の宣教師のうちの1人で，1622年に殉教した。

[23] 後述するように，実はフローレスと同一人物である。

[24] マルクス・クルティウス。伝説上の人物で，紀元前4世紀にローマで大地震が起き，大きな地孔が開いた時に，馬に載ってその穴に身を躍らせると，穴が閉じたという。自己犠牲の象徴として画題にもしばしばとりあげられた。

[25] ガイウス・ムキウス。共和制移行期の伝説上の人物。タルクイニウスの王政復帰をもくろむボルセンナを暗殺しようとして捕らえられ，火あぶりの拷問により右手が使えなくなったことから，スカエウォラ（左手）と呼ばれるようになる。

[26] 挙げられているのは，アレキサンドリアのアタナシウス，ヴェルセリのエウセビウス，ポワティエのヒラリウス，ミラノのアンブロジウス，トリーアのパウリヌスである。

[27] フルメンティウスは，エチオピアで4世紀に布教した。

コ・トラヴァンコール（インド南部）・セイロンではフランシスコ会が，メキシコ・ペルーではアウグスティノ会が，シナ・モゴル（ムガル）・カナダなどの地ではイエズス会が活躍したとして，本書が「イエズス会布教史」ではないことを示す。

・日本島史（pp.1-164）

本文はまず日本から始まる。分量は本巻では他を圧している。前述したように，本編に入る前に日本の信者のハザルトへの賛歌がおかれる。日本人信者が当時ネーデルラントにいたということではなく，仮構である。海を越えたザビエルとその後に続いた宣教師の死を恐れぬ勇気をハザルトが著述したために日本人は陸にいながらにしてそれを知ることができることに謝辞を述べたものだが，本書を当時の日本人信者が手に取ることはむろんありえない[28]。

第 1 部「日本の短い叙述」（pp.1-16）では，土地（1 章）・住民（2 章）について簡単に触れた後，オランダ東インド会社に勤務したフランス人フランソワ・カロンの『日本大王国志』[29]（蘭語）を借りて政治体制（1630 年代時点）について述べる（3 章）。そして，諸宗派（secten）を取り上げ（4 章），異教の聖職者について紹介する（5 章）が，いずれの記述も散漫である[30]。日本の信仰の諸側面が 4 項目（巡礼[31], 埋葬, 祭日, 説教）に分けて紹介される第 6 章はやや詳しいが，やはり体系的ではない。しかし，著者の主眼はここにはないので，当然といえば当然である。

実は，これは日本の部に限られることではなく，本書全体に言えることである。たとえば，同時代のオランダのオルフェルト・ダッペルが著わした『アジア』（蘭語，アムステルダム，1672 年刊。実際にはほぼムガル帝国を扱う）が延々とヒンドゥーの風習を述べるのに対し，本書のモゴル篇では当時の西洋人の耳目を引いたヴィシュヌ神のアヴァタール（化身）の話は紹介されるものの，宗教全体に割かれる紙幅は少ない。

---

[28] 松田清が明らかにしたように , 18 世紀末から 19 世紀初にかけて , 17 世紀の蘭書が相当数日本に入ってきた。その中には , 当時ヨーロッパでよく読まれたゴットフリート『世界年代記』のようにキリスト教的世界観によって記された書物もある。『洋学の書誌的研究』臨川書店 ,1998.

[29] 邦訳『日本大王国志』幸田成友訳注 , 平凡社 , 1967.

[30] 第 4 章では , 人間をたぶらかす悪魔＝狐の正体を見破った若者が追いかけて行くと , そこに大量の人骨の山を発見するという話に紙幅の半ばが割かれ , 第 5 章では坊主（Bonzy）の弘法大師（Combadagi）の予言がクローズアップされて , 仏教の一般的な描写にはなっていない。

[31] 実際には , 修験道の話である。

本書は宗教史ではなく，あくまで教会史なのである。

第２部「キリスト教の始まり」（pp.16-30）では，ザビエルの布教について述べる。序文ですでにザビエルについては「多くの他のすばらしい著作家たち[32]が諸国語で述べている」ので詳細は取り上げないと断っている通りで，ロヨラらとイエズス会を結成したことやインドでの布教活動に触れず，日本滞在時に絞った記述である。第８章以下は豊後に移ったザビエルと仏僧の論戦に焦点を当てるが，典拠はフェルナン・メンデス･ピントの『遍歴記』[33]（リストには1628年パリ刊の仏語版が挙げられる）である。イエズス会のトルセリーニ著『ザビエルの生涯』でもとりあげられている話柄だが，メンデス・ピントを採用したのは，おそらく彼が当時ザビエルとともに現場にいたと主張しているからであろう[34]。ザビエルが豊後王の宮殿で王をぐるりと取り囲む仏僧たちに対峙している姿が図版として挿入されるが，一人の宣教師が多くの異教の僧侶と対峙するという構図は後出するシナ篇・ヴィジャヤナガル篇でも繰り返される。

第３部「キリスト教の普及」（pp.30-61）では，いわゆるキリシタン大名を中心に叙述される。第１～３章では「大村王 Coninck van Omura」（純忠）が，坊主の反対や周辺の諸侯からの攻撃に耐えて信仰を護持したことをかなりの字数を費やして述べ，臨終にあたって息子のサンチョ（喜前）に与えた遺言が引用され，最後に「日本教会の柱であり，徳において昔からのキリスト教君主にひけをとらない」と述べる（p.35）。ついで，豊後王（大友宗麟）の改宗が扱われる。彼が入信するのはザビエルに出会ってから四半世紀以上を経た1578年だが，「日本のすべての宗派（alle de secten van van Iaponien）を試してみた末」のことだとされる（p.41）。彼が入信してから大友の家勢は傾いたが，その契機となった耳川の戦いの後に一族の Chicacura（田原親貫）の謀反を平定すると，世事を棄てて別天地に向かい，王者として亡くなったことを強調して

---

[32] 本文では記述の根拠を示していないが，文献リストにはイエズス会士オラツィオ・トルセリーニの『ザビエルの生涯』ラテン語，1596年刊が挙がっている。出版地がアントワープであることが注意される。

[33] 原著はリスボンで1614年に刊行された。邦訳題『東洋遍歴記』岡村多希子訳，平凡社，第３巻。

[34] ただし，ジョアン=パウ・ルビエスは，ピントの記述は山口で行われた争論を記録したイエズス会士の書簡をもとにして舞台を豊後に移しかえた可能性があると指摘している。Joan-Pau Rubiés, “ Real and Imaginary Dialogues in the Jesuit Mission of 16th Century Japan,” *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, 55, 2012, p.456.

いる[35]。

第 12 章では「その他の王」として天正少年使節を派遣した三侯のもう一人有馬晴信，第 13 章では「丹後王の妃」（細川ガラシャ），第 14 章では「ジュスト右近殿」（高山右近）を取り上げる。ガラシャ夫人については，夫（忠興）の DV，秀吉の迫害と苦難が続く中でこの世を去ったとするだけで，その死の事情を具体的に述べない[36]。右近については，家族と信仰，主君（秀吉）への忠誠と信仰の間で選択を迫られて常に後者を選んだことを強調する。ここまではキリシタン史でおなじみの人物ばかりだが，第15章では，「皇帝の将軍アウグスティン」（小西行長）のほかに有馬・大友家の女性たちが，第 16 章では一般の信者とくに女性信者の勇敢な行為（kloecke feyten）が取り上げられる[37]。

第 4 部「日本使節のローマ派遣」（pp.63-73）とは天正少年使節のことである。「日本人の王」の書簡とそれに対する教皇の書簡がそれぞれ引用され，ローマ入城時のページェントは「異端の説教者を大いに恥じ入らせる（tot groote beschaeminghe der kettersche Predikanten）」ものだったとして（p.65），カトリック教会の勝利を高らかにうたう[38]。

第 5 部「迫害とその原因」（pp.74-119）で舞台は暗転する。迫害の原因は秀吉個人の「増上慢と淫乱（verwaentheydt ende onkuysheyde）」そして神の意志に求められる。増上慢とは，彼が信長同様に神たらんとして[39]奈良に大寺院を造ったこと，淫乱とは，大坂だけで 300 人の妾を持ち，キリシタンの娘が妾となるのを拒んだことから，「日本に一人のキリシタンも生かしておけぬ」と言ったこと（p.85），神の意志とは，ヨーロッパからやってきた者たちの瀆神的行為への怒りと，大量の殉教者によるカトリックの栄光増進への予見を指す（p.84）。秀吉には一章分（5 章）があてられ（彼の死につい

---

[35] 西洋風の城塞から人々に惜しまれながら王が船に乗り込むシーンが図版として挿入される。

[36] 在日会士の記録では，夫人の死を当然自殺とはせずに，臣下に介錯させたとしているが，ここではさらにぼかした書きぶりになっている。

[37] 日本のキリシタン史研究者は女性信者一般についてあまり着目していないように思う。Haruko Nawata Ward, *Women Religious Leaders in Japan's Christian Century, 1549-1650,* Ashgate, 2009 があるが，さらに研究を深める余地があろう。

[38] 図版は 3 点使われる（使節の出発，スペイン王・教皇との謁見）。

[39] ハザルトは，信長はキリスト教に好意的であったことから神が 13 か国の主としたが，ネブカドネザルに比すべき自己神格化をはかったために，神が罰したのだとする（pp.78, 80）。

ても第6部で一章が与えられる），その出世譚にも触れる。本巻でクローズアップされる異教の支配者は秀吉のほかにムガルのアクバル，中国の順治帝くらいしかいないが[40]，後二者は臨終の時はともかく，終始イエズス会士には好意的であった。本書全体のアンチ・ヒーローという点では同じく好色が断罪されるヘンリー8世と並び立つといってよいかもしれない。

第9章では，16世紀末のフランシスコ会士の来日，第10章では彼らが挙げた成果に触れる。スペイン系の托鉢修道会とイエズス会の間では日本布教をめぐる厳しい対立が存在した。それを象徴するのが慶長遣欧使節の仕掛け人であるフランシスコ会のルイス・ソテロであり，日本のイエズス会士は彼を辛辣に批判したが，ハザルトはハンセン病患者の看護につとめたフランシスコ会士を称揚し，ソテロについても批判はしていない[41]。布教をめぐっては世界各地で修道会間の対立が存在したが，ハザルトはほとんどそれに触れることはない。

第12章では，豊後王（宗麟の子，義統）の棄教と死，第13章ではプロタジオ（有馬晴信）とパウロ（岡本大八）の死を扱う。ハザルトは信者同士の争いにより共に破滅した（「岡本大八事件」）二人について最後は悔悟して死んだとする。しかし，前に見たように三侯のうち大村純忠，大友宗麟にかなりの紙幅が割かれているのに比べれば，晴信の影はいささか薄い。第16章では，彼の教会への貢献を認めたうえでその死を扱うが，晴信よりも，本来しきたりに従って切腹すべきところを止めて夫に介錯を選ばせ，落ちた首にキスした妻ジュスタのほうが際立つ。

第14章では，悪魔（duyvel）に憑かれた男にどこから来たのか尋ねると「イングランドからだ。何年も現地の信者たちをいじめてきて，その方法を教えに来た」と答えた（p.99）というエピソードを枕にして迫害の進行が語られ，第15章では，「宮廷（幕

---

[40] ただし，アクバル，順治帝の図像は載るが，秀吉のものはない。

[41] 批判を差し控えたのは明らかであるが，ここで彼は大きな勘違いもしている。ソテロがヨーロッパから帰ってきた後のこととして，1617年に宣教師を出羽（Eua）・津軽（Tzugaru）に派遣し，自らも蝦夷（Yezo）に向かったとする。ソテロがローマで東日本の布教権を与えられたのは確かだが，彼は日本に戻るとすぐに逮捕されている。これはイエズス会士アンジェリスらの蝦夷布教と取り違えたものである。また，ソテロが1610年にイギリスやオランダのカルヴィニストが奥州にやってきた時に，奥州王（伊達政宗）に彼らの追放を説いたとするが，そうした事実はない。こうした混線が生じた理由については不明である。

府）の貴婦人」ジュリアらが Oxima（伊豆大島）に流されながらも信仰を堅持したことが述べられる。イングランドでのカトリックの迫害は日本と同時進行の出来事であり，イエズス会士たちは両者を関連付けてみていた[42]。ジュリアは朝鮮出兵時に拉致されてきた女性で，本章では彼女を励ます神父として登場するスペイン人イエズス会士ペドロ・モレホンから洗礼を受けている[43]。モレホンはこの後，高山右近とともにマニラに追放され，ヨーロッパで日本のキリスト教の状況をまとめて出版し（スペイン語，リスボン，1621 刊）[44]，ハザルトもリストに挙げている。

以下には，晴信の後を継いだ直純による有馬領の迫害を皮切りに，各地の迫害が時期を前後して取り上げられるが，そうした状況下において布教を開始したドミニコ・アウグスティノ両会の活動に第 19 章が当てられ，ドミニコ会士アロンソ・デ・メーナの書簡（1608. 3. 10）が引用される[45]。イエズス会の神父との交流について述べられ，末尾には「イエズス会士も我々が挙げた成果を認め，どうしてこういうことが起きるのかいぶかっているが，これすべて神のなせる業であろう」という一文があるためだろう。この後にドミニコ会士ディエゴ・コリャードとイエズス会の間には激しい対立が生じるのだが[46]，ハザルトがそれを知っていたかどうかはわからない。しかし，リストには，コリャードが原稿をヨーロッパに持ち帰って出版にこぎつけたハシント・オルファネールの『日本教会史』（スペイン語，マドリッド，1633 刊）[47]や，フィリピン管区長のメ

---

[42] 当時の日本布教の基地となっていたマカオにいた司教の蔵書には，イングランドの殉教録が複数存在していた。Noël Golvers, “The Library Catalogue of Diogo Valente is Book Collection in Macao（1633）. A Philological and Bibliographical Analysis,” *Bulletin of Portuguese - Japanese Studies*, 13, 2006, pp. 7-43.

[43] 彼女ら朝鮮半島からの拉致被害者の入信については，ホアン・ルイズ・デ・メディナ『遥かなる高麗』近藤出版社 ,1988 を参照。

[44] *Historia y relation de lo sucedido en los Reynos de Iapon*. 佐久間正による邦訳のタイトルが『日本殉教録』（キリシタン文化研究会 ,1974）となっているのは意訳だが，実際にモレホンは殉教者の列福運動のためにこの書を刊行したのであり，ヨーロッパから再びマカオに戻って後も，日本で相次ぐ「殉教」の証言をまとめてそれをローマに報告する上で主導的役割を果たした。

[45] ホセ・デルガード・ガルシーア O.P. 編注；佐久間正訳『福者アロンソ・デ・メーナ O.P. 書簡・報告』, キリシタン文化研究会 , 1982 にこの日付の書簡を収録するが，内容は異なる。

[46] Antonio Doñas, “Religiosas en Japón: Diego Collado y el Memorial de 1631 ,” *Liburna. Revista internacional de humanidades*, 22, 2018, pp. 29-47.

[47] 邦訳はオルファネール著，井手勝美訳，ホセ・デルガド・ガルシア註『日本キリシタン教会史：1602-1620 年』雄松堂書店 , 1977.

ルショール・マンザーノ『7人のドミニコ会士の殉教史』（スペイン語，マドリッド，1629刊），トマス・ラモンの『ドミニコ会士の生と死』（スペイン語，マニラ，1632刊）と[48]，ドミニコ会士の著作が挙がっているところを見れば，彼がやはり他会の活動の負よりも正の面に目を向けようとしたことは明らかだろう。

日本の「殉教」の特徴は，その集団性にある。集団殉教としては，ブラジル篇に出てくるイエズス会士40人の死や，古くはフン族によって殺されたとされる「ウルスラと11000人の処女」のような例があるが，公権力による処刑ではなく，殺戮である。キリスト教史上で，公権力によって多くの殉教者が出たといえば古代ローマである。宣教師たちが自分たちが置かれている状況をキリスト教公認前の古代ローマになぞらえることがしばしばあるが，日本にはそれに似た状況が現出していた[49]。それらの集団的な死も含めて，信者たちが払った犠牲が叙述されるのが，**第６部「数々の見事な死について」**（pp.119-183）で，本篇全体の３分の１の分量を占める。統治者によって四部に時代区分されている。

「Taycosama（太閤様）下の信者たち」の第１章の表題が「フランシスコ会士若干名，イエズス会士３名，そして俗人若干名の栄光の死」であるのは，1597年２月５日に長崎で処刑された者たちのフランシスコ会主導による顕彰（1627年に列福）[50]を，イエズス会士として「相対化」しようとするものではある（使われている図版もパウロ三木らイエズス会士３人の処刑が前景を占めている）が，殉教と同時代のヴァリニャーノ（当時，マカオにいた）がその著作 *Apologia* で，殉教後にフランシスコ会士に起きた「奇跡」をやっきになって否定している[51]のに対し，ハザルトはフランシスコ会士６人を紹介す

---

[48] 日本の「殉教録」についての概観は，Rady Roldán-Figueroa, *The Martyrs of Japan, Publication History and Catholic Missions in the Spanish World*（*Spain, New Spain, and the Philippines, 1597–1700*）, Brill, 2021によって得られる。

[49] 佐藤吉昭『キリスト教における殉教研究』創文社，2004を参照。

[50] 26聖人のヨーロッパにおける反響を書物・図像・演劇から多面的に精査検討した著作として，Omata Rappo Hitomi, *Des Indes lointaines aux scènes des collèges:les reflets des martyrs de la mission japonaiseen Europe*（*XVIe - XVIIIe siècle*）, Aschendorff Verlag, 2020がある。

[51] 第27章で「イエズス会が殉教から逃げた」という批判に抗弁する中で，フランシスコ会士６人に起きた奇跡を否定するだけでなく，イエズス会のパウロ三木の流血を密封した瓶がマカオに持ち帰られたが，開封したところ，奇跡であれば芳香を漂わせるはずが，強烈な悪臭を放ったと記している。José Luis Alvarez-Taladriz, ed.,*Apologia de la Compañia de Jesus de Japon y*

る第 2 章で，殉教前のことではあるが彼らに起きた奇跡をいくつか紹介している。たとえば，リーダーのペドロ・バウティスタの聖性をたたえ，彼がハンセン病者（melaetsch）の日本人に触れるとたちまち治癒し，その場にいた人々はかつて使徒に起きたように天から火の舌（vyerighe Tonghen）が下りてきたのを目撃したという話を紹介している。

「Daifusama（内府様）下の信者たち」では，年代順にできるだけ多くの事例を拾い上げる。第 1・2 章では時日は記されないが，1603 年八代で武士の一家が棄教を拒んだ末の処刑を，第 3 章では毛利家の有力な家臣メルショール（熊谷元直）の萩での 1605 年の処刑，1607 年山口，1609 年八代の事例を，第 4 章では 1613 年に晴信の二子が兄直純に殺されたことを，第 5 章では 1613 年に有馬で蝋燭やロザリオを手にした 20000 人の信者の中を刑場に向かった 8 人の「スペクタクル」（「これほど心躍るスペクタクルがここ数世紀間であっただろうか（Ick en meijne niet dat'er op eenighe eeuwe（n）oyt aenghenamer spectakel）」と言い（p.135），この一文に対応するかのように，火炎に包まれる中で槍に刺し貫かれた子供を前景にした図が挿入される）。第 6 章では，1614 年の竹田の 3 人，博多の 2 人，そして有馬の 17 人[52] の事例が取り上げられる。

これにつづく「将軍様（秀忠）下の信者」の第 1 章では，伏見での 50 人の火あぶり（京都の大殉教），第 2 章では，家康は宣教師を追放しただけだったのに対し，殺害に方針を転換した秀忠のもとで犠牲となったドミニコ会士アロンソ・デ・ナバレテら諸修道会士[53]，第 3 章では序文でも言及されていたフローレス神父ら 2 人と彼らを運んだ

China 1598, 1998. ヴァリニャーノの奇跡観については , 折井善果「「奇跡」と適応―イエズス会宣教師による「理性」概念の形成と日本」齋藤晃編『宣教と適応　グローバルミッションの近世』名古屋大学出版会 , 2020, pp.132 -161.

[52] Juan Ruiz-de-Medina S.J., *El Martirogio del Japón 1558-1873*, Institutum Historicum S. I. 1999, pp.336-342 によれば , この時の殉教者は 20 人である。

[53] この時には日本で活動していた 4 修道会が仲良く一人ずつ殉教者を出しているが , 修道会側の視点に立てば , アロンソ・デ・ナバレテが自ら出頭して殉教したことは大きな意味を持っていた。まず , 彼を中心にした列福に向けての調査が開始され , これに対抗してイエズス会が , 元和大殉教で処刑されたカルロ・スピノラを前面に押し出そうとしたことが , マカオでの審査過程から窺われる（Ajuda 文書 Jesuítas na Ásia, 49-V-9, 299v.-347）。集団性が目立つ日本の殉教シーンにおいて , 単独の伝記が書かれた宣教師はスピノラと後出するマストリリだけである。当時出版されたスピノラの伝記には邦訳がある（宮崎賢太郎訳『カルロ・スピノラ伝』, 1985）。彼が殉教者の中でも特別な意味を持っていたことは , 小俣ラポー日登美「イエズス会の公的殉教

ジョアキン（平山常陳）ら 13 人, 第 4 章では 1622 年のいわゆる元和大殉教の 52 人（修道士 21 人，俗信徒 31 人）[54] を取り上げる。第 5･6 章ではその中の主だった者を取り上げ，その先頭にはイエズス会のカルロ・スピノラが来るが，処刑柱から逃れようとした日本人を励まして戻らせたアンジェロ･オルスッチ, そして「サラマンダーやフェニックスのように」16 時間も焔の中で生き続けたオルファネールのドミニコ会の両神父について述べているように（p.146），他会への目配りを忘れていない [55]。

以上は修道会側の史料によったものだが，その「真実性」を裏付けるべく，第 7 章では再びカロンの記述が登場する。章題を「1661 年に本屋のヨアネス・トンゲルローがハーグで刊行した，日本の商館長フランソワ・カロンの『強国日本の正確な記述』により様々な責め苦と死について述べる」となっているのは，敵地オランダで刊行されたことを強調するものである。このように異端者の記述・証言を引用することで自説を補強するという手法は，本書の中でしばしばみられるものである。第 8 章もカロンに収録されたカルヴィニストのライエル・ハイスベルツの記事 [56] を引用したうえで，①彼はカトリック信者のことを「強情（hertneckigheyt）」と言うよりは魂を「非常な意思堅固さをもって」神に捧げている殉教者（Martelaers）として認めている，②弱き日本人信者を助けるために宣教師が「人々から忌避されているハンセン病者（de Lazarissen, die van alle menschen gheschroomt en geshouwt worden）」の小屋で過ごした [57] 悲惨な状況を伝えている, ③オランダ人が「キリスト教徒である」と署名せずに,「オ

観を『イエズス会の百年像』（1640）からひもとく - 日本の代表的な殉教者としてのカルロ・スピノラ像 -」『キリシタン文化研究会会報』155, 2020, pp.1-44 が論じている。

[54] 現在では , 元和大殉教は 55 人とカウントされる。52 人とは , ジェズ教会所蔵の日本人が描いたとみられる有名な殉教図で十字架が三本空いているように , 処刑の途中で逃げ出そうとしたドミニコ第三会員の日本人 3 名（結局は処刑されるのだが）を外した数であろう。

[55] 元和の大殉教（1622.9.10）とは別の日（同年 8 月 19 日）に処刑されたアウグスティノ会士ペドロ・ズニガが図版では同時に処刑されている。アウグスティノ会士は元和大殉教には参加していない。キャプションにズニガに加えて各会のメンバーが一人ずつ挙げられている（イエズス会―カルロ・スピノラ , ドミニコ会―フランシスコ・モラレス , フランシスコ会―ペドロ・デ・アビラ）のは , 四修道会がともに苦難を受けたというメッセージだろう。

[56] この記事の中で前掲のフローレス , そしてズニガは , アントワープの Louys Pietersz, Pedro de Suynego として現れている。ハザルトはこの記事の二人を別人と見なしたようで , 序文にはアントワープのフローレスとピーテルセンが別人として登場する。

[57] ハザルトも述べているように , ハンセン病者の小屋には一般の日本人は近づかないので , 宣教

ランダ人である」としか書かなかったことを認めている，④日本人信者がおそるべき拷問を耐え抜いたことを詳述するのに対し，カルヴィニストが信仰のために死んだ例が挙げられていないことを指摘する（p.152）。なお，ハイスベルツは，この後に江戸の大殉教について記すが，ハザルトはこれを引用しない。おそらく，ハイスベルツがその原因を信者の裏切りにあると指摘している[58]からだろう。また，ハイスベルツは1626 年には長崎に 4 万人の信者がいたが今は存在しないと述べているが，本書では現状の部分をカットしている。

第 9 章では同じく 1622 年に平戸で処刑されたイエズス会士 2 人，第 10 章では 1623 年の江戸の 52 人が取り上げられる。江戸の大殉教は，長崎のそれと異なり，西洋人宣教師は蝦夷地に踏み込んだことで知られるジローラモ・デ・アンジェリス神父ら 2 人しかいない。ハザルトは, 処刑に際して「皇帝の甥」の Fara Mondondono（原主水殿）[59]が行った演説を引用して高貴な信者にスポットを当てている。

第 11 章では，同月の江戸の 24 人，1624 年の出羽の親子，平戸で神父をかくまってすでに処刑されていた信者の家族（上は 90 歳以上から下は 3 歳まで），薄香の一家 7 人（生後 3．4 日の娘まで），中江（平戸）の貴族の一家，川内のミゲル山田の家族，博多の貴婦人スザンナ，久保田（秋田）の 32 人，出羽の 50 人，仙北の 16 人と，殺害リストが続いてゆく。この中で際立つのが，真っ赤になった炭を手に取っても平然としていた 7 歳の男の子，息子の髪を整えてやり，子供と夫の死を見届けると，神に最後の戦いでの勇気を与えてくれるよう祈って首を打たれたウルスラ，裸で十字架にかけられ，その近くで自分の娘を抱いていた侍女が娘を助けるために「自分の子」だと奉行に言ったのに「私の子です」と言い, 子供とともに雪の降る中 8 時間もさらされて，泣き叫ぶ子を抱こうとしても腕が寒さで動かなかったスザンナである。「毅然として死んでゆく女性信者」をハザルトは強調している。

第 12 章では，1624 ～ 28 年にかけて殺された各修道会士が扱われる。この中にはソテロのような西洋人宣教師もいるが，朝鮮出身でアウグスティン（小西行長）に日本

師の潜伏先としてしばしば用いられた。

[58] 注 29 邦訳書 , p.195.

[59] 実際には , 徳川家康の小姓に過ぎない。

に連れ帰られ，イエズス会に入会し，シナのことを知っていることからシナ経由での母国への入国・布教を目指して北京へ向かったが，チャンスがなく日本に戻り，火あぶりとなったヴィセンテ・カウン[60]や，島原に連行されて拷問された後，雲仙で硫黄泉に落とされて死んだミゲル中島（図版あり）ら，イエズス会の助修士が目立つ[61]。第13章ではイエズス会の日本管区長フランチェスコ・パシェコらが扱われているが，表題になっているのは平信者で，本文で際立つのも貴族の妻モニカとその侍女たちである。

そして，「Toxogunsama（当将軍様，家光）下の信者」では，第1章で新たに発明された責め苦（穴つるし）に遭ったイエズス会士，アウグスティノ会士，第2章で1637年のフランス人神父ギヨーム・クルテと同伴者のドミニコ会士たちを扱い，瀕死の枕頭に立ったザビエルに救われることで東方へと導かれてやはり1637年に処刑されたイエズス会士マルチェロ・マストリリに第3章が捧げられる。日本に上陸して布教する間もなく捕獲された彼については，伝記が死の直後に数種類出版されており[62]，日本キリシタン史における存在感の希薄さと対照的にヨーロッパでは大スターであった[63]。彼ほど東方に出発する前から注目されていた宣教師はいない。ハザルトも，すべての異端を恥じ入らせる彼の足跡については，「数千の確かで明白な証人」がいるとして，その一生を紹介する。

第4章では，1640年に通商再開を目指してマカオから渡航した使節団のうち61名の処刑が語られる[64]。この話のアクセントになっているのは，殉教者の多国籍性であ

---

[60] 注43著書，pp.88-95.

[61] 実際には，この時期に殉教した日本人イエズス会士（ほとんどが助修士）の多くは獄中で入会を認められて死に臨んでおり，こうした状況下になければ入会が認められていなかったであろう。彼ら助修士の存在については，五野井隆史『徳川初期キリシタン史研究』補訂版，吉川弘文館，1992が詳しい。

[62] 本書のリストに上がっているのは，1637年刊のオランダ語版の『イエズス会士マストリリの旅』であるが，刊行年を見てもわかるように，マストリリのインドへの旅までしか扱っていない。

[63] インドのキリスト教史を主戦場とするInes G. Županov, “Passage to India: Jesuit Spiritual Economy between Martyrdom and Profit in the Seventeenth Century,” *Journal of Early Modern History,* 16-2, 2012は，彼のインドまでの足跡を追うが，ハザルトが触れているその後のフィリピンでのムスリム遠征従軍や，マカオ・マニラでの列聖に向けての調査にも注目すべきである。

[64] リストには，蘭語版の『4人のポルトガル大使の栄光の死の記述』（アントワープ，1644刊）が挙がっている。日本管区のプロクラドールとしてヨーロッパに戻ったアントニオ・カルディンのポルトガル語版の翻訳である。

る[65]。26 聖人の中にもインドやメキシコ生まれの者がいたが，こちらは 17 種すなわちポルトガル，カスティーリャ，メスティゾ，インド，パンパンガ，シナ，ベンガル，カフレ，マレー，ティモール，ソロル，バラール，マラバール，アチェ，Lanerinen?[66]，マカッサル，ジャワ人から成っていた。大使となったマカオの有力市民 4 人はいざ知らず，随行者たちがどの程度殉教を意識していたかは怪しく，またマカオという都市環境がこうした混成集団を生み出したに過ぎないが，宣教師側から見れば，カトリック教会の国際性を宣揚できる材料ではあった。

第 5 章の，ペトロ・カスイ（岐部），1642 年のイエズス会士アントニオ・ルビーノらの密航団[67]，そして著者にとって近時の 1658 ～ 61 年にかけての 600 人の殺害で，長い墓碑銘は終わる。ルビーノらの長崎での尋問については，当時のオランダ商館長ヤン・ファン・エルセラックの日記を長文引用し[68]，さらにエルセラックがのちにバタビアでイエズス会士アンドレアス・コフレルに口頭で伝えた内容まで載せるが，同じくオランダ人が情報をつかんでいた第二密航団から棄教者が出たことには触れないし，イエズス会日本管区最大のスキャンダルである管区長クリストヴァン・フェレイラの棄教にも当然沈黙している。

最後の「付録」は，またしても異端の証言をダメ押しとして載せる。「改革派（Gereformeerde）の日本におけるふるまいを示すある布告の抜粋」と題して，1644 年

---

[65] 当時は未刊行に終わった在華宣教師のアントニオ・デ・ゴヴェアが中国布教を扱った *Asia Extrema* でもマカオにとって重要な意味をもつこの事件を取り上げるが，そこでも死者の多国籍性が言揚げされる。Horácio Araújo ed., *Antonio de Gouvea Asia Extrema*, Segunda Parte Livros IV aVI, Fundação Oriente, 2018, p.298.

[66] ゴヴェアの記事の Canarin（インド西岸の住民）にあたると考えられる。

[67] この使節団派遣の事情については，清水有子『近世日本とルソン：「鎖国」形成史再考』東京堂出版，2012,「第八章　イエズス会巡察師アントニオ・ルビノ一行の日本密入国事件」を参照。

[68] 『日本関係海外史料　オランダ商館長日記』訳文編之八，東京大学出版会，1987, p.125 に，イエズス会のアンドレ・シャビエルが 1642 年 11 月 20 日にエルセラックの日記をラテン語訳したことが記されており，シャビエルは次に出てくるコフレルのことである。しかし，同胞が入手した情報がどのようにしてハザルトの手にわたったかは不明である。また，原文編之八，同，1986 の日記（底本 A）1642 年 8 月 21・22 日条（pp.106-109）と比較すると，文言は同じではないが，訊問に参加した「背教者」が宣教師たちの悪罵を浴びてすごすごと退散したことに始まり，記述内容はほぼ同じである。ただし，『商館長日記』に見える背教者ジョアン（忠庵＝クリストヴァン・フェレイラ）の名は見えない。

8月4日にエルセラックが日本に赴任する商館員に対して，「信仰に関する事物を持ち込まず，祭日を祝わず，勤行はせず，心の中で信仰を保て」との指令を発したことをドミニク・フェルメールの *De brullende Leeuw*[69] の45頁から引用し，また，1642年10月28日に長崎の市長 Siragemondonne（海老屋四郎右衛門）がインド総督宛の書簡で，信仰は持ち込むべからずと念を押し[70], 総督がそのことをオランダに報じたことに触れ，ドイツ人ヨハン・アルブレヒト・フォン・マンデルスロの『東方旅行記』の第2部453頁から1646年の日本への派遣船への指示（「キリスト教徒かと問われたら否と答えよ」）を引用している。フェルメールはゴイセンの説教者（Geuschen Predikant）であり，その彼でさえ同胞のこうした行為を批判しているとするのである。

日本の布教史には，敵対者としてオランダ人とイギリス人が登場する。イエズス会側には彼らの中傷が幕府の禁教政策に影響を与えたという言説がしばしばみられるが，ハザルトはそれには触れずに，交易という世俗的な目的のために日本にやってきたオランダ人を「傍観者」として非難する。しかし，この傍観＝観察を利用して日本人の信仰堅固の証ともするのである。殉教者銘々伝としては，リストにも挙がっているアントニオ・フランシスコ・カルディンの『日本の花束』（ラテン語版，ローマ，1646刊）があり[71]，この本とドミニコ会士の「殉教史」諸作なしには本篇後半の記述は成り立たないが，いくらそれらを連ねたところで，「内部評価」に過ぎない。「敵」の目を通して「真実」を示すことが必要だったのである。

・強国シナの歴史（pp.185-244）

第1部「シナ略説」（pp.185-194）では，イエズス会の3人のプロクラドール（中国布教の状況をローマに報告するために派遣された）による著作，すなわちマテオ・リッ

---

[69] リストにはない。書誌情報，著者については現在のところ掌握できていない。なお，『日本関係海外史料　オランダ商館長日記　訳文篇之八（下）』，1997の同日条を見ると，指令がこの日に出たというわけではなく，乗員規則が当局の役人の前で読み上げられ、それが書き留められたことを記している（p.11）。

[70] 『日本関係海外史料　オランダ商館長日記　原文篇之七』，1989に掲載されている書簡（pp.229-232）の一部抜粋であることが確認される。

[71] 本書の書誌学的研究には，森脇優紀・小島浩之「カルディン著『日本殉教精華』の古書冊学的研究（1）」『東京大学経済学部資料室年報』8, 2018, pp. 41-55がある。

チの布教記録をニコラ・トリゴーが編集した『キリスト教シナ遠征記』[72]，ポスト・リッチの布教史であるアルヴァロ・セメードの『シナ帝国史』，マルティノ・マルティニの『シナ新地図帳』[73] などを用いて，中国の地誌（1 章），住民（2 章），その理解力と知識（3 章），道徳（4 章），宗教（5 章），会合などにおける礼儀作法（6 章），イエズス会の布教以前にキリスト教が伝来したかどうか（7 章）を述べる。基本的には前記三書からの引用のパッチワークだが，ハザルトの味付けや誤解も見られる。

たとえば，「敬虔さではヨーロッパ人のほうがすぐれるが，理解力と創意工夫ではシナ人がはるかに上回る（Ghelijck die van *Europa*, in vroomigheyt, de *Sinesen* te boven gaen, alsoo de *Sinesen* in verstant, ende vernuftheydt,verre te boven die van *Europa*）」（p.186）とするが，トリゴー（リッチ）は印刷術が西洋より早く発明されたことを指摘しているものの[74]，ヨーロッパ人よりすぐれるとまでは言っていない。宗教については，「学者」「偶像崇拝」「快楽主義」の三つのセクトをあげ，これは儒・仏・道にあたるのだが，第二のセクトでは老子の話をしており[75]，在華宣教師の主要敵であった仏教の記述が完全に抜け落ちている（pp.189-190）。トリゴーを完全に誤読しているのだが，なぜこうなってしまったのかは分からない。

イエズス会以前にキリスト教が伝来したことについては，すべての人が肯定しているとする。聖トマスがシナに布教したことは確実だとし，その後の唐代の布教や元代に宣教師オドリコが到来したことに言及する。トマスの布教については，在華宣教師は確実視していたわけではない。マラバールで発見された古代のカルデア語の祈祷書の中にシナ布教のことが述べられているというが，これは確証とは言えないだろう。また，唐代の布教の事実を示す「大秦景教流行中国碑」は本巻と同年に刊行されたイ

[72] 邦語訳『中国キリスト教布教史 1・2』川名公平・矢沢利彦訳，岩波書店，1982-83 はリッチのイタリア語稿本の翻訳とセメードの書のうち中国事情を解説した部分の翻訳である。

[73] 3 作はリストにはない。翻訳もある前二者についてはどの版を用いたかはわからない。マルティニはヨハン・ブラウのアトラスの一部としてアムステルダムで刊行されたものである。この地図帳の「真価」については，拙稿「マルティニ・アトラス再考」（藤井譲治・金田章裕・杉山正明編『大地の肖像　絵図・地図が語る世界』京都大学学術出版会，2007）を参照。

[74] トリゴーの第 1 書第 4 章に述べられる。

[75]「キリスト紀元 65 年ころに始まった」とするのは，後漢明帝期の仏教の伝来のことを指している（イエズス会の解釈では，インドでは使徒トマスが布教していた話が誤伝され，福音のかわりに仏教が伝わった，ということになる）。

エズス会士アタナシウス・キルヒャーの『シナ図説』の巻頭を飾っているが，キルヒャー自身が述べるように同時代のプロテスタントの学者たち（ゲオルゲ・ホルンなど）は，その信憑性を疑っていた[76]。

第２部「カトリックの導入への下準備」（pp.194-198）では，ザビエル以後，リッチらの入華以前の宣教師の５回のアプローチの挫折を各章に分けて記す。第１章はザビエルの大陸を目の前にしての死（1552 年），第２章はイエズス会のメルショール・ヌネスが広東の人々の前で異教の僧侶と世界の創造などについて論戦して勝利を収めたが，布教を許されなかったこと（1555 年），第３章はポルトガル王セバスチャンの使節に随行したイエズス会士フランシスコ・ペレスらが，広東当局の疑念により退けられたこと（1563 年），第４章はペレスがまたしても新しい使節に随行し，広東で好意的に迎えられながら布教については取り合ってもらえなかったこと（1565 年）と総長ディエゴ・ライネスにシナ入国の至上命令を与えられたジョアン・バプティスタ・リベラらの密入国失敗，マカオ送還を扱う。ザビエル以外のアプローチはトリゴーでは扱われていない。この間には，アウグスティノ会のマルティン・デ・ラーダが短期間ながらフィリピンのスペイン人の使節として入国を果たしており[77]，フランシスコ会も無手勝流の潜入を試みていた。これらはトリゴーの本が出る前に一世を風靡したフアン・ゴンサーレス・デ・メンドーサの『シナ大王国志』（1585 刊）[78] に載っている。ハザルトは本書を引用していないが，フランシスコ・ドミニコ会の試みがあったこと自体には言及しており（p.196），イエズス会の手柄のみを称揚したわけではない。

結果的には，この後約半世紀にわたってイエズス会の布教独占が続く。**第３部「キリスト教の宣教師のシナ入国」**（pp.199-205）は，第２部に対応するように，布教のパイオニア，イエズス会のミケーレ・ルッジェーリとマテオ・リッチの中国内地布教の拠点確保の試みを５度のシナ行としてまとめ，**第４部「シナにおける宣教師の定住」**（pp.205-210）では広東の地方長官に二人が居住を認められた過程を扱い，**第５部「カ**

---

[76] Thijs Weststeijn,“Vossius’s Chinese Utopia”, E. Jorink & D. van Miert eds., *Isaac Vossius (1618-1689): Between Science and Scholarship*, Brill. 2012, p.212.

[77] ラーダの入国については，拙稿「ラーダの中国行をめぐって―菲律賓諸島箚記（1）」『京都大学文学部研究紀要』54, 2015, pp.77-139 を参照。

[78] 邦訳『シナ大王国志』長南実・矢沢利彦訳，岩波書店，1965.

トリック信仰の開始」(pp.210-218) では, 迫害によって拠点を移すに至ったことを記す。

これらの初期布教の困難はトリゴーが詳しく記すところで，ハザルトはそれに基づきながらも，第 4 章で 1585 年から 1589 年に時間が飛び，その間に教皇からの使節派遣を要請するためにローマにルッジェーリが向かったことが記されていないために，彼が中国布教からフェイドアウトする形になっている。

第 6 部「カトリック信仰の伸展」(pp.218-232) はマテオ・リッチの独壇場で，彼が拠点を徐々に北上させ，ついに 1601 年に北京に到達する過程を描く。しかし，ここでも江西の省都南昌での活動が省略され, クロノロジーは軽んじられている[79]。その中で，クローズアップされるのが，第 6 章の南京における異教の博士たち（Heydensche Doctooren）との論争であり，日本の部でメンデス・ピントによってザビエルの論争を紹介したのと同じ趣向である。

第 7 部「信仰の確立」(pp.232-244) では，リッチが北上する傍らで，広東の韶州で草の根の布教を行っていたニコロ・ロンゴバルドが挙げた成果（1 章），マカオのイエズス会士が反乱の首謀者であるとのうわさから始まった騒乱に中国人イエズス会士（助修士）が巻き込まれて獄死した事件（2・3 章）[80]，南昌での学生たちの布教反対運動とこれに対する神父の弁明[81]（4 章），リッチの死（5 章）と，ここまでがトリゴーに準拠した記述だが，ポスト・リッチについては，2 章分しか充てられない。第 6 章では，セメードに依拠すれば彼自身が受けた国外追放とそこからの挽回の過程を 1630 年代前半までは追うことが可能であるにもかかわらず，迫害に簡単に触れるだけで，上海で活動していたフランチェスコ・ブランカト神父が「我々に」数か月前に送ってきた手紙の中で 1657 ～ 59 年に彼が 40000 人に授洗したといったような清初の話にジャンプする[82]。第 7 章では,「シナ布教の重要の柱の 1 人だった彼の死を述べずにこの話を終える

---

[79] 具体的には , トリゴーの第 3 書第 10 ～ 14 章 , 第 4 書第 1 章～ 5 章の内容がスキップされている。

[80] 彼がキリストと同年齢の 33 歳 , 同じ時刻に息絶えたことが特筆されている（p.236)。

[81] この場合は , 神父は居住を当局から認められたものの , 布教は禁止され , 全面勝利とはならなかったが , 中国の布教報告には , 地元の知識人が布教に反対→イエズス会側が親キリスト教の官人に陳情→教会保護の保証を得て反対の声を抑え込む , という事例が間々見られる。拙稿「イエズス会士フランチェスコ・サンビアシの旅」『アジア史学論集』3，2010, pp. 30-69 を参照。

[82] 有名な永暦朝廷における皇帝の家族（母 , 妻 , 王子）の改宗とローマへの使節派遣に触れるが , 永暦を皇帝ではなく , 副王（Vice-Roy）とし , 派遣されたのがイエズス会士ミハイウ・ボイム

ことはできない」（p.241）としてロンゴバルドの死（1654.9.1）に触れる。「イエズス会に入って73年，シナで58年を過ごした」長老はリッチ死後の布教方針を定めた点でも極めて重要な役割を果たしたのだが，殉教者ではない彼（本書では日本でも後に続く各地においても，掉尾は殉教者の花冠で飾られることが多い）にこの位置が与えられたのは[83]，章末に引用されている順治帝が揮毫した碑文ゆえであろう。これは，墓所を王朝から与えられたリッチよりも，教会の社会的地位が上昇したことを示している。

「付録」では，最近の情勢として，フェルディナンド・フェルビーストの1660年7月5日，1661年5月7日付書簡を紹介する。フェルビーストは，当時清朝の欽天監を主導していたアダム・シャールから後継者として北京に呼ばれた。書簡は西安から北京に至る道中の信者そして当局の神父に対する歓待について述べる。フェルビーストも，この手紙に「異教徒の帝王がかくも福音の伝道師に敬意を払われていることについて神を讃えるべきである」と付記したフィリップ・クプレもネーデルラント出身である[84]。もう一通は，順治帝の死後なおもその母（康熙帝の祖母）が自らをシャールの娘と称していることを記す。シャールが永楽帝の命で鋳造された巨鐘を移動させたことに言及されているが，エルフルトの巨鐘へのキルヒャーの言及に触れているところを見ると，少なくともこの付録の執筆の段階では『シナ図説』を見ていた可能性が高い[85]。

最後に短い「結論」が置かれる。その趣旨をまとめれば，「神はこの遠方の強国だけでなく，まだ異端ないし偶像信仰の闇に沈んでいる国の人々にも光をもたらそうとしている。また，我々の国内や近隣の分派主義者の閉ざされた目，無知蒙昧を照らし出し，ローマ・カトリックの光と力を理解させるだろう」といったところになる。

であるにもかかわらず，単に使節としか記さない（p.241）。

[83] 本篇で，図版はわずかに2点，ルッジェーリの中国入りの場面とロンゴバルドの説教の場面だけである。

[84] クプレの出身地をメヘレンとわざわざ記しているところを見れば，この書簡はクプレ経由で入手したものであろう。フェルビーストの書簡を集めたH.Josson, S.I. and L. Willaert S.I. eds., *Correspondance de Ferdinand Verbiest de la Compagnie de Jésus*（*1623-1688*）, Palais des Académies, 1938はこの2書簡をハザルトから収録している（pp.38-41,107-108）。

[85]『シナ図説』には，北京とエルフルトの鐘を並べた図が載る。

トリゴーと比較すると，記述のバランスをいささか失しているように見えるが，冒頭の詩のタイトルが「数世紀にわたって閉ざされていたシナがイエズス会士によって開かれた」とあるように，ハザルトの強調点は門戸をこじ開けた難業にあって（「5 回のチャレンジ」をリフレインしているのもそれを示す），その後の布教の具体的営為について詳述する必要を認めなかったのだろう。リッチが入華してから北京に到達するまでには 19 年かかっており，その間に彼の中国文化への適応策が編み出されてゆくのだが[86]，ハザルトの関心はそこにない。

また，中国布教は日本と異なり，殉教者を生み出していない（前述のように，マカオの騒動の時に中国人イエズス会士が獄死してはいるが[87]）。1616 年に始まった南京教難[88]が本篇でほとんど取り上げられないのも，宣教師が追放されただけだからだろう（しかも，実際に追放されたのは 4 人に過ぎない）。しかし，それを補うのが，皇帝への接近であった。ここでは清朝の皇帝による会士優遇には簡単にしか触れられていないが，本巻の付録でたっぷりと取り上げられることになる。

・モゴル大王国史（pp.245-278）

モゴル（ムガル）と題しているように，ポルトガルの根拠地であるゴア周辺での布教の話は扱わない。大国の皇帝にイエズス会士が受け入れられたドラマ性ゆえにムガル宮廷の話が取り上げられる[89]のは見やすい道理だが，第 1 章の「土地，アグラ市の記述」，第 2 章の「統治と政治権力について」はともかく，第 3 章の「モゴルの宗教」が，冒頭で「マホメット，バニアン，ブラフマン，ラージプート」の 4 主要宗派があると言いながら，イスラームについては全く紹介しないのはいぶかしい。ここでは，世界の創成とヴィシュヌの化身アヴァタールを絡めた話が大半を占めるが，その出典について「7 年間この地で暮らしたオランダ人宣教師の報告の第 1 章」（p.248）としか言わ

---

[86] 拙稿「天主と耶蘇」, 前掲注 51 斎藤編著 , pp.202-235.

[87] スピノラらとともに鈴田の牢獄に入れられ , 衰弱死したイエズス会士アンブロジオ・フェルナンデスは他の処刑者とともに列聖調査の対象になっている（そして 19 世紀に列福された）ので , この中国人も「殉教者」と言えないこともない。

[88] Adrian Dudink, “Nangong Shudu（1620）, Poxie ji（1640）, and Western Reports on th Nanjing Persecution（1616/1617）,” *Monumenta Serica*, 48, 2000, pp.133-265.

[89] 図版 3 点のうち 2 点はそれに関するもので , もう 1 点はルドルフ・アックァヴィーヴァらの殉教である。

ず，彼の宣教活動について触れることもない（「海外宣教はカトリックの専売特許」と主張するハザルトからすれば，そうせざるを得ないのだろう）。いずれにせよ，このオランダ人宣教師のフィールドは南インドだったはずなので[90]，本来これに続くヴィジャヤナガルのところで記すべき内容である。なお，本章にはオランダ人ヨリス・アンドリーセンが語るアーマダバード総督の残忍さを示すエピソードを収録するが，宗教とは無関係である。ほかにもドイツ人の旅行家マンデルスロのサティー（妻が夫に殉じて火に身を投げる）の記述を引くなど，情報源の多様性をアピールすることに狙いがあるのかもしれない。

そもそも，カトリック側はヒンドゥーへの布教を行う関係上，それを当然研究していたのであるが，その「偶像信仰」や世界観について現場の宣教師がヨーロッパの公衆に紹介することは長らくなかった。ヒンドゥー教徒ともっとも密に接し，その世界への溶け込みを図ったロベルト・デ・ノビリにしても，著書は公刊していない。イエズス会士でヴィシュヌの化身の話を最初に公にしたのは，海外宣教経験がなく，ローマにいたキルヒャーの『シナ図説』である。それに先んじて，研究の成果を世に問うたのはプロテスタントの宣教師アブラハム・ロゲリウスであった[91]。

第2章では，フランスのイエズス会士ピエール・ド・ジャリックの『インド宝典』（フランス語原版のラテン語訳，ケルン，1615刊[92]）が使われているが，この後も本書は各所で用いられる。ジャリックは海外布教の経験はないが，やはりイエズス会士であるルイス・グスマン[93]やフェルナン・ゲレイロの東方伝道記の総集を参考にしている[94]。

---

[90] この宣教師が誰を指すのかわからない。この時期にオランダ人宣教師でヒンドゥーの世界観について本を出したのは，アブラハム・ロゲリウス（1651刊）とフィリップ・バルダエウス（1672刊）の二人だが，前者がコロマンデルで暮らしたのは10年間だし，アヴァタールについて説明するのは第2部第3章である。後者は本巻より刊行が遅いし，バルダエウスがヨーロッパに戻ってきた時期も本書刊行以後である。

[91] ただし，オランダ人はイエズス会の研究を利用している。ロゲリウスについてはその貸借関係は知られていないが，バルダエウスがイタリア人会士ジャコモ・フェニチオの論文（1609）を使用したことはつとに指摘されている。Donald F. Lach and Edwin J. van Kley eds., *Asia in the Making of Europe Vol.3, A Century of Advance Book Two:South Asia*, The University of Chicago Press, 1993, p.911.

[92] リストが1595年とするのは誤りである。

[93] 邦訳『グスマン東方伝道史』新井トシ訳，天理時報社，1944-45.

[94] 本書の意義については，Geneviève Bouchon, “L’Asie portugaise : au début du XVIIe siècle,

第 4 章以降でムガル宮廷での布教活動が取り上げられる。日本や中国と異なり，皇帝アクバルの側から会士にお声がかかったのである。諸宗教・文化の包摂によって権威を高めようとする政策の一環がイエズス会士の誘致であった[95]。改宗の見込みなしとみて宮廷を去ろうとしてもそれが許されない理由を神父たちが問うたのに対し，アクバルの側近の Abudulfasil（アブル・ファズル）が「彼の力と光輝を示すために，宮廷にあらゆる種類の民を置きたいと願っておられるのだ（hy, tot bethooninghe sijnder macht ende luyster, in sijn Hof wilde hebben all soorten van natien）」と答えた話（p.254）がそれを示しているだろう。イエズス会士はムスリム・ヒンドゥーの間に少数の信者しか獲得できなかったが[96]，宮廷において一定の地歩を占めたことは一つの勝利であった。

ハザルトにとってもそうであった。アクバルの入信の障害を①三位一体に対する無理解，②王の多忙[97]，③多妻に帰し（p.253），アクバルが「頑迷（hertneckigheyt）」のために 5 つの罰を受けたことを示した（p.257）直後に，第 11 章として「王のキリスト教徒に対する好意」を立て，第 12 章では神父たちがなしとげた改宗や成果を強調する[98]。その成果の象徴が, ヘロニモ･ザビエルがペルシア語で著した『イエス伝』であっ

---

introduction à une nouvelle lecture de Pierre du Jarric," Lúis Filipe F.R. Thomaz ed., *Aquém e além da Taprobana : estudos luso-orientais à memória de Jean Aubin e Denys Lombard*, Centro de História de Além-Mar da Universidade Nova, 2002, pp. 107-115 を参照。

95 このアクバルの「包摂」を追究してきたのがムガル史家の真下裕之で , イエズス会士とのかかわりについては ,「帝国のなかの福音 – ムガル帝国におけるペルシア語キリスト教典籍とその周辺」（注 51 斎藤編著 pp.236-283）でヘロニモ・ザビエルがムガル宮廷のために作った各種のテキストを精緻に分析している。

96 C. H. Payne tr. *Akbar and the Jesuits. An Account of the Jesuit Missions to the Court of Akbar. By Father Pierre Du Jarric SJ*, George Routledge, 1926.

97 神父たちが , 日本の君主たちは多忙であるにもかかわらず , 政務のない夜間に信仰を学習している例を挙げると , アクバルはその場では色よい返事をしたものの口先だけだった , という話を紹介する。

98「マホメットの説教師」との論戦に三度勝利したことも記される（p.252）が , これまで見てきた日本･中国と異なり , 論戦の具体的状況については材料がなく , 紹介していない。逆にイスラーム側がジャハンギールの前でザビエルがムッラーにやりこめられた記録が残っている。Muzzafar Alam and Sanjay Subrahmanyam, "Catholics and Muslims in the Court of Jahangir (1608-1611)," Ids., *Writing the Mughal World: Studies on Culture and Politics*, Columbia U.P., 2011, pp. 249-310.

た。アクバルがこれを毎日読んだこと，第一の臣下 Agiscoa（アジズ・コカ）に読んで聞かせたことが記される[99]。

第 14 章でアクバルの死について述べた後，後をついだジャハンギールの宮廷に接近を図ったイングランドの使節ウィリアム・ホーキンス（15 章），トマス・ロー（16 章）の観察記録を引用する。ハザルトは，彼らの記録がローマ・カトリックにとって特記すべき点を 3 つ挙げる。

① 使節はピューリタンだが[100], 宗教のことを語っていない。ペルーのフランシスコ・ピサロ，コンゴのディエゴ・カノ，メキシコのエルナン・コルテス，マラニャンのムッシュ・ド・ヴォーら各地の開拓者は信仰について語ったが，カルヴィニストは「永遠（eeuwigh）より一時（tijdelijck）の利益を優先する」。

② 彼らはカトリックの布教を許容している。

③ 彼らに対する君主の扱いが軽い。豊後王はザビエルの首をかき抱いた。ヴァリニャーノは日本の皇帝太閤様を訪問した時[101], 太閤様は居並ぶ諸侯の中で彼を呼び寄せ，着帽させたままで，自身とほぼ同等であるかのように神父を扱った（handelt met hem schier als met sijns ghelijcke）。ゴンサロ・デ・シルヴェイラはモノモタパ王の隣席を与えられた。ヘロニモ・ザビエルはモゴル王の座るクッションに座ることが認められた。ニコラス・ピメンタもチダンパラン公の隣への着席が認められた。シモン・デ・サはナルシンガ（ヴィジャヤナガル）王にその着衣に触れられるように近くに来るように命じられた。ペドロ・パエスはモール人の地（エチオピアを指す）の皇帝の側近くに着帽のまますわった。カトリックの宣教師がみすぼらしい恰好をしていても，強力な王の美々しく着飾っ

---

[99] ハザルトは出典を示していないが , ジャリックによるものである。第 14 章でも再びアクバルの『イエス伝』愛読に言及するが ,「イエスが起こした奇跡は純粋に人間業によるものであり , 彼は熟練した医者なのである」というアクバルのコメントも書き留めている（p.264）。『イエス伝（神聖性の鏡）』には , 英訳 Pedro Moura Carvalho ed., Wheeler M. Thackston tr., *Mir'āt al-quds*（*Mirror of Holiness*）*: A Life of Christ for Emperor Akbar*, Brill, 2012 があり , 前掲真下論文に詳しい分析がある。

[100] 二人をピューリタンとした根拠は分からない。

[101] 天正少年使節の帰国に伴って来日し , インド副王の使節として秀吉に謁見した。本書でも言及されている。

た使節よりも歓迎されるのは，神の叡慮による（pp.269-270）。

①②は交易の目的のためにやってきている彼らにとって痛くもかゆくもない批判だが，ハザルトは他のところでもこの「永遠と一時」をカトリックと異端の対比に用いている。③では異教（エチオピアは「異端」）の王のもとでの宣教師（すべてイエズス会士）の厚遇を総動員した感がある（シルヴェイラ以下については，この後に実際に述べられることになる）。挿入されている「ザビエルがモゴル王と席を並べている図」は非現実的だが[102]，ハザルトのメッセージを端的に伝えるものではある。

アクバルを継いだジャハンギールも父同様にあるいはそれ以上にイエズス会士に好意を示した。彼はとりわけ聖人の絵を好み，磔刑のイエス像が壁に掛けられていた（イスラームでは，イエスは磔刑に処されず，昇天する。前掲の『イエス伝』は磔刑について述べるが，写本に付されたミニアチュールにそのシーンはない）[103]。そうしたジャハンギールの好意の話が第 20 章では取り上げられるが，途中でいきなり「現状」に話が飛ぶ。

ハザルトがここまでの記述のよりどころにしてきたのはほぼジャリックだが，彼のフランス語原版 3 巻本（1608-1614 刊）の情報の下限はさらにそれに先行し，ジャハンギールの治世（1605 年に開始）の初年までである。あとをついだシャー・ジャハンは王子の時代からイエズス会だけでなく，ヨーロッパ人に対して総じて敵対的であり，イエズス会士が宮廷で活躍する余地は狭まった。こうした事情がハザルトの記述にも反映している。「現状」として，ハザルトの地元ネーデルラントのナイメーヘン出身のヘンリクス・ユーエンスがアグラで王子の教師を勤めている[104]ことに触れるが，具体的な事績は述べられない。「2 年前に」やはり地元ブリュッセル生まれのアルベルト・ドー

[102]『アクバル・ナーマ』の写本には，アクバルの御前で宗教論議が描かれた絵があり，イエズス会士がそこに伺候している。Michael Brand and Glenn D. Lowry, *Akbar's India: Art from the Mughal City of Victory*, The Asia Society Galleries, 1985, p.53.

[103]ただし、磔刑が描かれた例がないわけではない。サドルッディン・アガ・カーンのコレクションにあるアクバル・ジャハンギール期のミニアチュールに，おそらくはヨーロッパの版画をもとにした磔刑画がある。B. N. Goswamy and Eberhard Fischer eds., *Wonders of a Golden Age*, Museum Rietberg, 1987, p.40.

[104]1618 年に生まれ ,1634 年にイエズス会に入会。47 年に渡印し，宮廷に向かうが，シャー・ジャハンはキリスト教に冷淡だった。そこで，長子のダーラ・シコーに近づくが，王子はアウラングゼーブに敗れ，これが宮廷における活動の致命傷となった。注 11 書，vol.4. p.3866.

ヴィルがヨーロッパとシナ間の陸路開拓の途中にアグラで客死したことを記すが，インド布教とは無関係である。ハザルトは，「以上からキリスト教が移植されて98年[105]になるが，今なお花盛りである」とするが，まったく説得力がない。さらに，ごく最近の情報としてモロッコの王子でキリスト教に改宗し，イエズス会に入ったバルタザール・ロヨラがインドに向かったことを記す（彼はフェズ篇でも取り上げられる）が，かかる奇跡的な存在（ムスリムの「君侯」が改宗したという例はごくまれ）がインドに赴いたからといって布教状況が劇的に改善するはずがないことは，ハザルトにもわかっていただろう。

冒頭の詩では特にヘロニモ・ザビエルが賞賛される。「勇敢なおじ」[106]に続き，インドに赴き，宮廷で偶像崇拝者やサラセン人に勝利を収めたとするが，むろん事実ではない。しかし，ザビエルの存在がムガル布教のハイライトだったには違いない。こうした支配者側の「包摂」と宣教師の奉仕がかみ合うことのないままに共存する事態は，後の清朝でも起きる。

・ビスナガルまたはナルシンガ王国史（pp.279-310）

分量的にはムガル篇を上回っているが，じつはヴィジャヤナガルの核心部に直接関連する記述は半分以下にすぎず，多くはヴィジャヤナガルの藩属国（しかも実質上独立していた）に関連するものであり，「東南インド」と銘打ったほうが妥当だが，16世紀の南インドの大国を看板に掲げたほうが通りはよい。

第1～3章は例によって土地と宗教の状況を述べるが，上述したようにヒンドゥーの記述はムガル篇でも行われており，記述は薄い。第4章はイエズス会の巡察師ニコラ・ピメンタの1597年からの南インド巡察を扱う。ここで前出のチダンバランの君侯に隣席を与えられという記事が出てくる。

第5章は1606年にマドゥライ王国に派遣されたロベルト・デ・ノビリの記事である。インドの「リッチ」として今日の研究でも人気があるノビリだが[107]，本書でも彼の現地

---

[105] 起点と終点がはっきりしないが，ムガル布教のきっかけとなった事件が起きた1578年から本書刊行の1667年までに98年は収まらないので，88年の誤りだろう。

[106] フランシスコは彼の大おじである。

[107] 代表的な研究はInes G. Županov, *Disputed Mission: Jesuit Experiments and Brahmanical Knowledge in Seventeenth-Century*, Oxford U.P., 1999.

のヒンドゥーへの適応策にかなりの紙幅が割かれている（5 ～ 7 章）。しかし，今日の研究（少なくともヨーロッパ人の研究）が彼の布教をめぐるイエズス会，インドの司教区，ローマの対応に焦点をあてるのに対し，ハザルトの記述のハイライトはノビリとブラフマンの対立にある。第 7 章「悪魔がロベルト神父とマドゥライの信者たちに大迫害を仕掛ける」では，800 人のブラフマンがノビリの出頭を求めて彼の前で読み上げた文章，これに対してノビリの師（ヒンドゥーを彼に教えた）が出した助け舟の文言（いずれもかなり長文）が引用され，ノビリ自体はどちらかといえば影が薄い。ノビリに師事して信者となったアルベルト，そのもとの師でありかつてはノビリと論争したパンダラなど，神父の周囲にいた人々のほうが主役にすら見えてくる。ノビリが「土地の学者たちの衣服は美しすぎて，我々のみすぼらしさに相反する」と言ったのに対して，「もし自分だけ聖人になりたいのなら，好きな服を着ればよい。しかし，他人が聖人になるよう手伝い，布教によって多くの弟子を持とうとするなら，彼らの流儀に従わねばならない」と助言して，ノビリにポルトガル人の服（この場合は修道服）を棄てさせた（p.288）のは，パンダラであった。

第 9 章から第 14 章まではヴィジャヤナガルで布教が許可されるに至る経緯を述べる。第 9 章には，前出のシマン・デ・サに対して Oboragin（オボ・ラージャ？）が神父を傍らの絨毯に座らせ，布教の支持を約束した話が出てくる。そして，第 10 章でナルシンガ（ヴィジャヤナガル）の王（ヴェンカタ 2 世）に布教の許可を得，最終章では，王が毎日のように神父たちに会っていたとして，1600 年に王と王の甥がイエズス会宛てに送ってきた書簡を引用する。ところが，この後のヴィジャヤナガルの政治変動（1614 年のヴェンカタ 2 世の死後，衰亡に向かう）には一切触れず，1609 年から一気に飛んで，52 年に刊行されたサンソンの『アジア図』に「イエズス会はこの王国で大きな成果をあげている」とある記述を引く。地図の情報は往々にして現状を反映しておらず，この場合も過去の話にすぎない。ムガル篇同様，ジャリックに主に依存しているのである。

しかし，本篇についてはハザルトは最近の情報も有していた。イタリア人会士ジャシント・デ・マジストリスがプロクラドールとしてローマにおもむいた時に刊行した『マドゥライのキリスト教について』（イタリア語，ローマ，1661 刊）であり[108]，1655 ～ 59

[108] 本書については，前掲注 91 所掲書 p.1058 を参照。1655 ～ 59 年の状況を述べたものである。ラッ

年の入信者の地方別の数の統計（計 9231 人）が示されている。ハザルトはローマ刊行の書物をあまり使わないのだが, これは数少ない例外である。この本を使うことで,「神父○○の徳と死」の項を設けることができた。1656 年に亡くなったノビリを始め，ポルトガル人シマン・モラト（1655），マドゥライ布教においてノビリにつぐ第二の柱であったマヌエル・マルティンス（1656），ステファン・アレシ（1659），そしてリトアニアの貴族出身のガブリエル・レンテコスキー（1659）の 5 人である。ノビリについては, その異色の布教方法のために「異教徒, 背教者, イエズス会の迫害者（Heydensch, Apostaet, ende vervolger der Societeyt）」との評判が東方全体さらにヨーロッパにまで広まったが，インドのセラの大司教フランシスコ・ロス[109]，枢機卿ロベルト・ベラルミーノ（いずれもイエズス会士），さらには異端審問所長官と次第に味方を増やしていったことを述べる。こうした布教方法をめぐって中国の典礼問題と似たようなことが起きるのは，次の世紀の話になる。

・ペルー史（pp.311-352）

冒頭で「長々と東インドについて述べてきたが, ここで西インドに転じる」と書くが, なぜペルーから始めるのかは記されない。布教の前後関係からすれば，メキシコあるいはフロリダが先にくるはずである。**第 1 部「土地と住民」**（pp.311-322）の第 2 章で,「新世界」に人類がどのようにやってきたのかが述べられるが，16 世紀から当時に至るまで熱っぽく議論されてきた（一世代前には，フーゴ・グロティウスとヨハネス・デ・ラートのオランダ人同士の論争があった[110]）が, この問題で主として論じられるのはペルーであることが関係しているかも知れない。ハザルトは諸説をその典拠（書名は引かないが，第何部・書・章まで示す。たとえば，フランシスコ会士フアン・デ・トルケマダの『インドの王代記』セビーリャ，1615 年刊の場合，Ioannes de Torquemada.3. p.lib.15.Cap.49 と示す）を明示しつつ紹介したうえで，彼自身はペルーの住民は洪水後

クがそこで言うように , プロクラドールの仕事は宣教師のリクルートにもあるので , 景気のよい話が中心になる。

[109] マラバールのトマス派への布教に長年携わっていた人物である。Antony Mecherry S.J., *Francis Ros S.J., and the Method of Accommodation among the Christians of St. Thomas in Malabar*（*1584-1624*）, Pontifical Gregorian University, 2016.

[110] Joan- Pau Rubiés, “Hugo Grotius's Dissertation on the Origin of the American Peoples and the Use of Comparative Methods, “ *Journal of the History of Ideas*, 52-2, 1991, pp.221-244.

にヤペテとともにタルタリアから渡ってきたのではないかと言い，その根拠として移動生活を営むチリの人々の風習が昔のタルタル人に似ていることを挙げる。そして，タルタル人が移住してきたのは Torriellus（Torniellus）に依拠して大洪水の 274 年後だという。ジローラモ・トルニエリはイタリア人のバルナバ会士で，『教会年代記』を記した枢機卿チェーザレ・バロニオと友人関係にあり，彼自身の『聖俗年代記』が 1610年にミラノで刊行されている[111]。クロノロジーには割合ルーズなハザルトにもこの問題はそれなりに気になったのであろう。

風習・宗教については，イエズス会のホセ・デ・アコスタの『インディアスの自然・道徳史』[112]，インカの王統については，インカ・ガルシラーソ・デ・ラ・ベガ『インカの起源に関する王族の注釈』[113] からの引用が多い。しかし，二書やその他に使ったスペイン語の著述の多くは冒頭の文献リストには挙がっていない。

第 2 部「スペイン人のペルー到来」（pp.322-331）では，ピサロ率いるスペイン人のインカ征服の過程を記す。スペインと戦うオランダはドミニコ会士バルトロメ・デ・ラス・カサスの記述を利用して，スペイン人のインディオに対する暴虐を示す「黒い伝説」を広めて，彼らへの暴虐と重ね合わせたが[114]，ハザルトはスペイン人の蛮行を認めつつも，第 5 章で「すばらしい，敬虔な人が，自分と無関係な他人の非行に罪を負うことがあろうか（wat schult kan een treffelijck, ende godt-vruchtich man hebben in het misdaen van een ander, met het welck hy niet en mede-gewrocht?）」（p.328）と述べたうえで，皇帝アタワルパの死の場面の描写に入り，彼の死はペルー人の通訳フェリペがアタワルパの妃に懸想し，ピサロに対してアタワルパが謀反を企んでいると誣告したことに始まるとして，ピサロを免罪する。

そして，突如ゴイセン批判が始まる。曰く，「ゴイセンはこの殺害についてピサロを批判するが，私はその中傷をやりすごすわけにはゆかない。アタワルパは残忍な男で，

---

[111] ハザルトのリストには挙がっていない。*Annales sacri et ex profanis praecipui ab orbe condito ad eumdem Christi passione redemptum.*

[112] 邦訳『新大陸自然文化史』上下 , 増田義郎訳 , 岩波書店 , 1966.

[113] 邦訳『インカ皇統記』1, 2, 牛島信明訳 , 岩波書店 , 1985 は，その第一部を翻訳したものである。

[114] Benjamin Schmidt, *Innocence Abroad: The Dutch Imagination and the New World, 1570-1670*, Cambridge U.P., 2001.

200 人の兄弟や甥たちをだましてクスコに呼び寄せたうえで殺し，王の血を引く女・子供を殺した。ガルシラーソは『ワスカルの死体を切り刻み，食べさせた』といい，アコスタは『小便を飲ませたうえで火あぶりにした』と書いている[115]。スペイン人は化け物を殺し，正当な君主（ワスカル）を支持したのである。ソトやペドロ・デル・バルカに対してワスカルが支援を求めていたのがその証拠である。ピサロはアタワルパに金銀を供出すれば釈放すると約束してそれを果たさなかったけれども，アタワルパがこの交渉の一方でワスカルを殺害させたのを見れば，ピサロは責められるべきではない。ここまで述べてきたことで，スペイン人の行為は正当化されるのであり，これで中傷者の口をふさぐのに十分だろう」と長広舌をふるい（pp.329-331 の記述を縮約），ピサロならびにスペイン人一般を免罪するのである。

第３部「キリスト教について」（pp.331-344）では，第１章「キリストの死の直後にキリストの信仰がペルー人に告げ知らされたかどうか」で，諸家を引用しながら使徒による布教が行われたかを検討し，トマス・アクィナスの「トマスは他の使徒よりも弱く疑り深いが，その後もっとも強くなった。なぜなら彼は全世界の彼を殺そうとする人々の間を歩き回ったからである」という記述と，インドについての旧史書やインディオの間に伝わっている Zume の名，彼が残した岩への足跡，それが起こした奇跡，インド人のことに触れる古代教会の賛美歌，そして世界の各所での伝承からして，トマスがやってきたことは明らかであるとする（p.333）。インド，中国，そしてアメリカと大忙しだが，トマスの渡来説はむろんハザルトの専売特許ではない[116]。

インドや中国とは異なり，新大陸ではその後キリスト教は全く痕跡を消したが，第２章ではその到来がインカによって予言されていたことが述べられ，第３章では，最初に信者になったのはインカの神であるパチャカマックに「新しい人々がやってきて真実の法を伝える」と夢で告げられていたクスコの老人だとする。そして，ドミニコ会についでフランシスコ会の布教が始まったことを述べ，フランシスコ会の一員としてメヘレン出身のヨース・デ・レイクがキートを皮切りに次々と修道院を建設していっ

[115] ガルシラーソの該当箇所は，第２部第１書第33章「アタワルパの狡猾とインカ王ワスカルの死」。
[116] Louis-André Vigneras, “Saint Thomas, Apostle of America,” *The Hispanic American Historical Review*, 57-1 , 1977, pp. 82-90.

たことをシエザ・デ・レオンの『ペルー年代記』121 章[117] から引用し，彼がフェリペ 2 世に愛され，現地語でカテキズムを作ったことに触れ，彼がヘントに送った手紙を引用する。その中には「インディオは正しい生活を送っており，法や書物や文字文化を豊富に有する人々よりもすぐれる。」という一文があった[118]。

第 4 章では，数えきれないほどの「偶像神」の存在を認めるペルー人に対するドミニコ・フランシスコ両会の奮闘について述べ，第 5 章から第 8 章までは 1552 年にやってきたアウグスティノ会の布教を取り上げる。先行する二会より記述が豊かなのはボリビア生まれのアントニオ・デ・カランチャ（1584-1654）の『布教史』（バルセロナ，1639 刊）[119] が存在するからで，こうした一貫した布教史は当時のイエズス会も持っていなかった。しかも，本書はフランドルのアウグスティノ会士ヨアヒム・ファン・デン・ブルエル[120] がラテン語に翻訳して刊行している（アントワープ，1651-52 刊）。ハザルトは両書ともリストに挙げる。本文ではカランチャの名前のほうがよく掲出されるが，むしろ地元刊行のブルエルの本を自家薬籠中のものにしていただろう。ライデン大学の神学教授ヨハンネス・ホールンベークがカルヴィニズムの海外布教の方法論を説いた『インディオと異教徒の改宗について』がほぼ同時代に刊行されているが（1669），やはりブルエルを多用している[121]。本部の最後には，ビルカバンバのインカ政権の王に対して布教を試み，殺されたディエゴ・オルティスを扱う[122]。

第 4 部「カトリック信仰のさらなる普及」（pp.344-352）では，後発のイエズス会が

---

[117] 邦訳『インカ帝国史』増田義郎訳 , 岩波書店 ,1979.

[118] 1515 年頃にフランシスコ会に入会。1533 年にアメリカに渡った。キートには 1535 年に到着。

[119] Sabine G. MacCormack, “Antonio de la Galancha. Un Agustino del siglo XVII en el Nuevo Mundo,” *Bulletin hispanique*, 84-1/2, 1982, pp.60-94.

[120] 彼は会の先輩であるメンドーサの『シナ大王国志』も翻訳している。

[121] Ineke Loots and Joke Spaans eds., *Johannes Hoornbeeck（1617-1666）, on the Conversion of Indians and Heathens : An Annotated Translation of De conversione Indorum et gentilium（1669）*, Brill, 2019.

[122] オルティスはビルカバンバの王ティトゥ・クシが第二の妻を持つことに反対したため , 王の死後にその女性が王の殺害を彼に帰して殺された。ビルカバンバの陥落後 , 神父の遺体はクスコに運ばれた。列聖への運動は 1608 年に始まったが , 中断した。再開されたのは 1991 年で , クスコやリマでの調査が終わったのが 98 年。現在 , ローマで審理が進行中である。Andrew Redden ed., *The Collapse of Time: The Martyrdom of Diego Ortiz（1571）by Antonio de la Calancha [1638]*, De Gruyter, 2016.

1568年にやってきてからの布教史を扱う。ペルーのイエズス会において最も存在感があるのはアコスタである[123]。彼の布教方法は，プロテスタントのホールンベルクも頻繁に引用するように宣教にあたっては大いに示唆を含んだものだった。しかし，ハザルトは前述のように第一部でアコスタを多用したものの，宣教師としての彼については，第2章で銀が生み出す富のゆえにあらゆる罪の巣窟となっていたポトシが彼の働きで一変したことを記すものの，ペルーのイエズス会士の一人としてしか扱っていない。それはハザルトが「方法論」を主眼としていないからであろう。

最終第4章では，信仰のために殺された会士3人について述べた後，山間の奥地を除いてカトリック化は完了したという。17世紀のペルーの布教において重要な場面である信者が隠し持っていた偶像の摘発とその破壊運動[124]について触れることはない。

・メキシコ史（pp.353-374）

第1章では，ナワ族の9世紀における南下により，巨人族が征服されたことを述べるが，その先住民のルーツについては何も言わない。第2～4章で宗教について述べた後，第5章でスペイン人の到来を扱い，第6章ではキリストの信仰をメキシコで説くことを求めた最初の人物はコルテスだとする（p.360）。彼は残忍な供犠に心を痛め，王のスペイン人に対する慇懃さを信頼して信仰を説き，目を開いて真の神に仕えるように言ったとする。第7章では，モクテスマらアステカ宮廷の人々の前でコルテスが行った演説を記し，彼に布教のパイオニアの地位を与えたうえで，メキシコで大きな存在感を持ったフランシスコ会を扱う。メキシコ布教史の「神話」となっているマルティン・デ・バレンシアと「12人」の神父よりも，助修士ピーテル・ファン・ヘント[125]（ネーデルラント出身）をクローズアップし，彼が故郷にあてた1529年6月27日書簡を長

---

[123] アコスタの布教を他の宣教師の布教と相対化してその問題点を鋭く揚抉したのが，網野徹哉「適応に抗した宣教者たち― アルバレスとデ・ラ・クルスの場合」前掲注51 斎藤編著，pp.391-423.

[124] 斎藤晃『魂の征服―アンデスにおける改宗の政治学』平凡社，1993.

[125] スペイン名，ペドロ・デ・ガンテ。岡田裕成は，ガンテが先住民のために開いた技芸学校で作られた羽飾りを題材として，圧倒的に非対称な植民地空間において収奪される先住民が同時に支配文化についてのリテラシーを獲得したとする。前掲注51 斎藤編著，pp. 286-318. 16世紀の爆発的とでも評すべきメキシコの改宗は，暴力を背景とした圧伏という観点にのみ立つ限り，理解できないだろう。

文引用する（p.363）。第 9 章でようやくバレンシアらが登場するが，ドミニコ会のチアパス司教フランシスコ（ママ）・デ・ラス・カサスのカール 5 世への手紙などがこの 13 人が数年で 2000 万！のインディオに信仰をもたらしたことを記しているとする。

リーダーのマルティンについては，「著名なフランス人史家」フロリモンの第 1 書第 4 章の「ドイツでマルティンという僧（ルター）がヨーロッパの教会を圧服させようとしている時に，もう一人のマルティンが福音を新世界に広めている」（p.364）という記述を引用する。フランスの法律家でモンテーニュの最期を看取ったフロリモン・ド・レイモン（1540-1601）の『本世紀の異端の発生・進展・衰退』[126] は，この後何度も出てきて，重要なアクセントの役割を果たす。

以後は到来順に，ドミニコ会（10 章），アウグスティノ会（11 章），イエズス会（12 章）と続け，第 13 章でフランシスコ・ドミニコ会の「信仰による死者」を挙げた後は，第 14 章ゴンサロ・デ・タピア（1593），第 15 章エルナンド・デ・トバルら 8 人（1616），第 16 章フリオ・パスクワルら 2 人（1632），第 17 章ネーデルラント出身のコルネリウス・ボーダン（1650），アントニオ・バシリオ（1652）と，間欠的に原住民に殺害されたイエズス会士の記述が並ぶ。そして，これらのカトリックの勝利はその他のセクトを恥じ入らせるものであり，それまで法も理性も知らなかった蛮人に人間らしい生活を送らせ，人の血を飲み，肉を食らっていた者たちが聖体を拝領するようになったと述べ，「使徒的魂は今でもローマの宣教師の中に息づいており，それがあらゆる分派主義者に欠落していることは明らかである」とする。

ブラジル史（pp.375-398）

第 1 ～ 4 章で，土地と住民の宣教以前の状況が述べられる。「ある著述家」が評する「世界で最も完璧な土地（volmaeck landt dat ick oyt inde wereldt hebbe gesien）」に，ジャリックが言う「東西インドを通じて最も残忍な人々（sy all inwoonders van *Oost*, ende *West-Indien* in wreetheyt[127], verre te boven gaen」（p.375）が住んでいるという逆説を提

[126] 本巻のリストには挙がっていないが , 第 2 巻にはケルンで 1646 年に刊行された蘭語版が , 第 3 巻ではその蘭語版に加えて , 1624 年パリ刊行の仏語版第 2 巻が挙がっている。本書は当時 , 非常によく読まれた。Barbara Sher Tinsley, *History and Polemics in the French Revolution, Florimond de Raemond: Defender of the Church*, Susquehanna University Press, 1992.

[127] 本書で , この語は最も頻繁に使われる言葉のひとつである。

示し，「信仰も法も王もいない（sine fide, sine Lege, sine Rege）」（p.377）この社会にキリスト教が導入された過程が第5章以下で述べられる。ブラジルを発見したカブラルにも司祭は随行していたが，本格的な布教はポルトガル王の要請により海を渡ったマヌエル・ダ・ノブレガ率いるイエズス会士が1549年に来航した時に始まる。

宣教の障害となったのは，原住民のカニバリズム[128]（この後，日本の迫害者とブラジルの食人種が複数回，異端の残忍さとの比較で引き合いに出されることになる）と言語の多様性，移動生活，魔術師（tooveraers）そしてポルトガル植民者の横暴であった（6章）。

ブラジル布教の象徴的存在で2014年に列聖されたジョゼ・デ・アンシエタに一章分が与えられ，彼にまつわる奇跡（「現代のタウマトゥルゴス」と称されたとする）が18箇条にわたって叙述される。ちなみに，彼は南ネーデルラントで1640年代に再々劇の題材にもなっていた[129]。

第8章では，イエズス会士が現地でいかに受け入れられてきたかを示すために，ブラジルに滞在経験のあるカルヴィニストが「イエズス会士が彼らに愛されていることは，ポルトガル人が原住民に受け入れられ，商売を円滑に進めるためにイエズス会士の服装を身にまとう（aen-trocken het kleedt vande *Societeyt*）ことからもわかる」と述べている（p.385）ことを引用する。このカルヴィニストが誰なのかはまだ突き止めることができていないが，オランダは17世紀の前半に30年余りにわたってブラジルの北東角を占領していたことがある。そのオランダ人でさえも，カトリックの成果を認めざるを得ない，というわけである。

そして，第9・10章では，イグナシオ・デ・アゼヴェドらの会士が1570，71年の二度にわたってそれぞれ集団でユグノーに大西洋上で襲われて殺されたことが記される。ハザルトは，「ブラジル人の残忍さが飼いならされつつあるころ，ヨーロッパではカルヴィニストの残忍がいや増していた（De wijle de wreede Brasilianen allenskens ghetemt wierden, nam de wreetheydt der Calvinisten toe in Europa）」（p.386）という時代枠の中でこの事件をとらえる。第3巻では，ネーデルラントにおける聖像破壊がこ

[128] ただし，カニバリズムの儀式性には第4章で言及している。
[129] 前掲注4論文，p.165.

れでもかとばかり描かれることになるが，それと同じことが大西洋上でも起こっていた。フランス人船員たちは，憎しみの対象である神父たち（俗人の大半は救われたとする）を海に放り込むだけでなく，見つけた聖画や聖遺物を踏みにじり，神と聖人に対して恐るべき悪態をつき，聖ウルスラの同伴者の一人の聖遺物（頭蓋骨）をマストにぶら下げ，さんざん呪いの言葉をあびせた後に剣で突き刺したのであった[130]（p.388）。また，第二団の神父たちに対しては，船員から「ドイツ・フランスで飽き足らずブラジルにまで教皇の呪われた教え（de vervloeckte leeringhen vande Pausen）を広げに行くのか」という言葉が浴びせられた（p.389）。

第 11 章以降は，17 世紀にいたる信仰の進展を扱う。管区長ルイス・ダ・グランが短時日で大きな成果を上げたことを「人肉を食い，魔術師に操られている者たち（eene natie ,die niet alleen ghewoon was menschen-vleesch t'eten,maer deede oock veelsins verleydt, ende ghestyft wiert van hunne Tooveraers）」に対する成果なのだから驚くべきであるとし（p.390），布教によって，男女ともに裸だったのが，女性は首から足までを覆う白衣を身に着け，髪を編み，手にはロザリオを持つようになり，男はポルトガル人同様の外見になったとする（p.395）。その一方で，ポルトガル人の父とブラジル人の母の間に生まれ，カトリックに似た教会組織を組織し，書物による布教も行い，「数百年前に死んだ先祖がブラジルに戻ってきてポルトガル人の圧政から人々を救う（hunne voor-ouders, die over veele hondert Jaren ghestorven waren, wederom te schepe near *Brasilien* souden komen, ende *Brasilianen* vande *Portugiesen* verlossen）」と唱えたMamaluchi[131] と呼ばれる人々が圧殺されていた（pp.389-390）。

最終の第 13 章のタイトルは，1608 年に原住民に殺されたフランシスコ・ピント，オランダ人のペルナンブーコ占領の際に殺されたアントニオ・ベラヴィアの両イエズス

---

[130] 聖ウルスラと 11000 人の処女の聖遺物が宣教師によって持ち込まれたことについては，Rose Marie San Juan, “Virgin Skulls: The Travels of St. Ursula's Companions in the New World,” C. Gottler and M. Mochizuki eds., *The Nomadic Object. The Challenge of World for Early Modern Religious Art*, Brill, 2017, pp. 406-429 を参照。

[131] 反乱は 1580 年代に発生し，ポルトガル人と現地民の混血であるマメルコが主役というより，ポルトガル人の砂糖農場で酷使されていたインディオや新たに導入された黒人奴隷が主体となったものだった。Alida C. Metcalf, “ Millenarian Slaves ? The Santidade de Jaguaripe and Slave Resistance in the Americas,” *The American Historical Review*, 104-5, 1999, pp.1531-1559.

会士を掲出しているが，死の直前にようやく信仰を受け入れた男や死病にとりつかれて洗礼によって健康になった女の事例などもとりあげられ，最後にイエズス会だけで現在住院・コレジオが25か所あるとする。イエズス会の成果を誇る一方で，資料がないとしながら，フランシスコ・ベネディクト両会も大きな成果を挙げていると付け加えることを忘れていない。

本篇を扱った論文を書いたフェルベークモスが言うように，ブラジルはアントワープ同様にミッションの最前線であり，また1660年時点ではフラマン人会士がかなり多かった[132]。アントワープはオランダに一時「奪われた」という歴史も共有していて，ハザルトのブラジルへの関心はアクチュアルなものだったろう。しかし，その一方で，当時ブラジルの布教シーンで圧倒的な存在感を持っていたアントニオ・ヴィエイラが登場しないのはいぶかしい。彼はオランダに対して戦闘的な説教も行っている。インディオの扱いをめぐって現地のポルトガル人と衝突し，終末思想的な第五王国論を唱え，1665-67年の間異端審問所に囚えられていたこと[133]が関係しているのか。彼は後出するマラニャンでも布教しているのだが，ハザルトはそれにも触れない。

・フロリダ・カナダ史（pp.399-432）

北アメリカということでまとめられているが，スペイン人の進出によるフロリダ布教とフランス人の進出によるカナダ布教の内的連関はない。ただ，いずれもイエズス会が推進力となっていた。フロリダは今日のフロリダ半島をはるかに越えて北米大陸の内奥にまで及んでおり，ハザルトは言及していないが，その先には中国布教の可能性もちらついており[134]，大きな期待が寄せられていた。

第1章ではフロリダの人々がブラジルそして多くのメキシコ人のように，「王も法も宗教もない」わけではないと差異化する。第3章でその発見の過程，1549年に武器を持たずに布教に赴きあえなく殺されたドミニコ会士ルイス・カンセルについて述べる。「丸腰か暴力を背にしての布教か」というテーマは世界各地の共通のテーマだが，フロ

---

[132] 前掲注4論文，p.156.

[133] Thomas Cohen, *The Fire of Tongues: Antonio Vieira and the Missionary Church in Brazil and Portugal*, Stanford U.P.,1998.

[134] Maureen Ahren, ""Dichosas Muertes": Jesuit Martyrdom on the Northern Frontier of La Frorida, " *Romance Philology*, 53-1, 1999, p.2.

リダではこれが主旋律をなす。第 4・5 章で述べられるイエズス会士たちも，スペインまで連れて行かれて洗礼を受けた現地の酋長が帰郷するのに随行してチェサピーク湾のあたりまで進んだが，兵士をともなわずにあっけなく殺された[135]。イエズス会は，この後フロリダ布教を放棄し，メキシコに転進することになる。

舞台はカナダに移り，時代は 17 世紀初に飛ぶ。フランス人のカナダ進出は 16 世紀に始まっていたが，本格的な進出は 17 世紀に入ってからで，イエズス会士がそのパイオニアであった。第 6 章の「土地・住民」が 1633 年のイエズス会士ポール・ル・ジューヌのフランス管区長宛書簡の引用で成り立っているのもその表れだろうし，フランスのイエズス会はコンスタントに報告を公刊していたので（ハザルトのリストには「1611 年～ 1663 年まで[136] のヌーヴェル・フランス報告」が挙がっている），材料が豊富である。

また，カナダでは女子修道会のウルスラ会の布教（ただし，修道士のように街に出てゆくのではなく，修道院の庭でだが）がユニークだが[137]，第 8 章で取り上げられる。第 9 章でイエズス会に話が戻り，ここでも敵対的なイロコイ族の人肉食をはじめとする「残忍さ」が宣教師の前に立ちはだかるが，その犠牲となって死んだのは，今でもカナダ・アメリカのカトリック信者の尊崇を集めているイエズス会の「殉教者」たち[138] だけではなく，原住民信者もであった（11 章）。

ここにもオランダ人の影が差している。第 12 章では，イロコイ族に捕らえられたフランソワ＝ジョセフ・ブレッサニ神父にふだんは敵視しているオランダ人が同情して身代金を払ってくれたことを，第 13 章ではイザーク・ジョーグ神父がオランダ人に救われてその要塞へと連れて行かれるとそこにいたルター派のポーランド人が神父の前にひざまずいてその手にキスして，「彼は殉教者」だと言い，神父はオランダ船でヨーロッパに戻ったことを記す。オランダ人がイロコイ族と結んでいたことにも言及されるが，ここでは彼らの使嗾がカトリック信者の迫害を導いた例は示されていない。

---

[135] Anna Brickhouse, *The Unsettlement of America: Translation, Interpretation, and the Story of Don Luis de Velasco, 1560–1945*, Oxford U. P., 2014.

[136] 年報が定期的に刊行されるようになったのは , 1632 年からである。

[137] ナタリー・Z・デイヴィス『境界を生きた女たち　ユダヤ商人グリックル , 修道女受肉のマリ , 博物画家メーリアン』長谷川まゆ帆・北原恵・坂本宏訳 , 平凡社 , 2001. 門脇輝夫訳『修道女が見聞した 17 世紀のカナダ―ヌーヴェル・フランスからの手紙』東信堂 , 2006.

[138] Emma Anderson, *The Death and Afterlife of the North American Martyrs*, Harvard U.P., 2013.

最終第17章では「現状」として，フランソワ・メルシエ神父がケベックから書き送ってきた手紙を引用する。その中には，フランス王に総督として任命されたトレイシー侯爵が65年6月に到着し，これを歓迎したヒューロンの長老の歓迎演説が書きとめられていた。しかし，内陸ではあいかわらず神父がイロコイ族に殺されていた。トレイシーはイロコイ同盟軍を打ち破り，フランスの支配を拡張し，原住民に信仰とフランス語を強制することになる。

・パラグアイ史（pp.433-448）

パラグアイでイエズス会が17世紀に行った集住政策によって実現した「先住民の共和国」は当時の南米だけでなく，次世紀のヨーロッパにも大きな波紋を生んだ[139]。

第2章では，1596年からイエズス会の布教が始まり，1626年には13の村に1000家族が集住し，1635年には19村に95000人の信者が集まった急速な成長ぶりを記す。第3章で紹介される宣教師の中には，序言に出てくるアントワープ出身のファン・スルクのほかにネーデルラント出身のピーテル・デ・ボッシャー，アンドレ・デ・ラ・ルーもいる。第4・5章では改宗した「蛮人（barbaeren）」の徳が称揚される。

本書は聖体について言及することが多い（前述したように，ハザルトは聖体に関する論文を多く書いている）。ここでは，聖体について5，6歳の子供までが熱心に話しており，ヨーロッパの信者の熱意にひけをとらないこと，ある女性信者が聖体拝領のために子供2人を抱えて3か月もかけて教会にたどりついたことに触れ，こうしたことは「わがセクト主義者（onse Sectarisen）には信じられない，いや信じようとせずに，あざけり笑うばかりであろう」と述べる。ネーデルラント篇では，聖体への侮辱が何度も出てくることになる。

最終章の表題は「フランドルのリール生まれのニコラス・デル・テッチョ神父が1651年にパラグアイから書いた手紙」である。彼は『イエズス会パラグアイ管区史』[140]

---

[139] 斎藤晃「スペイン領南米における先住民共和国の形成」川村信三編『超領域交流史の試み―ザビエルに続くパイオニアたち』上智大学出版，2009, pp.111-164. 王寺賢太「「文明化」の方向転換―レナル／ディドロ『両インド史』のイエズス会パラグアイ布教区叙述をめぐって」前掲注51 斎藤編著 pp.466-518.

[140] Lione Mira, “Entre la cruz y la pluma. Nicolás del Techo, misionero e historiador de la provincia jesuítica del Paraguay（1640-1685）,” *IHS. Antiguos Jesuitas en Iberoamérica*, 10, 2022, pp.1-23.

を著わし，1673 年に刊行された。地元出身者の手紙だから取り上げたのであろうが，各地で少々頭打ちになっていた布教が，ここでは少なくとも表面的には繁栄していたのである。

・マラニャン史（pp.449-457）

ブラジル北東部のマラニャン島のフランス人による布教史は，フロリダよりも短命であった。全編ほぼカプチン会士クロード・ダブヴィルの『マラニャン島とその周辺におけるカプチン会士の宣教史』（パリ, 1614 刊）[141] からの引用で成り立つ。「地上の楽園」のような光景が広がるこの島に，1612 年カプチン会士の 4 人が宣教師として初めて足跡を記した。住民が大歓迎したのは，その前にフランス人貴族がやってきて住民側に立って敵と戦ったからである。長老と神父の応酬が引用され，食人がやめられたこと，現地民がフランスに送られて王に会って行った臣従の誓詞を紹介する。カナダでは容易になし得られなかったことがここではあっさり実現している。しかし，記述はそこまでで，その後フランスがスペインと和を結ぶことでこの植民地が放棄され，ポルトガルに帰したことには触れられない。

・シナ王国の付録，彼の国から寄せられたイエズス会士のアダム・シャールの最新書簡より（pp.458-482）

本文執筆後に得られた最新情報の紹介である。アダム・シャールが 1651 年に皇帝の婚約者の病を治したところから説き起こされる。このことがきっかけで神父は太后の信頼を勝ち得た。また，皇帝もシャールには叩頭させないという優待を与え，神父から「淫欲は害毒である」など耳の痛いことを言われていったんは怒っても，シャールへの愛顧は変わらなかった（1 章）。神父が弱者救済を請うと皇帝は惜しみなく金を出した。1653 年に 200 人の貴人が死刑に処されることになったが，シャールは皇帝に諫言してこれを止めた（2 章）。神父は宮中に出入り自由で，皇帝に玉座に座らされたり，茶を供されたりしたこともあった。1656 年から 57 年にかけて，皇帝は 24 回神父の家を訪問した。ある時，皇帝にオランダ人が献じたワインが供されると毒を飲んだように吐きだしたが，我々の庭で育ったブドウで作ったワインは飲んだ（3 章）。1656 年に

[141] その主要部分は邦訳され , 同会のデヴルーの書とともに『マラニャン布教史 , マラニャン見聞実記』大久保康明訳 , 岩波書店 ,2004 に収録されている。

皇帝と惑星の話をした流れで神の話になった。シャールは神が他の君主よりも皇帝のことを気にかけていると述べ，十戒について説明した。皇帝は信者でなくても守らないといけないのかと問い，シャールはすべての人間に適用されると答えた。第七戒について皇帝はなぜ多妻が禁じられているのか聞くと，子供を育てるうえでそれが必要なだけでなく，神がそれを望まれるからであると答えた。皇帝は十二の信条を書かせてこれを読み，主の受難についての版画が満載された本も持っていた[142]。教会を訪れた時には，壁にかかっているロヨラとザビエルの絵の下に書いてあった彼らの名前を唱え，天使に捧げられた祭壇を見ると，堕天使や守護天使のことを熱心に尋ねた。ヴェロニカの聖顔布を描いた絵を見て宮中に持ち帰り，模写させた。ある日，シャールが宮中に招じ入れられると，皇帝はベッドで聖人伝[143]を読んでいた（4章）。シナで開教して80年，ヨーロッパにひけをとらない教会が作られた。教会の扉の上には大理石の板がかけられ，そこにはトマスに始まり，唐代，明代に布教が行われ，現在に至っていることと，順治七年（1650）という年が刻まれた。アーチには2年後にさまざまな文字が刻まれてイエズス会士の事績が述べられ，皇帝自身そしてシャールと親交のあった孔子の子孫による頌詩が刻まれた。朝早いミサには信者だけでなく，異教徒も訪れた。1年で5000人以上が入信した。男女の信心会が作られ，聖体の祝日や聖金曜日には行列が組まれた(5章)。ある官人の子は，ロヨラの聖遺物のおかげで難産の末に生まれた。母や兄弟が亡くなり，ある占い師が父親に「この子はあなたの子でないので，遠ざけるべきだ」と言ったので邸宅の外で育てられた。6歳の時に危篤となり，洗礼を受けて治癒したが，父親はあいかわらず偶像を奉じていた。ある時，息子の部屋に赤ら顔の大男（「シナでは関羽という偶像神をこのように描く」という注記が入る）がほかの大男たちと侵入してきた。子供は叫んで助けを求めたが，家人ではどうすることもで

[142] 16世紀末にアントワープで刊行されたイエズス会士ヘロニモ・ナダルの『福音書画像集』か，これを中国で出版した『天主降生出像経解』またはシャール自身による『進呈書像』であろう。Nicolas Standaert ed., *An Illustrated Life of Christ Presented to the Chinese Emperor: The History of Jincheng Shuxiang*（*1640*）, Institut Monumenta Serica, 2007.

[143] 明末にイエズス会士アルフォンソ・ヴァニョーニが『聖人行実』を刊行している。本書については，拙稿「明末の天主教漢籍と日本のキリシタン版」京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター編『漢籍の遥かな旅路　出版・流通・収蔵の諸相』研文出版，2018, pp.51-56を参照。

きず，シャールのもとに身を寄せた。以後，子供は足しげく教会に通うようになり，信仰を深めていった。彼はバプテスマのヨハネの祝日[144]に亡くなり，タルタルの習慣によって火葬された（6 章）。ある男が戦場に出て留守にしている間に妻が悪魔に憑かれたので，シャールが呼ばれた。神父は茶壷をもってこさせ，十字を切って女に飲ませ，さらにイエスの名を刻んだ林檎を与えたところ，残らず平らげた。その後，シャールはロヨラの聖遺物を首にかけさせ，悪魔を自分のところによこすよう命じた。翌日の夜 2 時頃，シャールの部屋のドアを叩く音が何度もした。シャールは悪魔に地獄に行くよう命じた。朝になって女の兄弟がやってきて悪魔憑きがおちたと謝意を述べた（7 章）。シャールは天文関係の役所（欽天監）の長官に任じられた。敵はいたが，皇帝に守られていた。皇帝が数か月病床にあった間に地方で騒動が起こり，彼はさまざまな悲しみを味わった。天文家が惑星の異変を告げると，シャールは皇帝に神の示した徴に目を背けてはならないと忠告した。皇帝は死の 3 か月前にこれを読み，宦官に対してシャールへの信頼感と生への絶望について述べた。翌月になると皇帝の頭は妾（皇貴妃ドンゴ氏）の葬儀のことで一杯になった。彼は度を越した悲しみに我を失い，異教の僧侶が彼の心をつかみ，3000 人の僧侶が宮中に呼ばれ，皇帝自身頭を丸めた。シャールは迷える羊をなんとか導こうと努力したが，皇帝は「宗教人である汝が私の神への奉仕を非難するのは理解できない」と言った。シャールは天文の異変が国家の危機を告げていると言って皇帝の目を覚まさせようとした。皇帝は天然痘で危篤に陥り，シャールを呼び入れたが，もう話すことはできずに 3 日後に亡くなった。しかし，シャールの努力が無駄になったわけではなかった。皇帝は死の直前に悔悟して，自らの非を認め，恩赦を発したのである。8 歳の王子（康熙帝）が即位し，4 人の執政が補佐することになった。皇帝の死後，僧侶たちは宮中を追われた（8 章）。シャールは役目上，皇帝の葬儀に参加したが，偶像を拝むことは拒否した。死の 27 日後に遺体は荼毘に付され，民には 100 日間の服喪を命じた。皇帝が妾への愛におぼれるうちに，異教の僧侶である道士が欽天監にも入りこんだが，皇帝の死後，シャールは欽天監に返り咲いた（10 章）。

表題では「シャールの書簡から」とするが，その後の「前言」では「ある著述（een

[144] 年は書かれていないが，シャールの書によると，1651 年 6 月 24 日である。

seker scrift)」としており，シャールの布教報告（ラテン語，ウィーン，1665 刊）[145] を指すだろう。以上に紹介した概要はこれにほぼ対応する。

第 11 章以下は，1655 年にバタヴィアのオランダ人がシナに派遣した使節の随行員のヨハン・ニューホフの著書（オランダ語原版は 1665 年にアムステルダムで出版）に対する反論である。北京に上った使節には皇帝に命じられた調査官が様々な質問を行った。「海に住むのか」という問いには，「100 年以上国土を有する」と答え，世界地図でオランダの場所を示し，委員は皇帝に知らせるために地名を書き取った。統治形態について問われ，共和制で会社にインドの事業が委ねられていると答えたが，理解されず，オラニエ公とオランダ政府に派遣されたと説明せざるを得なくなった。委員は「使節は君主の親戚か」と尋ねた。琉球や朝鮮の使節はそうだと言うのである。これに対しては，王族を遠い外国に派遣する習慣はないと答えた（11 章）。この訊問の場に通訳としてシャールが臨んでいた。ニューホフは次のように彼を描写する。「40 歳を越えていてケルン生まれで，タルタル風に頭を剃っている。ドイツ語でアムステムルダムにいるカトリックのことを尋ねてきた。使節の皇帝へのプレゼントが箱から出されるたびに心からため息を発していた。調書を皇帝に提出する際に，彼は「オランダはスペインに属しており，今なおそうである」と付け加えようとしたが，認められなかった。」

以上のようにニューホフの記述をまとめた上で，攻撃にかかる。ニューホフはイエズス会士に対して「銀 300 両を使って妨害工作を行い，オランダの目的は交易になく領土にあると中傷し，またオランダ人の出現によりマカオが貧しくなると不平を鳴らした」と批判し，さらに 183 頁に「オランダ人は水の中で 3 日暮らすと嘘を言った」，166 頁に「イエズス会士は使節の邪魔をした」と述べ，索引のイエズス会士の項目には「イエズス会士はシナでオランダ人を妨害した」と記している（12 章）が疑わしいとしたあと，長広舌がはじまる。

イエズス会士がオランダ人を妨害したのは，こうした方法によるのではない。そして妨害するには大義名分があったのである。せっかく植え付けられた信仰がオランダ

[145] Henri Bernard ed., *Lettres et mémoires d'Adam Schall S.J.*, Hautes Études, 1942 に収録される翻刻と対照した。

人の到来によって台無しにされるのを防がねばならなかった。日本がそのいい例で，オランダ人の到来が迫害の原因となり，彼らは信者かと問われて否定した。問題は「永遠か，一時的か」「宗教か，国家か」「外国人の幸福か，現地人の幸福か」「神の権利か，人の権利か」「自然法か，特定の共和国の法か」というところにある。永遠は一時より上にある。宗教が国家に優先されることは，ルカ書 12:31「ただ，神の御国を求めなさい。そうすればすべてが与えられるであろう」に述べられている。後者を上におくマキャヴェリやボーダンは無神論者というべきである。神の権利が人のそれより上なのは言うまでもなく，自然法については，ローマ人への手紙 13:1 に「神によらない権威はなく，およそ存在している権威はすべて神によって立てられたものだからである」とあるように，人間の君主の権威は神の力を超えず自然法が優先される。永遠や宗教に関心のないオランダ人をイエズス会士は阻止しようとしてきた。神の権利，自然法，宗教の権利，現地人の権利のために戦ってきたのが彼等であり，日本では長崎郊外の血の山が彼らの活動の証である。イエズス会士はインドの各地で君主に布教権が与えられ，土地の人々が神を知る権利を保全してきた。イエズス会には自己の利益を人々の幸福の上に置く行為を見過ごすことはできなかったのである。カルヴィニストは布教しないので現地の抵抗に遭うことはないが，我々は異教の宣教師と論争し，日本その他の地で君主の力により合法的に偶像を破壊したが，異教徒の反発を買わなかったわけではないし，従来の信仰を守る人々もいる。かくして，ニューホフの言とは逆に，一時の損失は障害とは考えられないので，イエズス会がオランダ人を妨害したことはないということになろう，と（13 章）[146]。

最終第 14 章では，布教の現状についての「噂」（geruchten）として，バタヴィア総督のヨハン・マーツァイケル書簡（1666.1.30）を引用する[147]。その内容は，シャールら

[146] ハザルトとニューホフの記述の比較をマニューシャ・クルパスが行っているが，アダム・シャールの清廷における影響力にもっぱら注目し，ハザルトのメッセージそのものは余り問題にしていない。注 3 論文。

[147] ハザルトがこの書簡をどうやって入手したかは分からないが，イエズス会士の中にはオランダ人とコンタクトを持つ者がいた。メヘレン出身のフィリップ・クプレが早くからオランダ人と接触を持ち，鄭成功の台湾占領以後に中国沿海に現れたオランダ艦隊とも連絡を取ったことが知られている。Paul Demaerel, “Couplet and Dutch,” Jerome Heyndrickx ed., *Philippe Couplet, S.J. (1623-1693) The Man Who Brought China to Europe*, Steyler Verlag, 1990, pp.87-120.

が迫害にあって投獄され，他の宣教師も北京に召喚され，シャールには死刑判決，24人の神父は広東に送られることになったというものだが，ハザルトは本当かどうかわからないとしたうえで，もし本当だとしたら，オランダ人に対して「イエズス会士が退場するのにかわってあなた方がシナに行くがよい。恐れなく交易をおこない，利益を上げることができよう。ただし，それはカトリックの宣教師が天の為に獲得した数千の魂の利息なのであって，あなた方はキリスト教について一言も語ろうとしない」と言おうと述べ，彼らが神に罰せられることを祈って終わる。この凶報は真実ではあったが，事態はまた急転し，それについてハザルトは第4巻で再び触れることになる。

・結語（pp.483-484）

ハザルトは本巻を「東西インド全史」をダヴィデの詩篇によりしめくくる。理由は彼が来るべき異教徒の改宗を予言しているからと言うのである。詩篇48が小刻みに引用され，その寓意が解読される。以下，その要約である。

「シオンの山と大いなる都」とは教会にほかならない。主が偉大なのは，カトリックの宣教師が異端者のただなかに教会を建てるからであり，異端者を恥じ入らせるまでにローマ教会の真実を明らかにしたことが称えられるべきである。「もろもろの殿のうちの高き櫓」とは異教徒のただなかに教会が建てられることである。「王らは共に進んできたが，都を見ると驚き，恐れにとらえられた」とは，シナ・日本・モゴル・ビスナガの王やアメリカの野蛮な諸侯が教会の光輝に驚き，自らが長らく闇の中にいたことに気づいて動揺し，十字架と受難を知って心を動かされ，神がカトリックの宣教師を通じて信仰を強化するために示された徴を見て恐れにとらえられることを指す。「産みの苦しみ」とは，布教の時に被る非人間的で前代未聞の責め苦を意味し，「東風を起こしてタルシシの船を破られた」とは，迫害のさなかでも，神は異教徒の力を砕き，宣教師に死のなかにあって勝利を得させることを意味する。「預言者から聞いたことが神の建てた教会において目の前で実現した。我々は神の宮のうちにそのいつくしみを思った」とは，預言がすべて成し遂げられた時，宣教師は恐ろしげで周囲から遠く切り離された人々のもとに神の名を告げ知らせにゆかねばならないことを預言者によって確証されていたことを意味する・・・・

このように高揚感のある結語は，以下の巻にはない。カトリックの「強み」が海外宣教にあることをハザルトは分かっているのだろう。しかし，その強みがいつまでも続いたわけではなかった。

第２章　古き異端と新しき異端―アフリカ , ドイツ , フランス

ハザルトが第２巻の「読者へ」の末尾で，モーレンラント（アフリカ）篇は先行するインド史の続き（vervolgh）であるとしているのを見ても，本来は第１巻に収録すべき内容である。それを「異端」で括るのは無理筋なのだが，アフリカの記述の中でもっとも力が入っているのが，カトリックからみて古い歴史を有する異端であるエチオピア教会であることからこのような章題にした。

「読者へ」では，第１巻への読者の反響が述べられる。これを見る限り，かなり異論が出たようである。ハザルトは，それが憎しみと妬み（Haet en Nijdt）やインドへの無知からきているとする。

注目すべきは「年代順に記述すべし（most achtervolgt hebben den loop vande Jaren）」という批判である。ハザルトはこれを採らなかったのは，年代記ではぶつ切りになってしまう多くの歴史を一つに結ぶ（by eenen knoopen）ためだと言っている。実際，これまで見てきたように本書でクロノロジーは軽視されている。彼の反論には負け惜しみが多少混じっているとしても，大きな意味をもつことは後述する。

さらに，修道会の記述の不均衡を非難する声に対しては，人や会で差別したのではなく，宣教師の勇敢な英雄（kloecke helden）を選びとったのだと言う。イエズス会の記述が多くなったのは，彼らの活動が全世界に及んでいるから自然とそうなったのだという弁明については，その通りだと思う。

少し驚かされるのは「ザビエルはイエズス会士ではない」とする指摘である。ハザルトらしく文献の証拠をいくつも突きつけてこれを退けるのだが，1622 年にロヨラとともに列聖され，アントワープではルーベンスも描いたザビエルについて在俗司祭説が存在したということが逆に興味深い。

・モール人の歴史（pp.1-110）

モール人はふつう，マグリブに住むムスリムを指し，ムスリム全体を指すことも多いが，ここではアフリカ全体を言い，その中にはキリスト教国のエチオピアも入る。ハザルトがどうしてこういう呼称を使っているのかはわからない。

第１部「アビシニアまたはプレテ・ヤンの王国史」（pp.1-62）

エチオピアは，16 世紀中葉の主教派遣以来，約 1 世紀にわたってイエズス会が布教を寡占していた。彼らが来る前には在俗司祭のフランシスコ･アルヴァレスが書いた『インドのプレステ・ジョアンの地の真相』（リスボン，1540 刊）[148] が，エチオピア情報をまとまった形で伝えたものとして一定の影響力を持ったが，それ以後となるとイエズス会士フェルナン・ゲレイロの東方布教報告集（前述したようにジャリックはこれを一つの情報源としている），ローマで作成されたイエズス会の布教地年報集（複数の土地がセットになって提供されることが多い。しばしば取り上げられるのは，日本，中国そしてエチオピアである。エチオピアのことが報じられるのは，イエズス会の活動がついに実を結び，皇帝スセニョスの改宗を勝ち取ったためである），そしてイエズス会ポルトガル管区長バルタザール・テレスがエチオピアで活動した同僚マヌエル・デ・アルメイダの記録を公刊した『高地エチオピアまたはプレステ・ジョアンのアバシアの一般史』（ポルトガル語，コインブラ，1660 刊）といったように，イエズス会の発信が主な情報源である [149]。ハザルトが第 1 章「土地と住民の風習」，第 2 章「宗教」，第 3 章「教会と僧侶」で出典として挙げているのも，ジャリックであり，テレス（アルメイダ）である。

エチオピアにキリスト教が入ったのは，フルメンティウスの布教，アクスム王による承認があった 4 世紀とふつう考えられているが，ハザルトはフルメンティウスに言及しつつ，ジャリックやアルメイダによってそれ以前の女王カンダセの時代，キリストの死後に使徒の弟子たち（Discipelen vande Apostelen）によって導入されたとして

---

[148] 邦訳『エチオピア王国誌』池上岑夫訳 , 長島信弘注・解説 , 岩波書店 , 1993.

[149] 後出するベルムーデスは *Breve relação da embaixada que o Patriarca D. João Bermudes trouxe do Imperador de Etiópia chamado vulgarmente Preste João* を 1565 年に刊行しているし , ドミニコ会士ルイス・デ・ウレタも *Historia eclesiastica, politica, natural y moral, de los grandes y remotos reynos de la Etiopia, Monarchia del Emperador, llamado Preste Iuan de las Indias* を 1610 年に出してはいるが , さほど影響力はなかった。

(p.3),「カルヴィニストの」ゴットフリート[150]が「アビシニアのキリスト教徒は福音ないしヨーロッパのプロテスタントと合致している」とするのは，古いキリスト教徒との一致を強調することで自らの「無垢（omheyt)」を喧伝しようとしているのだと批判する。

第 4 章「ローマ･カトリックがこの分裂下にあって我々の時代に初めて復活した経緯」は，ポルトガル王のプレステ・ジョアン探査の試みに始まるエチオピアとの交渉について述べる。第 5 章では，エチオピア皇帝のもとからローマに使者として派遣されたジョアン・ベルムーデスが教皇によって主教に任命されるもエチオピア帰還後に皇帝と対立し，去らざるを得なかったことを述べる。第 6 ～ 9 章では，イエズス会の布教の苦難と挫折について主教アンドレ・デ・オビエド[151]を中心に描く。

エチオピア宮廷に達するには紅海方面のオスマン勢力圏を通過しなければならず，それが宣教師派遣を難しくしていた。第 10 ～ 12 章では，この危険な行路を進んで捕らえられ，殺され，あるいは安着したイエズス会士や在俗司祭の活動について述べる。在俗司祭メルショール・ダ・シルヴァは無事にたどりついて 6 年間布教したが，その対象はエチオピア人ではなく,「すでに現地の風習に染まって割礼し，土曜日に安息し，マホメットの習慣に従い，水・金曜日に断食する以外は，すべての斎日を無視しているポルトガル人」（p.20）であった[152]。

---

[150] ハザルトが「in Archontologia」としているのは , ヨハン・ルードヴィヒ・ゴットフリートが旅行記の出版で有名なド・ブライ家の娘婿マテウス・メーリアンと共に刊行した *Archontologia cosmica* のことだが , これはフランスのピエール・ダヴィティの *Les Estats et empires du monde*（1613 年の初刊以来 , 何度も改訂増補版が出た）の翻訳である。Michel van Groesen, “America Abridged: Matheus Merian, Johann Ludwig Gottfried, and the Apotheosis of the De Bry Collection of Voyages,” *Journal of Medieval and Early Modern Studies*, 41-1, 2011, p.68.

[151] イエズス会憲では , 会士が教会の要職につくことは禁じられていた。しかし , この主教・司教派遣事業（当初はジョアン・ヌネス・バレトが主教となる計画だったが , かわりにオビエドが派遣されることになった）にロヨラが積極的だったのは , 彼がそれだけエチオピア布教を特別視していたからである。Matteo Salvadore, “Gaining the Heart of Prester John: Loyola’s Blueprint for Ethiopia in Three Key Documents,” *World History Connected*, 10-3, 2013. https://worldhistoryconnected.press.uillinois.edu/10.3/forum_salvadore.html 最終閲覧 2023.2.6.

[152] シルヴァがゴア大司教のアレイショ・デ・メネゼスに報告を送っているとあるように , この部分はメネゼスの著書（巻頭のリストにはないが ,p.14 で「東方の歴史」を引用している）を使っていよう。

第14章では，スセニョスの先々代のザ・デンゲルが玉座から立ち上がり，ペドロ・パエスに席を譲って説教させたことに「驚くべし！」と注記し（p.23），以後は改宗に傾く皇帝を基軸に叙述が展開する。第19章では帝位をスセニョスと争い，地元の聖職者の支持を得ていたヤコブを偽帝（versierden Keyser）とし（p.27），スセニョス（ハザルトは，王位についた時の名 Seltan Segued で呼ぶ）を正統と位置づけ，第20章では皇弟セエラ・クレストスの改宗，第22章では神父が皇帝の面前での異端との論争に勝利したこと，第25章では皇帝に対する陰謀・反乱の失敗，パエスの死と王の服喪などについてそれぞれ述べる。第27章では皇帝がローマ教皇の至上権を認めた公開書状を引用し，第29章では新たに着任した主教のイエズス会士アフォンソ・メンデスの前で1626年2月11日に皇帝がついにローマ教会に服従を誓ったことが記される。

ここがエチオピア布教のピークだったが，以下の下降線についてもかなりの紙幅が割かれる。1628年には10万人が改宗したとされるが，旧教会側の反発も一層高まってゆき（33章），1632年，病床にあった皇帝はついに折れた。これを知ったメンデスは「細部において旧来の慣習に従うのはやむをえないが，なおもカトリックを維持しているとの布告を出すべきだ」と訴えたが，皇帝は拒否して全面的に旧来の教えに復帰することを宣言した（39章）。この宣言に対する反響を，ハザルトは男も女も兵士も僧侶も，「まるで檻から解き放たれた野獣のように（als eene wilde beeste uyt het kot）」歓喜したと表現する（40章）。多くの者が旧教会を支持していたことは認めないわけにはいかなかったのである。

第42章では，エチオピアの人々が「信仰を棄てた」理由を6つにまとめる。①結婚の自由が失われたことへの反発。エチオピア教会のトップである司教（Abuna）自身が妻帯者であった。②宮廷の女性たちにはカトリックの厳格さが耐えられなかった。③皇帝はカトリックの推進に熱心ではあったが，一方で欲望に勝てなかった。④ヨーロッパ風の石造の教会が，ポルトガル人の国土乗っ取りの拠点になるのではないかと疑われた。⑤人々の間に旧来の信仰のままでよいという考えが強く，なかには「ローマの教えと旧来の教えに違いはない。ともにクリスチャンではないか」という者もいた。⑥かつてのローマ人そして現在のオランダ人のように，災厄をローマ・カトリックに帰する考えがあった。

この中で注目しておきたいのが②である。中国では明末に宮中の女性たちが改宗するようになり，日本でも秀吉や家康のまわりには女性信者がかなりいた。これに対して，エチオピアの場合には女性の抵抗が目立つことが指摘されているが[153]，ハザルトもこれに注目しているのである。

その後は，これまで紹介した各篇同様に，信仰に殉じた人々の姿が紹介される。イエズス会の神父に加えて，信者たち（ただし男性のみ）にスポットライトが当てられている（43 章，47 章[154]）。そして，退場したイエズス会士に代わって，布教聖省（Propaganda Fide）から送り込まれたカプチン会士の活動が取り上げられる（49 章）。布教聖省は 1622 年にローマ教皇庁が世界布教を統括するために作られた組織で，海外布教の面ではこれまでのイエズス会の優位をゆるがし，17 世紀半ばには早くも大きな存在となっていた。ハザルトの「今世紀」の記述に布教聖省がもっと出てきてもよさそうなものだが，はっきり言及されているのはこの一例だけである（p.61）。

最後は，王弟セエラ・クレストス[155]が 1653 年に殺されたことを取り上げ，彼について主教が「全世界の偉人に比肩しうる（die met recht vergheleken mach worden met de treffelijcke mannen vande gheheele werelt）」と絶賛したことを記し，彼とともにモール人の地におけるカトリック信仰は終わったとする。

第 2 部　ギニア史（pp.63-75）

冒頭でギニアを低地ギニアと高地ギニアに分ける。低地に分類されるコンゴ，アンゴラのうち，ここではもっぱらアンゴラのことが述べられる。最初の 4 章で例のごとく，土地，住民，宗教が扱われるが，他と異なって出典をほとんど挙げない[156]。それは，キリスト教の布教以後を扱う第 5 章以下でも変わらない[157]。

---

[153] Wendy Laura Belcher, “Sisters Debating the Jesuits: The Role of African Women in Defeating Portuguese Proto-Colonialism in Seventeenth-Century Abyssinia,” *Northeast African Studies*, 13-1, 2013, pp.121-166.

[154] 46 章と誤植されている。

[155] 彼の政治的位置を検討したものに，石川博樹「17 世紀前半ソロモン朝のベフド・ワッダド―イエズス会のエチオピア布教失敗の一要因―」『オリエント』43-2, 2000, pp.99-116 がある。

[156] 1610 年代にオランダ船でアフリカに渡航したバーゼルの外科医師サムエル・ブラウンの旅行記（バーゼル , 1624 年刊）だけである。

[157] 出典として示されるのは , イエズス会士がヨーロッパに送った 1584 年書簡（p.72）, 1606 年書簡（p.74）のみ。後者では , 会士がルアンダに着く直前にゴイセンにつかまり , ボートに放置

布教の前後関係からすれば，コンゴからアンゴラへと進むのだが，ここではアンゴラのほうが先に来ている。交易に関心があるアンゴラ王は，複数回ポルトガル王に宣教師の派遣を要請した。この交易に奴隷が含まれることはハザルトも言及している（p.69）が，奴隷交易がのちに送り出す側のルアンダと救済を図ろうとする南米のカルタヘナのイエズス会間で問題になったことは[158]，彼の視野の外にある。

ポルトガル人と現地の王権との戦争の中で布教が進み，1590 年には信者 20000 人を超えた（p.73）。このように武力行使と布教が雁行したケースはポルトガルの場合，他にはない。

話は 17 世紀初で終わっている。その先のことは史書あるいは著作を見つけていないのでわからないとする（p.75）が，要するにジャリックで止まっているのである。

第 3 部　コンゴ史（pp.78-90）

困難に満ちたアンゴラ布教に対して，こちらは記述を見る限りでは布教は順調だったように見える[159]。15 世紀末にはすでにポルトガル王とコンゴ王の交流は始まっており，第 7 章で国王の受洗（洗礼名ジョアン）が記される。王の熱はやがて冷めたがまもなく死亡し，後継者争いで勝利したのは信者となっていたアフォンソで，彼の治世は長期にわたった[160]。ハザルトは彼を「模範的な信者」と評し，「コンゴは彼のもとで世俗的にも霊的にも完全に平和となったのである（Congo niet alleen in volle vrede gebloyet aengaende het tijdelijck, maer oock op alle kanten toe-ghenomen aengaende het gheestelijck）」というが，治世の後半には奴隷交易をめぐって，ポルトガル人との対立が生じていた[161]。

イエズス会士がコンゴに来たのは，ザビエルが日本に，ノブレガがブラジルに着い

されたが , 九死に一生を得た話を報じる。

[158] Roberto Hofmeister Pich, “Race, Religion, and Slavery in Alonso de Sandoval’s S. J. De instauranda Aethiopum salute,” *Entangled Religions*, 13-4, 2022 online.DOI:10.46586/er.13.2022.9459. 2023.2.5 閲覧

[159] コンゴの布教については , John Thornton, “The Development of an African Catholic Church in the Kingdom of Kongo, 1491-1750,” *The Journal of African History*, 25-2, 1984, pp.147-167 参照。

[160] ハザルトは 50 年とするが , 在位期間は 1509 年～ 42 あるいは 43 年と考えられている。

[161] Linda M. Heywood, “Slavery and Its Transformation in the Kingdom of Kongo: 1491-1800,” *The Journal of African History*, 50-1, 2009, p.6.

たのとほぼ同じころだったが（11 章），後継の王たちは信仰にあまり熱心でなかった。アルヴァロ 1 世は Giachen と呼ばれる蛮族に都を追われるに及んでポルトガル人に援軍を要請して復帰（13 章），王弟との争いに勝利してからようやくイエズス会士に好意を示すにいたった。ハザルトは，1587 年 7 月に王が出したイエズス会保護の告示を引用し，「この後のことは知らないが，1485 ～ 1587 年の間にカトリックが 9 人の王のもとで栄えていたことは確かである」と本篇を締め，次の王アルヴァロ 2 世が教皇に 1604 年に使節を送ったことや[162]，1622 年にアンゴラのポルトガル人とコンゴが戦争したことに触れない。ともかく，コンゴはこのあともキリスト教の王が続いてゆくことになる。

第 4 部　上ギニア史（pp.91-102）

ジョロフ王国（現在はセネガルに属する）の王や貴族たちは自らポルトガルに赴き，1491 年に入信し，ポルトガル王に臣従を誓った。しかし，洗礼を受けた王ジョアンは帰国すると，ポルトガル人の司令官に殺害されてしまった（3 章）。ここから話は 1 世紀以上飛ぶ。1604 年に諸国の王がポルトガル王（スペイン王フェリペ 3 世）と友好関係を結ぶために使者をポルトガルに送ったところからリスタートし，イエズス会士が送り込まれ，シエラレオーネ，トラの王が改宗した（6 章）。アンゴラから転じてシエラレオーネで布教したバルタザール・バレイラの死（1612）で記述は終わり，やはり現状について述べられることはない。

第 5 部　モノモタパ王国史（pp.103-110）

第 2 ～第 4 部では，宣教師は「殉教」していない。ポルトガルの軍事力がバックにあったからである。しかし，ここでは，インド管区長でモノモタパに赴いたゴンサロ・ダ・シルヴェイラが，前任者のザビエルがなしえなかった王者の改宗を実現させたあと殉教する。彼の死に立ち会った人々（彼を宮廷までいざなったポルトガル人商人）はムスリムが王を使嗾した結果だとするが，ポルトガル兵が傍らにいれば話は違ったであ

[162] ローマのクイリナーレ宮殿のかつての「王の部屋」に，支倉常長やペルシアから派遣された使節とともにコンゴの使節も描かれていた。Mayu Fujikawa, “Pope Paul V’s global design: the fresco cycle in the Quirinal Palace,” *Renaissance Studies*, 30-2, 2016, pp. 192-217. Richard Gray, “A Kongo Princess, the Kongo Ambassadors and the Papacy,” *Journal of Religion in Africa* , 29-2, 1999, pp.140-154.

ろう。エチオピア篇でも，「殉教」はトルコ人の勢力圏において発生しており，エチオピアで殺された神父はいない。少ないとはいえポルトガル人の兵がコロニーを作っていたことが関係していよう。

本篇は，いともやすやすと王の改宗を勝ち取り（神父を助けたポルトガル商人の力が実際には大きかっただろう），あっけなく「殉教」してしまった神父を中心に構成されている（2～5章）。神父の死を聞いたセバスチャン王（イエズス会士の教育を受けていた）は，インド総督フランシスコ・バレトに報復の遠征を命じたが，失敗におわった（6章）。

しかし，イエズス会以上に犠牲者を出したのがドミニコ会士で，王の改宗こそ勝ち取っていないが，イエズス会より成果を上げており，ハザルトは第7，8章でしっかりとそのことに触れている。

末尾で，ハザルトはまたしてもオランダ人にかみつく。「異端であるリンスホーテンの「インド旅行記」のラテン語訳43章198頁の破廉恥（onbeschaemtheyt）」を見過ごすわけにはいかないというのである。そこには，モール人がほとんど改宗していないこと，宣教師が本腰を入れていないこと，イエズス会が他の地域に比べて効果がないのでこの地の布教から遠ざかっていることが述べられるが，彼が旅行したのは1590年以後[163]なのでこの記述はお笑い草だとする。イエズス会はそれまでの30年間，ソファラから喜望峰にいたるまで布教を行っているのに，そうした営為が無視されているというわけである。また，イエズス会士が不毛な地に赴こうとしないと言うのに対しては，アフリカより不毛なオラ・ピスカリア[164]，獰猛なカナダ・ブラジルに赴いていることを指摘し，日本では種々の迫害に遭っているとする。しかし，裏を返せば，1590年以降の当地での活動が沈滞していたこともまた事実なのである。

アフリカ全体でみると，東のエチオピアは別として，ポルトガルの植民地活動と雁行していた西アフリカ各地の布教は連動していた。この部分の記述は主にジャリック

---

[163] 彼がインドから帰航する途中に東アフリカに立ち寄ったことを言っているが，それは1589年のことである。

[164] インド東南部のFishery Coastのこと。真珠採集の現地民が支配者の搾取から逃れるためにポルトガル人の力を借りようとして大量に入信した。ザビエルが何度が訪れた場所である。何を以て不毛と言っているのかは不明。

に負っているが，それを越えて布教をトータルに見ることはできていない。アンゴラにもシエラレオーネにも登場するバレイラ神父はアンゴラの征服活動に大きくコミットしていたが，そのことが描かれず，アンゴラで挫折した後にシエラレオーネに転進したことも述べられない[165]。しかし，これは意図的というより，材料の問題であったように思われる。とにかく，西アフリカの記述の熱度が低いことは間違いない[166]。

・ドイツ史（pp.111-279）

序言では，「敵を知ることが重要」として，ドイツにおける異端の発生，フランスにおける展開を本巻で述べ，第 3 巻でネーデルラント，イングランドを扱うことを予告する。ルター派の「蔓延」を扱う本篇ではドイツだけでなく，北欧・東欧の異端についても述べられる。

第 1 部「異端の始まり」（pp.111-117）の第 1 章では，16 世紀の時点では教会の敵はトルコ，ユダヤ，異教徒のみで，中世の異端はすでに消滅しており，「すべてが平和だった（alles in peys ende vrede was）」とする。第 3 章では，騒乱の原因として教皇が発した贖宥状の問題を挙げながら，その目的は十字軍の資金集めにあったとして，サン・ピエトロ大聖堂の建設には触れず，集金マシンとされるドミニコ会士ヨハン・テッツェルが非難されることもなく，むしろこれまで集金を担当してきたアウグスティノ会がこれを快く思わず，その一員であるルターが攻撃したとする。

第 4 章ではルターの出自を扱う。まず，ゴンサロ・デ・イレスカス[167]を引用し，多くの信者を悪魔の軍旗（het vendel des duyvels）のもとに連れ去ったルターと，多くの蛮人を信者にしたコルテスが同時代に生まれ[168]，北に悪が生れると南からそれを是正す

---

[165] José Augusto Duarte Leitão, “A missão do Pe. Baltasar Barreira no Reino de Angola（1580-1592）,” *Lusitania sacra*, 2nd series, 5, 1993, pp, 43-91.

[166] アフリカ全体のイエズス会の活動を論じたものとして , Festo Mkenda, “Jesuits in Africa: A Historical Narrative from Ignatius to Pedro Arrupe,” Jesuit Historiography online, 2022 がある。https://brill.com/display/title/60118?language=en 最終閲覧 2023.2.6.

[167] ハザルトのリストには挙がっていないが ,Gonsalo de Illescas, *Segunda parte de la Historia pontifical y catolica* を指す。初刊は 1574 年。イレスカスはルターの生年 1483 年をコルテスが生れた 1485 年に誤る（Winston A. Reynolds, “Gonzalo de Illescas and the Cortes-Luther Confrontation,” *Hispania*, 45-3, 1962, pp.402-403 参照。

[168] ルターの生年月日を 1483.11.10 とするのは正しいが , 上述のようにコルテスが生まれたのは 1485 年である。おそらく , イレスカスによるコルテス・ルターの関連付けのアイデアをいただ

る存在が登場し，ロヨラも同時代に教会の守護者として生まれたという。カトリックの神学者カスパール・ウレンベルク（1548-1617）の『ルター派列伝』の問題児ルターが「1日に14回も鞭打たれた」というエピソードを引くのをはじめとして，彼に対する人格攻撃（下宿の未亡人から「女にまさる快楽はない」と教えられた，しばしば悪魔に憑かれたなど）を行う。本書の中で幼少時からの事蹟に言及され，これだけ個人についての種々の側面が紹介されるのはルターのほかにない。

第2部「異端の進行」（pp.117-126）では，1520年のルターの破門から説き起こし，翌年のヴォルムス国会でのヨハン・エックとの論争[169]，ザクセン公の庇護下でのヴァルトブルク城隠棲，そして1522年のヴィッテンベルク復帰までを扱う。

第3部「異端の強化」（pp.126-132）の第1章のタイトルは「ルターの狂気（uitsinnichheyt）の増進」となっており，反対派の議論に狂犬のようにかみつくルターが描かれ，第2章では処女の純潔（maeghdelycke suyverheyt）を否定した彼のもとに修道士・尼が集まり，ヴィッテンベルクが「淫売宿（alghemeen bordeel）」と化し（p.128），そこでルターは教皇然としてふるまったという（p.129）。その一方で，第4章では教皇が異端の阻止に「最善を尽くした」ことが述べられる。

第4部「異端の諸派への分裂」（pp.132-152）では，アンドレアス・カールシュタット（1章），トマス・ミュンツァーと農民戦争（2章），再洗礼派（5章）などを紹介し，第6章以降は，再洗礼派によるミュンスターでの「狂乱」が描かれる。再洗礼派については，そのルーツに関する諸説があることを紹介した後，前掲のウレンベルクの「ボヘミアとモラヴィアに住んでいたワルド派がヴィッテンベルクのルターの噂を聞いて使者を派遣し，幼児洗礼を話題にすると，ルターは信仰教育が進んでから洗礼すべきだと言った」という記事を引用し，ルターがその基礎を築いたことは確かだとする（p.140）。

ハザルトがミュンスターにおける再洗礼派の王国（ヤン・ファン・ライデンが王位に就いた）に多くの紙幅を割くのは，異端がこうした「鬼子」を産んだことを強調し

き，これに1491年生まれのロヨラを付け加えたということだろう。

169 第1部で述べられる枢機卿カエタヌスとのアウクスブルクでの論戦でもそうだが，相手の主張にまともに向き合わず，主張の撤回を求められると返答を引き延ばしたあげくに結局逃げ切るといったルターの狡猾さが強調される。

たいがためだろう。17 世紀の後半のイングランドにおいても，ミュンスターの記憶をプロテスタント諸派が利用して他派を糾弾していたほど，これはスキャンダラスな事件だったのである[170]。

第５部「登場した異端がさらなる分裂を生む」（pp.152-162）では，時をさかのぼり，第１・２章で聖体をめぐる見解でルターと袂を分かったツヴィングリとエコランパディウス，第３章でメランヒトンとアグリコラを扱う。スイスで戦死したツヴィングリは別として，その弟子エコランパディウスやメランヒトンの死にざまを取り上げるのには「悪意」を感じざるを得ない。前者については，ネーデルラントから追放された司教リンダヌスの「絶望の末に死んだ」という言に加え，「悪魔が夜に彼の寝床で首をへし折った」というルターの言などを紹介し，「異端」の間でも憎悪が存在したことをほのめかす。後者については，臨終の際に母親にどの信仰に従うべきか問われて「カトリックが一番確かだが（sekerste），他の宗派のほうが人々には快適（behaeglycker）だろう」と答えた話を紹介し，メランヒトンが死ぬまで自分の信条に疑いをもっていたとする。

第４章では，分派が余りにも多く生まれたことで，張本人のルター自身が参ってしまって病に臥せったほどであり，分派は「多頭の蛇」のようなもので，一つ斬ってもまた生えてくる（een serpent met vele hoofden, als hy een hooft hadde afghekapt, daer groeyden datelijck inde plaetse vele andere）とする。そして，本章と次章でマイナーな異端の主張をこまめに紹介するのは，ドイツが「新しいバベル」（p.161）となったことを強調するためであろう。

第６部「あらゆる異端の間に見られる神慮について」（pp.163-180）の第１章では，こうした事態を神が予見しており，異端が悪魔から学ぶことをあえて許したとして，ルターがミサについての見解を悪魔との交信によって得たものであることは彼自身が述べているとする。

第２章では，16 世紀のヨーロッパ各地で起きた天変地異を列挙する。場所はドイツに限らない。たとえば，1547 年にクラクフに象鼻を持った子供が生まれ，1571 年２月 20 日にはイングランドのヘレフォードで大地が大きく割けた。

---

[170] Andrew Crome, “The Münster Rising, Memories of Violence, and Perceptions of Dissent in Restoration England,” *The Historical Journal*, 65-4, 2022, pp. 946-968.

第3章では，「異端は奇跡をかたくなに信じようとしない」が，これだけの奇跡を神は示されたとして，1「聖体」2「マリアや聖人」に起きた奇跡をまとめる。「聖体」では近時の奇跡だけでなく，記録を総動員する。近時のものとしては，たとえば，1556年，ポーランドでユダヤ人に仕える女が主人の求めに応じて聖体を渡し，ユダヤ人がシナゴーグでそれを剣で突いたところ大量の血が流れ出たが，やがて事は明るみに出て，ユダヤ人は火あぶりとなり，当時信仰を怠っていたジグムント王はこれをきっかけに信仰を強化したという話を載せるが，ユダヤ人が聖体を傷つけると血が噴き出すという話は他にも見られる[171]。第4章では，逆に異端が仕組んだインチキの奇跡がとりあげられ，カトリックのジェローム＝エルメス･ボルセック（いったんカトリックから離れ，また戻ってカルヴァンの伝記を書いた）ら複数人が，カルヴァンがある男を買収して蘇生の奇跡を演出しようとしてしくじったことに言及しているとする。

第5章では，異端の恥ずべき生と悲惨な死の例を挙げ，第6章では，これと対比すべく，ロヨラ・ザビエルを先頭してローマ教会側で前世紀に登場した聖人を列挙し，女性だって負けてはいないとして，ロヨラ・ザビエルと同時に列聖された聖テレサ，1626年に列福され，本巻刊行の翌年に列聖されたマグダレーナ・パッツィ，テレサの弟子であるネーデルラント出身のアナ・デ・ヘス―ス，ドミニコ第3会のマリア・ラッジ，スペインのマリナ・デ・エスコバルらの名を挙げ，「放縦な聖職者たちの相手」としてしか女性が出てこない異端との対比を際立たせるが，もはやドイツの話とは関係ない。第8章では異教徒のもとでのカトリックの成果を数えあげることで，異端との差をさらにきわだたせる。多くはすでに第1巻に出てきた話柄なのだが，ルターがヴィッテンベルク，カルヴァンがジュネーブの「狭い空間」で活動している間に，カトリックは海外のインド人の布教にあたっていたとして，フランシスコ会士ピーテル・デ・ヘントのメキシコでの20万人改宗にドミニコ，アウグスティノ，イエズス会士が続いたこと，ペルーの場合は1529年のドミニコ会を先頭にフランシスコ，アウグスティノ，イエズス会が続いたこと，そして1540年にカルヴァンが「毒をまき始めた」ころに，フランシスコ会のジョアン・デ・ヴィラ・デ・コンデがセイロン王を改宗させたこと，1548年に同じくフランシスコ会の2神父がセイロンで地方の王と王妃を改宗さ

[171] 第3巻第1部第4章「聖体による種々の奇跡」p.15.

せたこと，1559 年のヴィンセント･ラゴスによるタノル王改宗[172]，ドミニコ会のソロル，シャム，カンボジア，ソファラでの布教，イエズス会ではザビエルが日本そしてアジア各地で布教し，10 年で 12 万人を改宗させ，ジローラモ・デ・アンジェリスが 20000 人改宗の後火あぶりになったこと[173]，シナでは 1579 年にミケーレ・ルッジェーリが布教をはじめ，その後信者が 30 万人に達したこと，ルドルフォ・アックアヴィーヴァはモゴルで，ペドロ・パエスはアビシニアで，ゴンサロ・ダ・シルヴェイラはモノモタパで，アブラハム・ゲオルギウスはマロン派のもとで，ホルムズではガスパール・ベルゼ，ブラジルではジョゼ・デ・アンシエタが，他にもカナダ・エジプト・ペルシアで布教し，宗教よりも商売，永遠よりも現世を優先するオランダのカルヴィニストの妨害にあちこちで遭いながらも屈していないことを誇る。

第 7 部（pp.180-191）では著名人の転向を取り上げ，第 1 ～ 6 章でケルンの大司教ゲプハルト・トルクセス，ハンガリーの司教アンドレアス・ドゥディス，フランス人枢機卿オデ・ド・コリニー，カンタベリー大司教トマス・クランマー，カプチン会総長ベルナルディーノ・オキーノといった前世紀にカトリックの信仰を放棄した高位聖職者を扱う。このうち安らかに死んだのは，カトリックに好意を寄せ続けたドゥディスだけで，あとは皆哀れな末路を遂げたのであり，クランマーは女王メアリによって処刑される際に，表向きはカトリックに転向したが炎の中で天に呪詛の言葉を吐いたとする。一方，第 7 ～ 9 章では逆にカトリックに帰した者を取り上げるが，有名なのはギヨーム・ポステルだけであり，「大物」の転向では，プロテスタントのほうが成功しているようにも読めてしまう。

第 8 部「ドイツの戦争」（pp.191-201）では，まず最後まで悪魔に憑かれたルターの死についての証言を「信頼すべき」著述家トマス・ボジウス，ペトルス・ティラエウス（いずれもカトリック，後者はイエズス会士）に求める[174]（1 章）。この男が死後もド

---

[172] インド大陸で改宗した王は彼だけであり，ゴアに来た王は盛大な歓迎を受けたが，その後彼の改宗の真意をゴア当局は疑っている。Diogo de Couto, *Decada* 6, Livro7, Capitulo5（Lisbon, 1781）pp.92-104. Ines G. Županov, ""One Civility, but Multiple Religions": Jesuit Mission among St. Thomas Chrisitians in India（16th -17th Centuries)," *Journal of Early Modern History*, 9-3/4 ,2005, pp.289-296.

[173] 1623 年の江戸の大殉教時のことである。

[174] Michael B. Lukens, "Luther's Death and the Secret Catholic Report," *The Journal of Theological*

イツの人々にキリスト・パウロについで崇敬されていることは認めつつ，そうした事態こそが戦禍を招いたとして，以下では皇帝カール５世とプロテスタント諸侯間の戦争について述べる。1547 年 4 月 24 日のミュールベルク勝利の日には太陽が異様な色をしていたことを「異端の」スレイダヌス[175]も含む複数の著述家が指摘しているとする（6 章）。その後も諸侯の反抗は続くが，不在の兄にかわってフェルディナンドが彼らと和約を結んだのは，トレント公会議での問題解決までの暫定措置であった（8 章）。

第９部「ドイツのカトリックの闘士」（pp.202-213）では，第１章でカール５世を讃えつつ，歴史家は一致してトレント公会議での解決を待って（interim）断固たる措置を講じることができなかったのは大きな失策であったと評しているとした後，「我らがファミアーノ・ストラダ」は皇帝自身その非を認めていたとして，この闘士を弁護する。イエズス会士ストラダは，ネーデルラント篇でハザルトが主要な典拠とする歴史家である。

さらに，ルターに「地獄行きだ」と言われた（p.208）ザクセン侯ゲオルグ，三十年戦争時の皇帝フェルディナンド２世，そしてルターと戦ったテッツェル，エック，「神からルターとその弟子たちを倒すために遣わされたような」（p.212）ヨハネス・コホラエウスらの修道士，最後に「定見はないながらも（wanckelbaer in heteen stuck, ende in het ander）」（p.212）ルターを論破し，ツヴィングリやカルヴァンの聖体観を批判したエラスムスを挙げる。

第 10 部は「イエズス会士がドイツで異端阻止のためにしたこと」（pp.214-227）と題する。ロヨラら初期のメンバーはルターやカルヴァンをほとんど意識していなかった。「異端に対する戦士」としての役割を自認し，喧伝するようになったのは，トレン

Studies, New Series, 41-2 ,1990, pp.545-553. ボジウスは 1548 年に貴族の家に生まれ , ローマに出て枢機卿シルレトの知遇を得 , フィリッポ・ネリとの出会いにより , オラトリオ会に入る。82 年にバロニウスの教会史編集を助けるよう命じられ , 88 年に第 1 巻が刊行された。91 年に刊行され , フランスやドイツで版を重ねた *De signis Ecclesiae Dei contra omnes haereses* は , ハザルトが第 3 巻で多用する文献の一つである。

[175] シュマルカルデン同盟側の歴史家。*Commentariorum de statu religionis et reipublicae, Carolo Quinto Caesare, libri XXVI*（Strassbourg, 1558）. Francesco Vitali and Stefano Vitali, “A proposito della battaglia di Mühlberg e della guerra Smalcaldica: alcune fonti italiane coeve,” *Archivio Storico Italiano*, 165-1, 2007, p.59.

ト公会議にコミットするようになって以後である[176]。ハザルトはフロリモンの第2部第1書第2章[177]から「神がアルビニョン派の毒に対してドミニコとフランシスコを薬としたように，マニ教やペラギウスが横行していた時にはアンブロジウスとアウグスティヌスを登場させたように，あるいはネストリウスにはキリリウスを，ヨビニアヌスにはヒエロニムスを向かわせたように，ルターが聖なる教会に戦いを挑んできたのに対しては，元軍人のロヨラを覚醒させた。1517 年にルターが教皇の敵であることを宣言したのと同じ年に，ロヨラは聖ペテロを自らの守護聖人とした。」（要約。p.214）という記述を引用し，結成時のロヨラと 9 人の仲間たちを異端に対する戦士として位置付ける。彼らが仲間になったのはともに聖地巡礼をするためであったが，スペインに一時帰国したロヨラを除くメンバーはドイツを通過した。その過程で異端との論戦にディエゴ・ライネス（第 2 代総長になる）が勝利したことを述べ，教皇にイエズス会が承認（1540 年）される前からドイツに根をおろしていたとする。第 3 章では，ペトルス・カニシウス（ネーデルラント出身）をヒエロニムスに擬し，カール 5 世が武器を用いて異端を倒したのと同様に異端を改宗させたことをたたえたアウベルトゥス・ミラエウス[178]（ブリュッセル生まれ）など諸家の賛辞を並べる（p.212）。

第 4 章では「異端に殺された人々」について述べるが，最初の一人を除くとすべて三十年戦争の最中に殺された司祭たちである。その中でキリストのように吊るされて責め苦をうけている場面が図版に描かれているのがシレジア出身のヤン・サルカンデルで，彼は 1995 年に列聖されている。

第 11 部「ドイツにおけるカルヴィニズムの普及」（pp.227-259）では，カルヴァンの登場によってドイツの異端は「バベルの状況を呈した」（p.228）として，カルヴィニズムのファルツ（2 章），ハンガリー（4 章），トランシルヴァニア（5・6 章），ポーランド（7 章），ボヘミア（8・9 章）への導入を取り上げる。

ハンガリーでは，追放されたフランシスコ会士がトルコ人の恩情に接することになる。ハザルトはここでスルタンのスレイマンに言及し，彼は信仰を除けば有徳の人で

---

[176] John W. O' Malley, S.J., *The First Jesuits*, Harvard U.P., 1993.

[177] 実際には，第 5 書第 2 章。

[178] リストには彼の別の著書『フェルディナンド 2 世のボヘミア戦争』が挙がっているが，ここは *Elogia belgica sive Illustrium Belgi Scriptorum*（Antwerp, 1609）からの引用である。

あり，ルター派とカルヴァン派の対立は自らを利するので歓迎していたが，自分の領土内で宗教の争いがおきることは内紛や君主への反抗を引き起こすから喜ばなかったとする（p.233）。

トランシルヴァニアについては，その動向が周囲から注目されていた大公ジギスムント・バートリ[179]（1586年即位。ポーランド王でもあったステファンの甥）とイエズス会のかかわりが記述の中心となる。

ポーランドについては,「カトリックの強固な壁」が王ジグムント・アウグスト（1548年即位）の信仰の自由承認を契機に諸々の異端によって突き破られ，ヨシアス・ジムラー[180]の「ポーランドの教会は大きな危機にある。この地に来た新しい異端がマホメットの教えに門を開くことが憂慮される」という言を引き，実際にカルヴァン派の中の多くの者がコンスタンティノープルに赴いて改宗したとして，ルター派のヤコブス・アンドレアがその理由を「カルヴァンの教義がそこに直通する道だからである（de leeringhe van hunnen meester Ian Calvin hun den rechten wegh toe baent）」と述べたことを記す（p.246）。その後に司教やイエズス会による挽回があったとするものの，17世紀については，異端に襲われて殺された司教ヨサフェイト・クンセヴィッチがウルバヌス8世によって1642年に列聖されたことのみを記し，イエズス会の影響を受けたジグムント3世の治世には全く触れない。

ボヘミアについては，異端が次々に現れる惨劇の場であったとして，フス戦争から1618年の蜂起，プラハの回復にいたる過程をフォローし，カトリックの勝利をうたいあげるが，その後も騒乱はおさまらず，カトリックを推進していた君侯が異端の農民によって殺されるといった事件によって庶民の残忍さに恐れをなしてカトリックに転じる貴族があいついだとする。

第12部「スウェーデン，デンマーク，ノルウェー」（pp.259-279）の記述の大半は

---

[179] バートリに対するヨーロッパの期待の一面を照らし出した論文として，Márton Szentpéteri, “Il Transilvano. The Image of Zsigmond Báthory in Campanella’s Political Thought,” *Bruniana & Campanelliana*, 9-1, 2003, pp.217-225 を挙げておく。

[180] チューリヒの神学者で，初期教会史についての著作を有する彼がポーランドの事情に言及するのは，「異端」からイスラームが生れたのであり，現代においても異端がトルコの伸長を招く恐れがあるという認識を抱いていたからである。Mark Taplin, “Josias Simler and the Fathers The »Scripta veterum latina«（1571）,” *Zwingliana*, 38, 2011, pp.67–152.

スウェーデンに割かれる。

スウェーデンの部分では，グスタフ 1 世（1523 年即位）のルター派導入，その子エリクとヨハンの対立，後者の即位，ヨハンのカトリック復帰の動きに対応したローマ教皇によるノルウェー人イエズス会士ラウレンティウス・ニルセンの隠密派遣，教皇使節のイタリア人イエズス会士アントニオ・ポッセヴィーノの特派[181]と，カトリックのサクセス・ストーリーをたどり，その挫折にはこれらの動きに関与しイエズス会を支持していたポーランド人王妃の死（1583）が決定的だったとする。その子のジグムントがポーランド王となってスウェーデンを去ると，新王カールのもとでカルヴァン派が入ってきた。その後継者で「全ドイツを蹂躙し」「みじめな死を遂げた」グスタフ・アドルフと三十年戦争には紙幅はほとんど割かれず，娘のクリスティーナ（元）女王のカトリック改宗とローマ行はたっぷり記述する。彼女の引退への画策にはイエズス会士が深く関与し，1653 年に退位してローマに向う途中ミュンスター，アントワープを訪問していた。しかし，このことはもはやスウェーデンには何の影響も及ぼさなかった。

一見すると奇異なのが，最終第 7 章の「ラップランドへの在俗司祭の旅行」である。1660 年にフィンランド生まれのルター派のヨハン・フェルディナンド・コーニングがプラハでイエズス会士に出会い，カトリックに改宗した。その彼がラップランドに布教の可能性を探りに行った時の記録を紹介するのだが，主眼は民俗的記述にはおそらくない。ラップランドから連れ帰った子供が現在プラハのセミナリオで教育を受けていることを記して，未開地が少なくなってもカトリックによる開拓の営為がなおも続いていることを示そうとしたのだろう。

・フランス王国史（pp.280-406）

ドイツ篇とちがって二階建てになっておらず，章のみで構成される。まず，5 世紀のカトリック改宗以来，異端に抗してきた歴史を振り返り（1 章），カルヴァンが「自らの祖先（hunne voorouders）」のように言うので取り上げないわけにはいかないとし

[181] John Donnelly, “Antonio Possevino: From Secretary to Papal Legate in Sweden,” Thomas M. McCoog S.J.,ed., *The Mercurian Project: Forming Jesuit Culture, 1573-1580*, Institute of Jesuit Sources, 2004, pp. 323-349.

て（p.182），ワルド・アルビニョン派の興亡について述べる（2・3章）。

ここまでが前史で，フランソワ1世の学芸振興策による諸国の学者招致がきっかけでルター派が入ってきたが，彼らがフランソワを引き込むのに失敗したことを描いた（4～6章）後に，カルヴァンが登場する。

カルヴァンへの人格攻撃はルターに対するそれよりも激しく，とりわけ第8章で若きカルヴァンが姦淫の罪によりノワイヨンで烙印を押されたこと[182]についてそれを肯定するカトリック・ルター派の証言をずらりと並べるのはいささか偏執狂めいている。ただし，ハザルトにとっては，第8章の冒頭で「1644年にカルヴァン派のアンドレ・リヴェ[183]がその著作の前言で否定しなければこの話を蒸し返すことはなかっただろう」というように，彼としては売られた喧嘩でもあった。ハザルトはリヴェがこの問題を持ち出したいきさつに触れないが，1537年に事件が起きてから100年以上，カルヴィニストはこの問題に触れずにきたと言う（p.293）。そして，リヴェがこれまでの著述を信用できないとする根拠を一一潰しにかかる（9章）。論争家の面目躍如である。

さらに，宗徒から聖人扱いされているカルヴァンの性格をあげつらい，その死についてカトリックのペトルス・クトセミウス，カルヴァン派のジャン・ド・ハーレン[184]がともに「シラミの群れによる痛苦」と言っていることを指摘し，ジャン＝バティスト・ド・グレンに依拠してそれ以上に良心の痛みに耐えかねてついに自らの過誤を認めたとする（11章）。

ここでようやく彼の活動の話に戻るが，その前に「烙印についての真実」を何としても明らかにせねばならないと思ったのだろう。エラスムスがカルヴァンを「大きな

---

[182] Kirk Essary, “ Calvin's Critics: Bolsec and Castellio,” Ward Holder ed., *Calvin in the Context*, Cambridge U. P.,2020, pp. 328-355.

[183] ハザルトは当該書を *Controversien* とするが，書名はリストにある通り，*Catholicus Orthodoxus, Oppositus Catholico Papistae* である。ただし，1595年刊とするのは誤りである。どの本にあたるか見つけることができていない。リヴェは当時，イエズス会士と論争していた。

[184] クトセミウスについては，リストに挙げられた *Hyperaspites pro tractatu de desperata Calvini causa*（ケルン，1612刊）である。ハーレンはカルヴァンが亡くなった時にジュネーヴにいた。その後いったんカトリックに転向している。カルヴァンの死について述べたのは，*Profession catholique de Jean Haren*（ナンシー，1599刊）であって題名からわかるようにカトリック時代の作である。A.C. Duke, *Dissident Identities in the Early Modern Low Countries*, Ashgate, 2009, p.228.

ペスト」と言ったように（p.310），その教説はジュネーブを根拠地としてフランス全土に広まっていた。

ついで，彼の弟子のテオドール・ド・ベーズの話に移る（14・15 章）。ハザルトはこの祖述者あってのカルヴァンだと認識していた。先の「烙印」をめぐる議論でも何度もベーズを引き合いに出している。人格攻撃は相変わらずで，ベーズが 70 歳になって 22 歳の新妻を迎えたことを記すが（p.315），この話が持ち出されるのは二回目である（第 6 部第 2 章）。

第 17 章「宗教と王に対する反抗」以下は，カルヴァン派の蛮行たとえば歴代の王墓や聖人の遺骨に対するユグノーの冒涜（23・25 章）などの記述が続き，第 26 章「カトリックがいかに正しくこれらの残虐に立ち向かい，復讐したか」では暴力には暴力で立ち向かうことが正当化される。その中にライネスとベーズの論争（18 章），ポッセヴィーノとピエール・ヴィレとの論争（29 章）といったように戦うイエズス会士の姿が織り込まれる。第 32 章でいわゆる「サン・バルテルミーの大虐殺」がとりあげられるが，ハザルトは死者の数をカウントした後に，「この熱情を神が喜ばれた（desen yever aen Godt aenghenaem was）」証拠として枯れ木に花が咲いたと記す（p.350）。

アンリ 4 世のカトリック改宗は教皇にとっても喜ばしいことであり，使者としてポッセヴィーノが派遣されたが，一方でパリのイエズス会士はアンリの即位に反対したために迫害された。この時すでにソルボンヌ（即位を支持）とイエズス会の対立は始まり，大学側の弁護士アントワーヌ・アルノーとイエズス会の論戦は 13 年続いた。さらに，イエズス会のコレジオで学んだ男が王の暗殺を図ったことからイエズス会はパリから追放された（41 章）。しかし，アンリの赦免にはイエズス会士の枢機卿フランシスコ・トレドが一役買い，教皇はこれと引き換えにイエズス会の復帰を王に働きかけた。王は逡巡しつつも，最終的にはイエズス会の復帰を宣言した。ハザルトは反論に対する王の演説を「これに勝るイエズス会への賛辞はない」として全文を引用する（pp.372-373）。アンリは再び暗殺者に襲われ，今度は落命すると，またしてもイエズス会の関与が疑われたが，新王はイエズス会を支持した（48 章）。そして，1627 年のユグノーの根拠地ラ・ロシェルの陥落（49 章）を記した後は，異端と戦った宣教師について述べる。この時期のフランス最強の説教師とされるイエズス会士エドモン・オージェだ

けでなく，列聖されたジュネーブ司教フランソワ・ド・サール，カルメル会，ミニム会，ドミニコ会，フランシスコ会への言及も忘れず（52 ～ 54 章），最後に「戦い」によって殺された宣教師を扱う（55 ～ 57 章）。ルーカス・ワディングの『フランシスコ会史』[185] が 165 人の会士が異端に殺されたことを記していることに触れるが，イエズス会の犠牲は 5 人に止まっている。ハザルトは「ブラジル史でフランスのカルヴァン派がイエズス会士を襲ったことは述べた。ここではフランスで殺された者たちについて述べる」というが，大西洋上で一時に 40 人殺されたのに比べて，長期にわたる戦争の中で 5 人というのはむしろ少ないというべきだろう。

第 3 章　より身近な異端―ネーデルラント・イングランド

著者にとってネーデルラントは故郷であり，イングランドは対岸にあってそのカトリックの命運はネーデルラントとも結びついていた。第 3 巻の冒頭には、ネーデルラントから「異端」を一掃した聖人ノルベルトゥスが開基した修道院の長マカリウス・シメオモに対する献辞（1669.5）を載せる。ノルベルトゥス以来この修道院は異端と戦う「勇敢で不屈の兵士を」養成してきたという。献呈相手としてはうってつけの人物である

・ネーデルラント史（pp.1-246）

さすがに本篇には本書で最も多くの分量が割かれている。前言は本篇の趣旨を述べるものではなく，アントワープをはじめとする地名の由来が検討される。読者にアイデンティティを確認させようとしたものだろう。本文ではネーデルラントの内乱を扱うので、舞台は南部に限られないのだが，ここでは北のオランダが排除されていることが注意される。

第 1 部「ネーデルラントの初めての改宗」（pp.7-16）では，カトリック信仰に転じた時期が検討される。キリストの 70 人の弟子のひとりがペテロによって 54 年にフリースランドに派遣されてそこで教えを広めたという説に蓋然性があるとしながら，確実な史料としては，カメリック・ユトレヒトへの布教に言及する 270 年の教皇ディオニ

[185] 同書（ローマ , 1650 刊）には , 末尾に殉教者リストが付される。

シウスがコルドバ司教に送った手紙を挙げる。その後，ヴァンダル等の相次ぐ侵入によりカトリックはほぼ消滅するが，7 世紀にはアントワープに教会が作られ，フランドル・ブラバントの大半はカトリックになっていたという。

12 世紀初に聖体を否定する異端のタンケルムが武力を背景にアントワープに到来するが，これを退けたのがブレモントレ会を結成した聖ノルベルトゥスと 12 人の仲間たちであった[186]。14 世紀のシスマの影響はネーデルラントにも及んだが，フランス人が立てた「偽」教皇クレメンスに対して正統のウルバヌス 6 世をヘントの人々が支持し続けたとする。ノルベルトゥス以来，ネーデルラントは信仰の王道を護持し続けたということである。

しかし，異端の足音は近づいてきていた。第 4 章は聖体が様々に奇跡を示したことが示される。「古記録にもとづいているのでゴイセンも否定しようがない」として，1345 年にある男が聖体を受けて加減が悪くなり，妻がその吐瀉物を火に投じると，別の女が火の中に白いホスチアを見て火から取り出し，これを聞いた司祭はホスチアを教会に移したが，翌日にはもとの場所に戻っていたという話や，1374 年にゼーラントのミッデルブルフで敬虔な女性が家人に告解するよう命じたのに，使用人がそれを聞かずに聖体を拝領したところ肉に変わり，これを吐き出すと血が流れ，彼はそれから目が見えなくなったが，今でも肉の状態で保存され，男の歯形もついているという話を紹介し，こういったことはやがて地獄からわがネーデルラントに異端が現れる前触れ（voor-teecken ende voor-boden geweest van de aenstaende ketterijen）だったとする。

第 2 部「騒乱，異端の出現」（pp.17-33）では，冒頭で 1559 年頃にあらゆる種類のセクトの多くの怪物が現れ，それまで強固で破られたことがなかった真の信仰の堤と壁（stercke ende tot noch onverbroken dijcken en mueren van de waere Religion）を内から決壊させたとする（p.17）。この年にスペインのフェリペ 2 世がネーデルラントを去った。それまで秩序ある統治をおこない，宗教面では新しい司教区を作り，それぞれにすぐれた教会人を置き，異端審問所に学識者を配置し，異端に目を光らせていた彼が

[186] 1582 年に列聖されたノルベルトゥスは，「異端を追い払った」アントワープの人々にとって象徴的な存在であった。Judith Pollmann, *Catholic Identity and the Revolt of the Netherlands, 1520-1635*, Oxford U. P., 2011, pp. 175-178.

去ったことで怪物が跳梁し始めたというのがハザルトの見立てである。

彼が任命したメヘレン大司教グランヴェルと諸侯の対立を騒乱の「第一の原因」とし（3章），「他の原因」（4章）としてスペイン兵の駐留，諸地方の特権に抗して新しい司教区を設定したこと，異端裁判所の導入を挙げる。後二者は少し前にフェリペの統治の美点として挙げられているので矛盾するようだが，政府側よりそれに対する反抗に原因があるということなのだろう。混乱に拍車をかけたのが，外国の傭兵や亡命者による異端の導入であった（5章）。諸侯からグランヴェル罷免の要求を受けたフェリペがそれに応じないうちに騒乱は拡大したが（6章），グランヴェルは1564年に王命によりネーデルラントを去った（7章）。しかし，フェリペが残した摂政マルガリータでは諸侯の不満を抑えきれず，王の来駕を乞う一派とそれに反対する一派が対立，後者のオラニエ公の主張が引用される（8･9章）。王との交渉のためにスペインに向かったエグモント伯とオラニエ公が対立したが，ひとまずはエグモントが主導権を握った。ハザルトは，エグモントとオラニエは好対照で，武人で美男子のエグモントには人々の輿望が集まったが，口先だけ勇敢で風采があがらないオラニエは恐れられるだけだったとする（10章）。

第3部「ネーデルラントの公然たる騒乱」（pp.33-84）では，まず「紛争は貴族から始まる」として貴族の同盟結成について述べ，第2章では貴族たちがブリュッセルに入り，摂政に突きつけた要求書をイエズス会士の歴史家ストラダから引用する。ストラダ（1572-1649）はイタリア人のイエズス会士で，1617年にパルマ公ラヌッチョの要請により，ネーデルラントの戦争史の編纂にあたった。パルマ公の父アレッサンドロがネーデルラント総督で，1585年のアントワープ包囲を指揮した当事者だったことから史料が整っていた。こうした編纂事情は当然この史書『ベルギーの戦争』（ラテン語，ローマ，1640刊）の性格をある程度規定するはずだが[187]，ハザルトにとっては会の先輩の著作でもあり，騒乱史を扱った諸作の中で最も信頼のおけるものであった。また，

[187] 実地の経験を持たない著者が後世になって編んだ本であることで，事件に直接関与していた史家グイード・ベンチヴォーリオ，エドワード・ハイドに非難された。Meredith Hale, “ The Production of History: Famiano Strada's De Bello Belgico,” M. Stocker and P. Lindley eds., *Tributes to Jean Michel Massing: Towards a Global Art History*, Harvey Miller Publishers, 2016, p.91.

本章にはハザルトが目の敵にするカルヴィニスト側のエマヌエル・ファン・メテレン『ネーデルラント史』（蘭語，デルフト，1605 刊）も顔を出す。ハザルトは貴族たちがブリュッセルに丸腰で入城したとする彼の記述にケチをつける。

交渉は不調に終わり，摂政が「カトリックの信仰以外は認めない」と宣言するに至って，ハザルトは「洪水により堤防が決壊した」と述べる（p.42）。カルヴィニスト，再洗礼派，ルター派に分かれて各地で騒動が発生し，暴徒が教会に狼藉を働いた（5 章）。とくに異端の勢いが激しかったアントワープにオラニエ公が送られ，事態の収拾に成功したが，それは異端の集会を許容したからであった。彼はアントワープの市政を掌握した（6・7 章）。そして，聖像破壊（beeld-stormerije）が始まり，アントワープでは聖母昇天の祝日に聖母大聖堂のマリア像が「ビバ，ゴイセン」の掛け声とともに破壊された（8 ～ 10 章）。聖像破壊について，ゴイセンの歴史家ピーテル・ボル，ファン・メテレン，ヘラルド・ブラントは，聖像破壊に説教者たちは関与していないと主張したが，ハザルトはこれに対して「ビバ・ゴイセン」が動かぬ証拠だとして，前記のストラダを先頭とするカトリック側の歴史書，さらにはカルヴィニストの諸家の記述の当該箇所の頁数まで示す（11 章）。こうしたなかでも，信仰の護持という点ではブレない摂政が貴族との協議の場で行った「見事な演説」を第 13 章で長文引用する。しかし，暴徒のブリュッセル接近の前に妥協を余儀なくされた（14 章）。これにより小康状態が訪れたが（15 章），異端がまた騒ぎはじめたので，摂政はフェリペに救援を求め，王はついに親征を決意した（16 章）。その報が入ると，これを阻止しようとしたオラニエ公ら貴族たちは手段を択ばず，「スペインに異端の本をばらまく」「ガスパール・ド・コリニー（ユグノーの首領）を引き込む」といった意見だけでなく，トルコとの提携という話も出た。トルコ側からも，スルタンのセリムと親しい Jan Miches[188] からアントワープのゴイセンに抵抗を続けるよう勧める手紙が送られていた。この男はユダヤ人でスペインから逃げ，アントワープからヴェネチア経由でコンスタンティノープルに向かい，セリムに重用されていたという（18 章）。

1567 年，ついにカルヴァン派のヤン・ファン・マルニクスの軍と摂政の政府軍がアントワープ郊外で衝突，反乱軍は敗北し（19 章），アントワープ市は動揺し，カルヴァ

[188] 亡命ユダヤ人中の大物ヨセフ・ナシのポルトガル名 João Miques の転写である。

ン派に対抗すべくカトリック・ルター派の市民が武装化した（20章）。各地でカトリックが勢いづき，ルイクやハッセルトではイエズス会士が招かれた（22章）。摂政は諸侯に忠誠の宣誓を求め，オラニエ公はそれを拒んでドイツに移り（23章），彼が去ったアントワープは屈し，摂政が入市して聖像破壊のさまをみて涙を流した（24章）。

第4部「アルバ公の統治」（pp.85-117）では，いったん沈静化したかに見えたネーデルラントがアルバ公の派遣により，再び騒乱に包まれたことを述べる。スペイン宮廷では王の親征の話はなくなったが，アルバ公に兵をつけて派遣するかどうかで議論になった。派兵に反対し続けたのは一人だけで，教皇大使や枢機卿ディエゴ・デ・エスピノーザら教会人は出兵に賛成した（1・2章）。アルバは着任すると反対派の貴族を独断で逮捕し，知らされていなかった摂政はフェリペに辞任を願い出てネーデルラントを去る。ハザルトは摂政が人々に思慕されていたことは，フアン・デ・アウストリアの没後に再び摂政にとの声があがったことからもわかるとして，彼女には終始同情的である（3・4章）。

完全に主導権を握ったアルバによって「厳しい」統治が行われたが，ハザルトはそれを認めつつもカルヴァン派の史家が言うほどではないとする（5章）。兄のオラニエ公とともにネーデルラントを出ていたローデウェイク・ファン・ナッサウが侵攻して勝利を収め（6章），アルバは自らの出陣中のことを心配してエグモントらを1568年7月1日に処刑した。ここで，ハザルトはカルヴィニストの史家ピーテル・コルネリスゾーン・ホーフトの『ネーデルラント史』（蘭語，アムステルダム刊，1642）が168頁で死刑宣告に王の署名があるとするが根拠はないとし，169頁でエグモントの妻がアルバにじかに命乞いし，アルバが「明日処刑される」と答えたとあるが，これも他書になく，ゴイセンのデマだとする。エグモントの死に際しての発言とフェリペ王への書簡を引用し，処刑の光景を詳細に描き，エグモントの血のしみ込んだ布が後々まで保存されたのを見れば彼がネーデルラント人に愛されていたことがわかると述べる。カトリックとして8人の貴族が死んだことを記しているのを見れば，ハザルトはやはりアルバのやりすぎを認めてはいる。また，エグモントをこのように描くことは，オラニエのアンチ・ヒーロー性を際立たせるためであろう。

アルバはローデウェイクを破ったが（10章），彼に対する人々の憎悪はいや増した（11

章)。1570 年には恐るべき洪水が全土を襲い，ゴイセンはこれを騒乱の前兆と見なし，カトリックは神罰と見なしたという（12 章)。ゴイセンが反転攻勢に出て，ゴルクムが陥落し，19 人の聖職者（うち 11 人がフランシスコ会士）が処刑前に異端の説教者と論戦したことを記す（14 章)。ゴルクムの「殉教」[189] は，この騒乱における象徴的な出来事であった。ハザルトは，「カルヴィニストのボルの 277 頁，ホーフトの 243 頁にも述べられ，異端の残忍さは彼らも認めるところである」としている。

ついにオラニエ公がネーデルラントに戻ってくるが，その軍はとくに聖職者を虐待し，カルトゥジオ会の修道院が襲われ，アウデナールでは 4 人の聖職者が海に放り込まれ，1572 年 10 月 4 日にフランシスコ会のヨハン･マホイスが殺された。ハザルトは，「残忍さではオラニエ公の軍のほうがアルバより上」だとする（17 章)。

アルバ軍がメヘレンを陥落させた時，兵は「上官の命令を聞かずに」略奪した。ハザルトは，「ホーフトは 267 頁でこの時にイエズス会がスペイン人の略奪物の一部を得たと述べるが，事実は異なる」と述べ，ストラダによれば，アルバ公はイエズス会に好意的ではなく，家を買うのも認めなかったとし，イエズス会士ではないヨアネス・ブテルスの「アルバ伝」も同様であるとして，さらにアントワープにいたスペイン人会士のペドロ・トリゴソがメヘレンの人々が受けた損害の回復に奔走したことを付記する（18 章)。

第 5 部「司令官ドン・ルイス・デ・レケセンスの統治」（pp.117-131）では，アルバの後任として聖ヤコブ騎士団長のレケセンスが着任すると，人々の反感を取り除くためにまずアルバの銅像を撤去したことがまず述べられる（1 章)。給料の遅配に怒ったスペイン兵が反乱し，アントワープを攻撃するという事件が起きた（2 章)。ライデンではスペイン軍の包囲が続いていたが，救出を図ったオラニエによる堤防決壊策によってスペイン軍は撤退した。ハザルトはフランシスクス・ハラエウスに依拠して，14000 人の市民のうち 6000 人しか生き残らず，外との連絡に使われた伝書鳩が剥製にされて今日まで残ると記し，解放についてカルヴァン派は奇跡とするが，メールベークを読めばそうではなく，オラニエ公の残忍を証するものでしかないとする。ハラエウスは

[189] この時処刑された 3 人の図版が載るが，ヨハン･オステルウェイクの絵のキャプションには「ゴルクムの殉教者（Martelaren）の一人」とする。彼らは 1675 年に列福されている。

カトリックの司祭で，この内乱に関して『1566-1608年のネーデルラント戦争の原因の公平な解明』（蘭語，アントワープ，1612刊）『ブラバント年代記』（ラテン語，アントワープ，1623刊）を書いているが，ハザルトが使っているのは後者である。アドリアン・ファン・メールベークもアントワープ生まれのカトリックで複数の著作が刊行されているが，ここで引かれるのは『世界，とくにネーデルラント17州についての年代記』（蘭語，アントワープ，1620刊）である。ストラダとともに，ハザルトにとっては「ゴイセン史観」と戦う武器であった。

第4章では，北ホラントの長官となったディーデリク・ソノイ（オラニエの与党）のカトリックに対する「非人間的な残忍（onmenschelycke wreetheden）」を扱う。カルヴィニストのホーフトですら「これについては筆を執る気が失せるが，それでも事実を記さねばならない」と述べていることを紹介した後，「最も残忍な日本人やアメリカの食人も殉教者あるいは犯罪的行為についてゴイセンが無辜のカトリックに対してしたような粉飾を行った例は史書に見つからない（men niet bevinden en sal inde Historien, dat noch de Iaponossen, de wreetste der menschen, noch de Menschen-eters van America oyt soodaenighe wreetheden versiert noch uytgewerckt hebben ten opsichte van de Martelaren ofter misdaedighe,ghelijck dese Geusen ten opsichte van de onnosele Catholyken）」（p.125）として「ゴイセン史観」を批判しつつ，ここではゴイセン史家ですらカトリックの無辜の死を証言していることを強調する。

そして，第6章で1576年に起きたスペイン兵によるアントワープ略奪について述べる。内戦史上，最大の虐殺が起きたとされる事件である。ハザルトはメールベーク，ハラエウス，ストラダが事実を述べており，「極めて感情的で攻撃的なゴイセンの著述家の一人（een vande meest ghepassioneerde ende vinnigheste geusche schrijvers）」メテレンですら，言われているほどの残忍な所業を認めていないとする。そして，これらの出来事はカルヴァン派の著述によって，「スペインの恐怖（Spaensche furie）」と呼ばれるようになったが，ゴイセンの著述家の中でもボルやホーフトが書いているようなことをメテレンは述べていないし，メールベークの指摘を引いて，ゴイセンの歴史家たちが自分たちの行為をスペイン人に帰しているとする。

第6部「ドン・フアン・デ・アウストリアの統治」（pp.131-158）では，ドン・フア

ン着任前に成立した「ヘントの和平（Pacificatie van Ghendt）」が焦点となる。その第3条では「スペイン兵の撤退を条件としてネーデルラントを王の手に返し，しかるのちに宗教の問題を論ずる」ことになっていた。ハザルトは，反乱側がこの和約を守っていないことを再三批判する。

ブリュッセルににぎにぎしく入市したドン・フアンはオラニエの画策により，ナーメン（ナミュール）への逃亡を余儀なくされた（2 章）。オラニエの反対派がドン・フアンの代わりに招いた皇帝ルドルフの弟マシアスが到着するとネーデルラントはオラニエ派，ドン・フアン派，マシアス派に三分されるが，マシアスとオラニエが提携し，1577 年 12 月に両者はブリュッセルに入り，オラニエが実質上の支配者となった（4 章）。オラニエの政権に忠誠宣誓を迫られて拒否したアントワープのイエズス会士，フランシスコ会士は追放された（5 章）。修道士が去った後の教会はゴイセンの手に帰したが，こうした動きは各都市に広がった（6 章）。ドン・フアンがヘンブルーで議会軍を破ったが（7 章），「異端は切っても切っても再生する蛇のようであり」（p.150），異端の説教師たちはヘントの和平を無視ないし批判して公然と活動し，こうした動きはヘントから各地に広がってゆき（8 章），その横行について，ホーフトさえ否定的に評しているとする（9 章）。そして，ドン・フアンの死を兄王フェリペによる毒殺だとするホーフト，「彼の悪意が神の手で破砕された」とするボルを斥け，敬虔な信者として死んだとして（10 章），その生涯を略述する（11 章）。レパントのヒーローが貶められてはならないと考えたのであろう。

第 7 部「パルマ公の統治」（pp.158-219）。パルマ公の総督在任期間は 1578 年～ 92 年と長いが，それにしても分量が他を圧して長いのは，この時代の「秩序回復」にハザルトが大きな意味を認めただけではなく，後述するような「脱線」のためである。

パルマが総督に赴任した時点では，17 州のうち 3 州しか王に忠誠を誓っていなかったが（1 章），劣勢挽回に至る紆余曲折が述べられる。第 2 章では，異端の説教師ヨハネス・ダミウスがゴイセンの行為は反逆罪には当たらないとした論文を刊行したのに対して，ハザルトが逐条反論し，さらにダミウスの議論を『ネーデルラント史』159 頁に載せたメテレンに対しても同じことをやる（pp.163-170）。

この後，歴史記述の本線に戻り，しばらくはオラニエが招いたフランス王子アラン

ソン公を中心に叙述が展開される。彼は1582年2月にアントワープに到着して歓迎されたが（7章），その占領を策して失敗し（8章），ネーデルラントから退場する。彼を引き込んだオラニエに批判が集まり，とくにアントワープの人々が彼を裏切り者と呼んだので，オラニエはゼーラントに向かった（9章）。

そして，オラニエはこれまでの「報い」を受けて，1584年6月10日に暗殺された。暗殺者がイエズス会士に「殉教」を勧められてこの挙に及んだとするメテレンを，「この事件を精査した」ハラエウスによって否定する（10章）。

同年，パルマ公によるアントワープ包囲が始まり，交渉の場において市側は「修道士とくにイエズス会士を都市に入れない」ことを条件にしたが，パルマはこれを突っぱねた。翌年，アントワープは降伏し，パルマが突きつけた「信仰の自由は4年間保証されるが，その後はカトリックにならない者は去れ」という条件があった（11章）。これによりカルヴァン派市民のかなりの部分がアントワープを去り，それが都市に大きなダメージを与えたことはよく知られているが，ハザルトはこの条項の結果について何も言わない。

パルマの死について述べた後（12章），イエズス会士が常に彼の軍に随行していたことを述べたついでに会士のその他の従軍の事例に触れ，さらにホラントへの会士派遣から話は脱線して（「教会史の観点から」としているが，とってつけた感がありあり），船でブラジル等に派遣されて遭難により死んだ者やペストの地域に派遣されて死んだ者[190]を挙げる（13章）。

そして，第14章でネーデルラントのイエズス会の評価が行われる。最初に，マルティン・アスピルクエタがかつてロヨラについて「教会の安寧のために敵に対して巨大で恐るべき艦隊を作ったが，会はいつでも大きな嵐に見舞われねばならないだろう」と言ったことを引いて，これはネーデルラントにも当てはまるとする。1598年には暗殺されたオラニエ公の後を継いだマウリッツの暗殺未遂事件が起きたが，下手人が「イエズス会の管区長に買収されてやった」と虚言を吐き，それをゴイセンはネーデルラ

[190] さりげなく，ナポリで110人の会士が死んだとする（p.208）。いつのことか記されていないが，1656年からの大流行を指しているのだろう。この時，ナポリ王国全体で125万人以上が死んだという推測もある。Silvia Scasciamacchia et al.,"Plague Epidemic in the Kingdom of Naples, 1656–1658," *Emerging Infectious Diseases*, 18-1, 2012, pp.186-188.

ントのみならず，各国語に翻訳してヨーロッパに広め，これに対してイエズス会のフランシスクス・コステルスが反論を出版し，摂政アルベルトの前でその旨を弁論した[191]。ハザルトは, ボルの『ネーデルラント史』26 頁以下にイエズス会が暗殺の背後にいたと述べるのに対し，コステルスが有効な反論になっているとする。

さらに, ハザルトにしては珍しく, カトリック内部の対立についても述べる。ルーヴァン大学の教師の弟子がイエズス会への入会を希望したが，当地の院長アドリアヌス・アドリアーンセンスは大学とのいざこざを避けるために断った。しかし，学生はケルンに行って入会したので，教師はアドリアーンセンの使嗾によるものと訴え出た。院長は逮捕され，釈放されたものの，事はトレント公会議でも取り上げられた。さいわいに大学側でもルアルド・タッペルが味方してくれたおかげで院長は無罪となったが，今度は院長にサン・ペテロ教会での告解を受ける権限が与えられたことに不満を持った聖職者により，イエズス会を非難する無名のパンフレットが刊行された[192]。

ハザルトは前者については会士が有効な反論を行い，後者でも無実が晴らされたとするが，こうしたカトリック内部でのイエズス会をめぐる対立はいくらでもある。そうした記述を回避してきた彼がここでそれを持ち出したのは，やはり地元の問題だからであろう。しかし，次にカルメル会の貢献に 1 章を充てることで，本書の目的がイエズス会弁護にないことを示す。ここでは，ゴイセンに殺された 2 人の会士を含めて彼らが被った苦難が述べられるが，実は内乱時のイエズス会士の被害についての具体的な描写が本篇には見られないのである[193]。

---

[191] コステルスのパンフレットはオランダ語で書かれ , それはラテン語に翻訳されて広められた。Gerrit Vanden Bosch, “Jesuits in the Low Countries（1542–1773）: A Historiographical Essay,” Jesuit Historiography Online, last modified in 2016. https://referenceworks.brillonline.com/entries/jesuit-historiography-online/jesuits-in-the-low-countries-15421773-a-historiographical-essay-COM_192551 最終閲覧 2023.2.6.

[192] この事件について他に情報を見つけることができていない。注 11 所掲の『イエズス会歴史辞典』のアドリアーンセンスの項目（vol. 1, pp.16-17）では , 財産の合法的獲得にここに出てくるタッペルが協力したことが記されるだけである。この辞典は会の史料による「公式見解」としての価値を有するが , こうしたノイズが往々にして記述されないことがある。

[193] 第 8 部第 4 章のマウリッツ軍との戦闘で 3 人の会士が亡くなっているが , 叙述は簡単である。第 5 章で「ネーデルラントの都市ではないが , ここで 1600 年に起きたことを一部の歴史家たちはネーデルラントのこととして記しているのでそれに従う」として , イエズス会の苦難が記されるが , 地理的に近接しているとはいえ , やはり無理がある。

第８部「アルベルトとイサベルの統治」（pp.219-246）では，フェリペ２世の娘とその夫の共同統治期を扱う。戦争の傷跡も癒えて，南部ネーデルラントが再生を迎えた時代でもある。

アルベルトに統治を委ねたフェリペの死を扱う第３章では，王に対するメテレンの悪口に逐一反論し，最後に「感情を動かすことがあまりなく，レパントの勝利，イギリス派遣艦隊の敗北を聞いても顔色を変えなかった」として，メテレンが怒りっぽく，執念深いとするのは虚偽であり，「異端を殺すことは殺人ではなく，煽動家，冒涜者，反徒に対して行使される正義である（het ombrenghen der ketteren en is gheen Moorden gheweest, maer justitie ghedaen over muijtmaeckers, heyligh-schenders, ende rebellen」とする。また，メテレンはフェリペがイエズス会を支援していたとするが，メールベークによれば，イエズス会をさほど愛しておらず，他国にはある多くのコレジオがスペインには設けられなかったとする。たしかに，他国では16世紀後半にすでにイエズス会士が権力の中枢に接近しているのに対して，フェリペは海外布教に彼らの力を借りたものの（たとえばフロリダ），国内においてはむしろローマの本部と緊張関係にあり，聴罪司祭にイエズス会士が選ばれることもなかった[194]。

第６章で扱われるオーステンデの包囲戦から1609年のスペイン・オランダの休戦協定にいたるまで軍事活動の主役はアンブロジオ・スピノラだが，その話をすると長くなるとして一気に時代を飛ばし，第７章で休戦協定後に発生した異端間の不一致，すなわちゴマルスとアルミニウスの論戦を取り上げ，その政治的帰結であるオルデンバルネフェルトとグロティウスの逮捕を次章で取り上げる。第９章ではオルデンバルネフェルトの処刑の場面が詳細に描かれるが，むろん彼への同情からではなく，その悲劇（droef spektakel）を窓辺で見ていたマウリッツ（メールベークに拠る）の非を鳴らすためであろう。そして，第10章で，アルミニウス派の弾圧について，「これこそが彼らが戦い，スペイン王を拒絶して獲得したとオランダのカルヴィニストが喧伝する良心の自由なのだ」というある著述家の言を引用する。第12章はさらに時間が飛んで，1635年にオランダ軍がフランス軍と合流してティエネンで行った「神をなみする所業」

---

[194] スペイン王権とイエズス会の関係については，Julián J.Lozano Navarro, *La Compañía de Jesús y el poder en la España de los Austrias*, Cátedra, 2005を参照。

により起きた惨劇を叙述し，最後に「かかる怪物を光で照らしたことを日月は恥じたことだろう」と言って本篇は終わる。カトリックの再生よりもすぐそこにある怪物の存在を強調するのだが，本巻が出る直前には，フランスのルイ 14 世が南ネーデルラントに兵を出していた。

・イングランド史（pp.249-453）

対岸のカトリックの命運は，ネーデルラントの同胞にとって無縁なものではなかった。「歴史への導入」の文章では，セネカの「この世界は劇場である」という言を引き，彼の弟子ネロらによって繰り広げられたキリスト教徒に対する惨劇と社会秩序の混乱にイングランドの近代史が重ね合わされる。最後に出てくる「残忍なイゼベル」エリザベスとヘンリー 8 世がこの舞台の主役である。

「前言」でイングランドのキリスト教改宗が取り上げられ，**第 1 部は「ヘンリー 8 世下での分裂の開始」**（pp.252-265）である。最初に「ローマの皇帝マクシミリアン，スペインのフェルナンドとその妻イサベラ，フランスのルイ 12 世，そしてイングランドのヘンリー 7 世が統治していた時代，キリスト教会は栄え，平和であった」として，さらに「マホメットの迷信」はイスマイル・ソフィー（サファヴィー朝）の登場により分裂し，サラセン人はスペインから追放され，ポルトガル人の南方，スペイン人の西方への進出が教皇によって保証されたとする。こうした諸王の平和を攪乱したのがヘンリー 8 世の離婚問題であった。その相手アン・ブーリン（2 章），離婚を後押しした司教クランマー（4 章），トマス・クロムウェル（5 章）といった面々が紹介される。第 7 章ではエリザベスの誕生が扱われ，ヘンリーの実子ではないという説をもち出す。離婚を強いられて宮廷を去った「正しき」キャサリンとヘンリーの善悪の単純な構図が描かれる。この構図はメアリとエリザベス，メアリ・スチュアートとエリザベスの間でも繰り返される。

第 2 部「イングランドの分裂の進行」（pp.265-290）では，首長令以後の展開がたどられる。犠牲者が次々と取り上げられ，第 3 章ではトマス・モアとロチェスター司教ジョン・フィッシャー，第 4 章でキャサリン，第 5 章では王に棄てられたアン・ブーリン，第 6 章では王が「子供（エドワード）の命を優先して死なせた」ジェーン・シーモア，第 7 章では教皇が離婚阻止のために派遣した枢機卿レジナルド・ポールの家族といっ

たようにヘンリーの傍らで死屍が積みあがってゆく。そして，王の残忍は聖人にも向けられたとして，聖人の墓を暴き，その信仰を禁じたことを記し，そのふるまいは，「ネロより残忍，サルダナパロスより淫乱，マホメットより神をなみしており，最悪の無神論者である」とする（p.281）。ヘンリーはついに教皇に破門され（9章），その後も次々と妻を替えてゆくが，今度はクロムウェルが犠牲になる（10・11章）。しかし，神が悪業を見逃すはずもなく，離婚を勧めた人々もこの時点でクランマー（ハザルトは「メアリの時代にとっておかれた」とする）を除けばすべて死に（12章），そしてヘンリー自身も1546年1月27日[195]に「25年に及ぶ喜劇，臣下にとっては残忍な悲劇」（p.287）の幕を下ろした。

第3部「イングランドが若い王エドワードのもとで異端と化す」（pp.290-299）。ハザルトはヘンリーの悪口をさんざん書いてきたが，この表題を裏返せば，首長令下のイングランドはまだ異端でなかったということになる。ヘンリーは秘跡についてルターに対する反論を執筆し（ハザルトは司教ジョン・フィッシャーの勧めによるとする説を紹介する[196]，p.272），ヨーロッパでの孤立を回避するためとはいえ，1541年にはドイツの国会に使者を送り，ルター派を支持しない旨を表明させてもいる（p.286）。ハザルトは修道院没収にも触れているが，その深甚な社会的影響を認識している様子はない。

即位時には9歳だったエドワードの摂政となったおじのエドワード・シーモアはツヴィングリの影響を受けていた。彼のもとでカトリックの説教は禁じられ，王子の教育係も異端で固められ，大陸からマルティン・ブッツァーやピエトロ・マルティーレが招かれ，ケンブリッジ・オックスフォードの両大学に配された（1章）。聖体を「二つの形で（パンとワイン）」拝領するなど，新しい宗教（nieuw Religie）が導入され（2章），大学ではカトリックと異端の間で種々の論争が行われ，カトリックは勝利したものの，聖職者たちは亡命の道を選んだ（5章）。しかし，エドワードは1553年7月6日，

---

[195] 実際には，1547年1月28日である。

[196] イングランド篇では，本文で出典が示されることはほとんどない。ここでもMen seght～とするだけである。フィッシャーを最高の司教と評したとして，カトリックの司祭ニコラス・サンダースの名を挙げるのは例外的である。引用するのは大陸で1585年に初版が出た *De origine ac progressu schismatis Anglicani* であり、断りがなくても他にも参照されている可能性はあるが、書目リストには挙がっていない。

父がトマス・モアの首をはねたのと同日に死に，親の因果が子に報いたとする（6 章）。

第 4 部「イングランドが女王メアリのもとでカトリックに戻る」（pp.299-308）。弟の治世の間もカトリックを護持しつづけたメアリ（前部第 3 章）が即位するが，スペイン王フェリペ 2 世との結婚話への反発が生じ，その中でメアリ以前に短期間王位にあったジェーン・グレイが再び擁立された。彼女は捕えられ，メアリは何とか改宗させようとしたが，これを拒んだ。その死について，ハザルトは反宗教のためではなく，反逆者として（als plichtigh van crimen lasa Majestatis）死んだと評し，彼女が宣教師と論争したと述べるカルヴァン派の「近時の殉教録（hun leste Martelaers boeck）」[197] がクランマーまでを殉教者として火刑に処されたとしていることに対し，フロリモンを引いて，「クランマーはイングランド最悪の棄教者であり，カルヴィニストとは全く異なる背教者として死んだ」「彼らの殉教者には神の否定者やカルヴィニスト過激派が数えられている」としている（3 章）。攻撃の矛先はジェーンにではなく，カルヴァン派の殉教観に向けられているのである。

フェリペとポールの到来により，イングランドにカトリックが戻ってきたかに見えたが，フェリペは去り，メアリとポールはともに 1558 年 10 月 17 日に亡くなった（4・5 章）。

第 5 部「イングランドが女王エリザベスのもとで再び異端となる」（pp.308-334）の第 1 ～ 6 章では,「従来のあらゆる異端とは別の異端」（p.311）[198] であるエリザベスの治世の宗教的混乱を描き, ピューリタンの登場, その一派の「自称キリスト」ウィリアム・ハケットが 1591 年に「教皇とペストが貴様らを滅ぼす」と毒づきながら処刑されたこと（p.315）などを述べ，第 7 章ではエリザベスのカトリック迫害を「ドミティアヌス，ディオクレティアヌス，ネロ並み」とし，さらに「トルコ人，タルタル人，日本人以上」とするフロリモンの言を引く（p.316）。

---

[197] ジェーンを殉教者とするものには , ジョン・フォックスの『殉教者列伝』（1563）があるが , ここでハザルトが「近時の」としている作品が何なのかはわからない。Edith Snook, “Jane Grey, 'Manful' Combat, and the Female Reader in Early Modern England,” *Renaissance and Reformation*, 32-1, 2009, pp. 47-81.

[198] ルター派でも , カルヴァン派でも , メノナイトでも , フス派でも , ツヴィングリ派でも , カトリックでもないとする。

第８章からはイエズス会士の相次ぐイングランド潜入[199]を扱う。エドムンド・キャンピオンが逮捕されて反逆罪に問われた時，女王にも忠誠を誓っていると反論したが（9章），この「国王への忠誠」と「ローマ教会への忠誠」の相克が，この後にも再三出てくる。以下犠牲者の列伝が続くが，修道士だけでなく，牢獄から司祭を救出しようとして死刑になった女性ら信者も取り上げられている（11章）。

第６部「イングランドの残忍さの激化」（pp.334-367）では，冒頭でメアリ・スチュワートの幽囚と死は「世界最大の悲劇の一つ」であるとして，「残忍」の犠牲となった彼女をめぐるスコットランドの権力争い（1～3章），「背教者」ジョン・ノックスの使嗾によるカトリックへの迫害（4章）を述べた後，メアリのイングランド行に始まる陰謀劇をたどり，第12章の死刑宣告から第16章の処刑の描写に至るまで約9頁分が費やされ，本書の中でも異例の扱いである。ハザルトの言を借りれば，「彼女の死の原因についてイングランド人が嘘八百をならべている」（p.365）のに対する抗議なのであろう。「彼女は正当なイングランド王の後継者」[200]であり，逆境にあってもその美貌を失うことはなく，それが精神の美しさとあいまって世界の人々を驚嘆させたと絶賛し，墓碑銘まで引用するのもこれまた異例である。イエズス会の神父が墓所を訪れた時に聖堂付き司祭に処刑に使われた斧について尋ねると，「エリザベスの斧」だとの答えが返ってきて，神父が「なぜ無信仰者の（godloos）斧と呼ぶのか」と問うと，別の者が「エリザベスがどうであれ，メアリは聖人」だと答えたというエピソードを紹介し，「異端の口から出たこの言葉ほど，この勇敢で有徳な女性を称える言葉はないだろう」としている（p.367）のを見れば，メアリを持ち上げることでアンチ・ヒロインを際立たせようとしたのだろう[201]。

---

[199] ハザルトは時期を記さないが，1580年以降である。

[200]「なぜなら，エドワードとエリザベスは庶子だから」とカッコ書きする。

[201] リストには，メアリ関連の書物として，メアリ処刑の1587年にケルンで刊行された *Mariae Stuartae Supplicium*, 1644年に刊行されたアダム・ブラックウッドの *Martyre de Maria Stuart*, チャールズの処刑までのスチュワート家の不幸を描いた1650年ドルトレヒト刊行のヤコブ・ファン・オーツの *Stuart ongeluckighe Heerschappye* があがっている。ブラックウッドの『メアリ・スチュワートの殉教』の原著は1587年に出ている。メアリの生前，死後におけるヨーロッパでの毀誉褒貶については，Maria Bogucka, “Mary Stuart in Legend,“ *Acta Poloniae Historica*, 62, 1990, pp.45-89 を参照。

第 7 部「エリザベスの前代未聞の残忍」（pp.367-379）では，第 1 章でフェリペがイングランドに派遣した艦隊の「不幸な」結末を述べる。この艦隊には 669 人の聖職者が随行していた（p.369）。難を逃れたとはいえ，エリザベスは復讐の焔を燃やし，カトリックにますます残忍な仕打ちを加えてゆく。第 3・4 章では，イエズス会のロバート・サウスウェル（1595.3.3），ヘンリー・ウォルポール（同 4.17），第 5 章では同会の 3 人[202] と彼らをかくまった女性（1599.2.27），寵臣エセックスの死についでエリザベス自身の死が取り上げられるが，メアリとは対照的にそっけない扱いである。ハザルトは死因を，①臣下の心がスコットランド王にあるのではないかという不安②エセックス伯処刑により人望を失ったという不安③カトリック復活への不安とする。メアリ同様才女であることは認め，後を継いだジェームズが作った墓碑銘と無名氏の *Herologia Anglica*[203] の「もう一人のパラス」という賞賛を引いて一応バランスを取るかに見せかけて，最後に「親愛なる読者よ，悪を徳に，涜神を敬虔に，血に飢えた者をおとなしい者に書き換えてしまう毒舌と阿諛の筆をあやつる異端の追従家の正体を見ていただきたい」と結ぶ。

ジェームズが新王としてイングランドにやってきても事態は好転しなかった。**第 8 部「ジェームズ 6 世王の統治」**（pp.380-408）では，カルヴァン派を敵視する一方でカトリックを弾圧するジェームズに対する「火薬陰謀事件」が主に扱われる。問題はイエズス会士がどこまで関与していたかだが，当時の上長であったヘンリー・ガーネットに陰謀が伝わっていたことはハザルトも認めている（3 章）。そのガーネットに反逆罪が宣告されたが，彼は取り調べにおいて，「告解には守秘義務がある」と黙秘を続ける（5 章）。しかし，刑場では多くの見物人の前で無実を主張し，死後に出た中傷の詩文に対してエウダイモン・ヨアニスとロベルト・ベラルミーノの両会士が反論を書いた[204]。カルヴィニストのヤコブ・ファン・オールツが「ガーネットは王に対して非を働

[202] ただし , ジョン・ジェラルドは 1637 年まで生き残り , ロジャー・フィルコックは女性と 1601 年に , フランシス・ペイジは 1602 年にそれぞれ処刑されており , この日付に死んだ者は誰もいない。

[203] オランダのアルンヘイムで 1620 年に刊行されている。

[204] 前者は *Ad actionem proditoriam Edouardi Coqui, apologia pro R.P. Henrico Garneto* で , ケルンで 1610 年に刊行され , 後者はジェームズ 1 世への応答の形で 1609 年に出された。

いたことを認めた」とするのは虚偽であるとし（6章），彼の顔が藁の穂にしき写され，それがスペイン大使に渡されたこと，ヘンリー・モーアの『イングランドのイエズス会史』（ラテン語）によれば，1660年時点でもルイクのイングランド・カレッジに保存されていたと述べ，キリストの聖顔布に似た奇跡が起きたとする（7章）。第8・9章ではイエズス会士の，第10章ではアイルランドでのフランシスコ会，在俗司祭の殺害が扱われ，第11章以下はスコットランドのイエズス会士ジョン・オギルビーの死について述べられる。彼は審問の場で火薬陰謀事件への関与を問われ，それを否定してあらゆる殺人を憎むと言うと，「イエズス会士は逆のことを教えている」と言われたので，コンスタンツ宗教会議の記録を読むように勧め，「あなたたちのような異端こそそうしたことを教えているのだ」と言い，王殺しを容認したウィクリフを引き合いに出している（p.398）。彼の逮捕･訊問から死にいたる状況に6章分も費やされているのは，彼がネーデルラントで入会したからであろう。

ジェームズはスペインとの関係改善のために，カトリックに宥和的な態度を取るようになり，王子チャールズはスペイン王女への求婚に自ら出向いた（17章）。この結婚にカトリック世界では大きな期待を寄せていたが[205]，破談に終わった。

第9部「チャールズ1世の統治」（pp.408-443）では，ハザルトのいう「未曽有の惨劇」，すなわちイングランドの内戦に至る経緯，内戦の結果の国王殺し，オリヴァー・クロムウェルの支配という主題に付随して，カトリックの受難が扱われる。カトリックの立場からは当然，チャールズ1世の処刑後の政権は認められないので，その時期のことも本部で扱われる。ここでは，カトリックに焦点を合わせてまとめてみる。

スペイン王女にかわって嫁いできたフランス王女の影響でカトリックへの警戒が高まり（2章），王と議会が対立し，議会が王から「カトリックを敵とする」という言質を取る（3章）。第5章では，議会軍の手におちて殺された在俗司祭，フランシスコ会士，イエズス会士が扱われる。イエズス会士トマス・ホランドが刑場に集まった1000人の前で，自分の無実を堂々と述べるのを異端の牧師がさえぎり，「いい加減神に祈ったら

[205] 当時，東方旅行中だったローマ出身のピエトロ・デッラ・ヴァッレも，この結婚の成立を期待していた。彼は友人からの書簡により，この情報を入手していた。Edward Grey ed., *The Travels of Pietro della Valle in India, vol.1*, Hakluyt Society,1892, p.171.

どうだ」と言い，英語で祈りを唱えると，ホランドは火の出るような祈りをラテン語で唱え，ついでそれを英語に翻訳し，彼の血がしみ込んだ遺物を信者が回収し，異端にまで彼は尊敬されたという話を紹介する（p.417）。

第 6 章の主題は在俗司祭 5 人とベネディクト会士の絞首であり，第 7 章ではカトリック信者の王への加勢に触れられ，第 9 章で「善良で無実の（goeden ende onnoselen）」王の処刑が描かれる。次章では，「トルコや異教徒ならこうした臣下による王殺しはあるが，キリスト教徒で正統である王を臣下が処刑するということの異常さ」を指摘し，こうした連中がカトリックの王殺しを云々するのは片腹痛いことで，彼らこそブラジルの人食い人種，血に飢えた日本人より残忍であるとする（pp.423-424）。これまで見てきたように，イエズス会はアンリ 4 世，ジェームズ 1 世などの暗殺（あるいは未遂）事件への関与が取りざたされ，また彼らが王殺しを正当化しているとの批判が投げかけられてきた[206]。

第 12 章ではアイルランドのカトリックの王子チャールズ支持に触れ，第 13 章では在俗司祭とイエズス会士 2 人の絞首，第 16 章以下はクロムウェルの権力掌握とその死とその子リチャードの失脚が述べられる。第 18 章でクエーカーに言及されるが，ハザルトの評価が述べられているわけではない。この間亡命生活を続けていたチャールズがイングランドに復帰するが，それは「神がイングランドの王殺しの暴君を蹂躙した結果であり，「全世界の希望」でもあったという（pp.442-443）。

第 10 部「チャールズ 2 世の統治」（pp.443-453）では，チャールズの帰還前後のことが扱われる。クロムウェル政権の支持者がいなくなったわけではなく，彼を称える本が出版されたが，王の復帰を願う本の出版の前にかすみ，各地で王の復帰を祝う動きが見られたとし，ある木こりが斬首されたチャールズの絵に記された文言（「暴君の死は自由の年」）の代わりに「王は暴君にあらず，彼の死の年に自由が失われた」と記した紙を貼り，市民たちがこの絵自体を燃やしたエピソードを紹介する（p.444）。「オランダのある極端なカルヴィニストの著述家がクロムウェルを称えているのには驚かざるを得ない」とも述べる（p.445）。チャールズがネーデルラント（南北双方）に亡命していたことと合わせて，クロムウェルの時代はネーデルラントのカトリックにとっ

[206] Harald E. Braun, *Juan de Mariana and Early Modern Spanish Political Thought*, Ashgate, 2007.

て他人事ではなかった。「結論」では「これは過去の話ではない」とする。

第４章　大きな障壁―トルコ，モスクワ，ペルシア，モロッコ，タルタリア

第４巻の取り合わせに共通した表題をつけるのはむずかしい。トルコ・ペルシア・モロッコといったイスラーム圏を扱う中に，モスクワ，タルタリア（モンゴル，満洲を指す）が挟み込まれる格好であり，最後には「付録」がついて，これまで取り上げられなかった東南アジアの最新情報が扱われる。「大きな障壁」としてみたのは，モロッコの「王」の改宗を除けば，ムスリムに対する布教は目覚ましい成果を上げていないこと[207]，モスクワに対してはローマ教皇やイエズス会士ポッセヴィーノらによる「教会統一」への営為やカトリック軍の侵攻があったが一時の出来事に終わったこと，そして大きな期待がかけられていたシナ＝タルタリアの皇帝（順治帝）の改宗も達成されず，舞台が暗転したからである。

トルコ人の歴史（pp.1-264）

本巻では半分をはるかに超える分量が費やされているが，トルコ人の「脅威」ゆえのことではない。オスマンを扱った部分は実は少ない。

第１部が「マホメットの登場と生涯」（pp.1-9）で始まるのは，ハザルトが「トルコ人＝マホメット派」と考えているからである。ムハンマドの生年や出自についての諸説を列挙するなど，複数の文献に目配りしていることを示すが，同時代のライデン大学で本格的にアラビア語・トルコ語を研究していた学者たちの成果をどこまで吸収していたかは疑問である（17 世紀前半に活躍したアラビア語研究のパイオニアであるトマス・エルペニウスや，本巻が出る数年前にライデンの講席を得たものの着任前に死亡したヨハン・ハインリヒ・ホッティンガーに言及はしているが）。彼が主な典拠とするのは，それ以前に出たチェリオ・アウグスティーノ・クリオーネの「サラセン史」（フランクフルト，1596 刊）であった[208]。マホメットはユダヤ・キリスト教からアイデアを

[207] もっとも，ムスリムへのカトリックの働きかけは，16 ～ 17 世紀にかけて熱心に続けられた。イエズス会による試みについては，Emmanuel Colombo の一連の研究がそれを明らかにしている。

[208] 実際にはイタリアの人文学者ピエトロ・ベンボの著書を編集したもので，初刊は 1567 年に出て

かすめ取り，「嘲笑すべき，ねじ曲がった」教説をデッチあげたとする（6 章）。これは当時のヨーロッパにおけるクリシェの反復にすぎない。

第 2 部「現代のトルコ人の宗教」（pp.9-24）では，16 世紀半ばにドイツ皇帝の使節としてイスタンブルに派遣されたオジェ・ギスラン・ド・ビュスベク，17 世紀半ばに聖地巡礼に向かったフランシスコ会士ベルナルド･スーリウス，ニコラス･クレナルドゥス（いずれもネーデルラント人）などによって，教義よりもその風習（2 章），巡礼（3 章），聖職者（4 章），教会＝メスキータ（5 章），死・煉獄（6 章），割礼（7 章）に紙幅を割く。使っている資料のうち，スーリウスのように 17 世紀のものもあるが，多くは 16 世紀のものである。

そうしたなかで彼が多用するのが，やはりネーデルラントのヴィンセント・デ・ストコーブのフランス語の旅行記（ブリュッセル，1643 刊）とスーリウスの聖地巡礼記（蘭語版，ブリュッセル，1665 刊[209]）で，両者から宗教関係の記事を抜き書きする（8･9 章）。そして，第 10 章「トルコ人はキリスト教徒の大敵」では，諸家を引いて子供の強制改宗と奴隷の悲惨さを強調するが，デウシルメによって徴集されたキリスト教徒の子弟の中に社会的上昇を遂げる者がいることには触れない。

第 3 部「トルコの皇帝とその統治」（pp.24-36）では，コンスタンティノープル（1 章），ヨーロッパ人が居住するガラタ（2 章）を取り上げた後，皇帝の話になる。第 5 章では，その力についての評価は様々だが，ストコーヴェの「領土の大きさの割には力が小さいので，内部にいるキリスト教徒に外部からの支援があればその支配のくびきから逃れようとするだろう」という見解に与し，アラブ人の誇り高さ，解放を望む東方諸教会の信者たち（とりわけ，ローマ教会に従属しているマロン派の軍事力が期待できるとする）について指摘し，「トルコの軍事力は弱いのだが，問題はキリスト教側の分裂である」（p.31）とする。

第 4 部「キリスト教徒の皇帝の治下でのトルコとその周辺地域での信仰の繁栄」（pp.36-47）は，コンスタンティヌス大帝期にさかのぼる。「前・今世紀を扱う」とうたう本書のフレームを大きく逸脱しているように見えるが，ハザルトの理屈では「トル

いる。

[209] 初版は 1650 年に出ている。

コ人について新旧の状況を扱ったので，今度はキリスト教の旧況を扱う」ということになる（p.36）。キリスト教会の現状の悲惨と過去の栄光を対比しようとする仕掛けである。

第1章では，コンスタンティヌス自身よりも，母后ヘレナが聖地で見つけた聖十字架の話が中心にとりあげられる。第2章では，「背教者」ユリアヌスの治世におけるカトリックの迫害が述べられ，以下諸帝のもとでのカトリックの状況が略述され，その中では4世紀末の教父ヨハネス・クリソストモスがクローズアップされている（3章）。ヘラクリウス帝がペルシャのホスローに奪われた聖十字架を奪還したことを述べる第6章で閉じられる。

第5部「トルコのキリスト教徒の現況」（pp.48-64）。ヘラクリウスの時代はイスラームの勃興期にもあたっていた。ハザルトもこの時期に転機を認めていたのだろう。十字軍によって聖地は奪還されるが再び失われ，そうした状況下で信者はいかなる状況に置かれているかが述べられる。しかし，ここでいう信者はカトリックではなく，東方諸教会の信者である。ギリシア（1章），アビシニア（2章），コプト（3章），アルメニア（4章），シリアないしネストリウス（5章），ジョージア（6章），マロン派（7章）と並ぶ。エルサレム主教と諸教会の対立，聖墳墓教会への諸教会の信者参集について述べられた後，各教会の特徴が略述されるが，そこには当然カトリックからの価値評価・距離測定が入ってくる。たとえば，コプトについては「東方の信者の中でも最も無知で粗野（de onwetenste ende de plompste）」（p.54），アルメニアについては「東方の全信者の中でアルメニア人程恥ずべきセクトはない[210]」（p.55）といったように貶価が並ぶ中で，ローマと合同したマロン派の信仰堅固は称賛される。とくに，ドゥルーズの君主ファフル・アッディーンのトルコに対する再三の軍事的勝利[211]，彼が殺された（1635）後もマロン派の将軍が蜂起したことを特筆する。

第8章では，16世紀半ばに教皇の肝入りでコプト・マロン派のもとにイエズス会士が送られたことが述べられるが，前述したように教皇の東方教会への働きかけは布教

[210] 理由は，カルケドン会議で否定された12項をいまだに護持しているからとする。

[211] ドゥルーズとマロン派は別のグループだが，彼の下にはマロン派の臣民もいたので，同じくくりに入れているのだろう。

聖省設置以後に本格化する。そうした近時の動きがここでは取り上げられていない。

第 6 部「トルコにおけるローマ・カトリックの状況」（pp.65-83）では，聖フランチェスコのエジプトのスルタンへの謁見に始まる同会の布教，シオン山での修道院建設とオスマン政府による没収，フランシスコ会によって管理されていた聖墳墓教会の状況，会士の迫害，ギリシア人主教による聖地独占の策動，聖墳墓教会での巡礼通路の紹介[212]などが取り上げられる（1 ～ 5 章）。かつて，ロヨラが聖地を訪問した時，フランシスコ会に滞在を拒まれて引き上げたことがあるが，ここではフランシスコ会の独占について批判めいたことは書かれておらず，聖地を守護してきたその歴史に敬意が払われている。

第 6 章では跣足カルメル会，第 7 ～ 11 章ではイエズス会の各地での活動を紹介し，最後に総括として，「ルター派やカルヴァン派は当地に商人しか派遣しない。彼らは何もしないであざ笑うだけなのである。ポーランドの貴公子ミコワイ・クシシュトフ・ラジヴィウは，東方の信者たちは言語・儀式の違いはあっても多くの点でカトリックと一致する一方で，異端の者たちがここに布教しに来ないのは信者とは思えないと述べ，ポーランドにいたギリシア人が彼らのことをユダヤ人よりひどいと言っていることを紹介している」とする。ラジヴィウは 16 世紀末に聖地に巡礼し，その旅行記がラテン語で出版された。彼はもともとカルヴァン派だったが，カトリックに改宗していてイエズス会とも深いつながりを持っていたこと[213]にハザルトは触れない。

第 7 部「キリスト教諸侯の聖地への遠征」（pp.84-108）ではまたしても本書の時間枠を超えるが，ハザルトは「新旧の状況をつなぎ，600 年以上にわたって聖地の奪回に努めてきた営為」の歴史として記述する。典拠として再々登場するのは，エルサレム王国の記述を含むギヨーム・ド・ティールの年代記である。

第 4 部の最後に述べられた聖十字架奪還から話を始め，まず十字軍の発端として，

---

[212] 藤井陽子「聖墳墓教会の巡礼―17 世紀の聖地巡礼記から」『筑波大学フランス文語フランス文学論集』30, 2015, pp.120-143.

[213] Clarinda Calma, “Mikołaj Krzysztof Radziwiłł（1549–1616）: Prince, Patron and Printer,” Teresa Beda et al.eds., *Publishing Subversive Texts in Elizabethan England and the Polish-Lithuanian Commonwealth*, Brill, 2016, pp.72-90. ハザルトが使っているのは , アントワープ , 1615 年刊本である。

オーヴェルニュ生まれの「隠者」ピエールの活動から説き起こす。彼はフランス人だが，その子孫がネーデルラントにいることが言及される。ついで，アントワープの聖人ノルベルトゥスが298年に殉教した軍人の聖ゲレオンの墓を開くと，そこに紫衣を着た聖人の白い下着に十字架が縁取りされているのを発見したのがきっかけで，軍隊に加わる者は十字架を服にあしらうようになったとする。こうして，ネーデルラントと十字軍のかかわりについて触れた後，いよいよ十字軍の行動の描写に移るが，彼らが聖地に達するまでに通過したハンガリーやコンスタンティノープルで現地の人々としばしば衝突していたことも丹念に言及されている。

第6章のアンティオキア包囲戦では，「アントワープのゴイセンがやったように，トルコ人は教会を破壊した。トルコ人とゴイセンは似た者同士である。」(p.101)，第8章のエルサレム攻防でも「防禦側は城壁に十字架を立て，トルコ人がこれを侮辱したのは，ハールレムのゴイセンのふるまいに似る。」(p.106) と述べて，十字軍の敵とゴイセンを重ね合わせている。

第8部「エルサレムのキリスト教徒の王」(pp.108-121) では，ゴドフロワ・ド・ブイヨン以下の諸王のもとでの状況について述べられる。王国成立時には，聖墳墓教会から聖十字架が発見され (1章)，バビロニアのスルタンとの戦いではその十字架が威力を発揮した (2章)。王国が危機に陥ると，皇帝コンラートらが聖地に向かった (4章，いわゆる第二回十字軍)。

第9部「キリスト教諸侯の新たな遠征」(pp.121-139) では，聖地が陥落し (1章)，その奪回のためにフランスとイングランドの両王，ドイツ皇帝が遠征するも失敗 (2章，第三回十字軍)，その次の「新たな遠征」(3章) は第5回十字軍であって，コンスタンティノープルを奪った第4回十字軍はここでは述べられない (後で出てきはする)。また，皇帝フリードリヒが出兵拒否し，スルタンと結んだことについて，ドイツの著述家は否定しているが，複数の著作が肯定しているとする。第4・5章では聖王ルイの遠征 (第7回十字軍) を扱い，彼がカルメル山に上り，同修道会の僧院をフランス中に作ることを約束したところから，カルメル会の歴史についてネーデルラント出身の同会士でハザルトと同時期に活動していたダニエル・ア・ウィルギネ・マリアの史

書[214]にもとづいて記す。第 7 章でルイのアフリカ遠征，アッコン陥落について述べられる。

ここで再び時計を巻き戻して，コンスタンティヌス大帝以下の東方の皇帝たちの列伝が**第 10 ～ 13 部**にわたって続く（pp.139-203）。すでにコンスタンティノープルからヘラクリウスの時代までの数人の皇帝を取り上げているのに，ここでまた重複をいとわず，さらに多くの皇帝を取り上げるのはなぜか。材料的にはビザンツには多くの年代記があり（ハザルトもそのうちの相当数を使っている），書くネタには困らない。しかし，この教会史においてこれだけの分量を使って書く必然性があるのかどうか。ハザルト自身は，東の諸帝をとりあげるのは，皇帝がカトリック→異端→マホメット派と変化するなかで，カトリックが迫害されていった過程を描き出すためだとする。実際，この列伝は政治史を中心としながらも，皇帝がカトリックか異端かの評定にむしろ重点がある。公会議に触れられることもあるが，そこでの論点が取り上げられることはあまりない。第 10 部はアナスタシウス（在位 491-518）まで，第 11 部はニケフォロス（在位 ca.760-811）まで，第 12 部はアレクシス・ドゥーカス（在位 1204）まで，そして第 13 部が 1453 年のコンスタンティノープル陥落までということになる。

レオ・イサウリクス（3 世）の治世下の 723 年におそるべき嵐すなわち聖像破壊がウマイヤ朝で吹き荒れたことを記し，そのきっかけは，ユダヤ人の将官 Serantpechijs がサラセンの大公 Gizidus（カリフのヤジード 2 世）に領内の聖像を破壊すれば 40 年治世が続くと予言し，ヤジードがこれに応じたことにあるとして，カルヴァン派の先蹤をユダヤ人，サラセン人に求める（p.161）。ビザンツの史書の記述に基づいた話だが[215]，ハザルトにとってはユダヤ人がこれに関与していたことが重みをもっていたであろう。本書でユダヤがまとまった形で描かれることは後出するサバタイ・ツェヴィの記述以外にないが，これまでにも触れたように聖体への侮辱などの形で「敵役」とし

[214] リストには 1662 年アントワープ刊行の *Vinea Carmeli* が挙がっているが，本文では *Speculum Carmelitanum* を引く。同書は 1680 年にやはりアントワープで刊行されたものであるが，ハザルトは原稿を見ていたということになろう。

[215] ビザンツの史書では当初は Tessarakontapechys となっていたが，ハザルトの Serantapechos に近い表記の史書もある由である。Joshua Starr, “An Iconodulic Legend and Its Historical Basis,” *Speculum*, 8-4, 1933, p. 501.

てあちこちに登場している。彼はこの話を直後のレオの聖像破壊と結び付けてはおらず，それに対する反発にもあっさり触れるだけである。関心がカルヴァン派をユダヤ・サラセンに結びつけることにあるからだろう。ただ，この後の記述は歴代の皇帝が聖像破壊を行ったか，復活させたかが中心になる。

第12部末尾のアレクシス・ドゥーカスの時に十字軍に首都を占領されたことについては，「ヴェネチア・フランス軍が占領した」と淡々と記し，この時ヴェネチア人が持ち帰ったマリアの絵が今なおサン・マルコ教会にあると指摘する程度に過ぎない。

第13部では，第1章で「カトリックが今やコンスタンティノープルを勢力下においた」（p.190）としていわゆるラテン帝国を，第2章でコンスタンティノープルを奪回したパレオロゴス朝の諸帝を扱うが，130年の歴史を駆け足で通り抜ける。第3章ではギリシア皇帝マヌエル2世（1391年即位）とトルコ王バヤジット（1389年即位）が対置されるが，大半はバヤジットの記事で，タメルラン（ティムール）の捕囚となって受けた辱めが記される。第4章は「ヨハネス7世（ママ）とトルコの諸帝」で，皇帝自らフィレンツェの公会議に向かい，ローマ教会との合同が議論されたことなど，今度はビザンツ側の記事がほとんどである。第5章ではコンスタンティノープル陥落についてかなり詳細に叙述されるが，ここでも，トルコ兵士がおどけて司教の服を身に着けたり，神の子羊を刺繍した絨毯を馬の鞍に使ったりした行為に「カルヴィニストの先蹤」を見ている。

第14部「トルコの皇帝」（pp.204-264）からようやく近代史に入る。まず，トルコ人の脅威に対してドイツ皇帝や教皇が十字軍の派遣を諸侯に呼びかけたことが述べられ，ペルシア人（サファヴィー朝）との提携にも言及される（1・2章）。しかし，それらはすべて計画倒れに終わり，トルコの拡張はさらに進み，ロードス島を攻囲（1480）するに至るが，翌年メフメト2世は亡くなる。ハザルトはフランスの著述家ブレーズ・ド・ヴィジュネール[216]を引き，メフメトの母がキリスト教徒であること，聖遺物を持っていたことからキリスト教に心を寄せていたという説もあるが，それは見せかけにす

[216] リストには，*Illustrations sur l'histoire de Chalcondile*, Paris, 1630として挙がっているが，ギリシア史家カルコンデュレスの『トルコ史』の翻訳に続編が付されたもの。H.Bardon, “Sur les « Images ou tableaux de platte peinture » de Blaise de Vigenère,” *Revue belge de Philologie et d'Histoire*, 55-1, 1977, pp. 111-112.

ぎず，何の信仰も持っていないと考えるのが大勢であるとする。しかし，彼が天文学に関心を有し，アラビア・ペルシア・ギリシア・ラテン，そしてカルデア語までよくした文化人であったことは，ヨーロッパ人も認めざるを得なかった（3 章）。つづくセリムについても，残忍で血なまぐさいとする一方で，新旧の史書を読み，文化を愛好し，ペルシアのイスマイールに勝利した場面を自ら絵に描き，それがヴェネチアに送られて今なお国事会議の広間に飾られているとする（4 章）。スレイマンについてもその公正さを認める。彼の征服拡大に対して教皇クレメンス 7 世は自ら出陣しようとまでしたが，それを阻んだのがルターだとする。彼は説教壇で諸侯に向かって「トルコ人に対して武器を取るのは無駄である。なぜならトルコ人は神が人々を罰するために差し遣わしたのだから」と説いた（5 章）。第 6 章ではスレイマンの晩年に愛妃ロクサーナが政治に介入したことを述べる。

セリム 2 世が 1567 年に即位した時，空に三つの太陽が現れ，ローマでは彗星が目撃され，ブリュッセル上空では軍旗の下にいる兵たちが戦闘を始め，最後に巨人が登場して両者を蹴散らした後にアントワープで恐ろしい嵐がおこったことを記すが，その意味が解説されることはない。第 12 章ではレパントの勝利を扱い，第 13 章以下はスルタン位をめぐる兄弟殺しが繰り返し出てくる。アフメトの治世には，フランスのアンリ 4 世の後押しにより，イエズス会がコンスタンティノープルに進出して好調なスタートを切ったが，スペイン王のスパイと疑われ，フランス大使の奔走で事なきを得た。1612 年にはオランダの大使コルネリウス・ハーハが到来してプレゼント攻勢によって，トルコ海賊にとらえられていたオランダ人奴隷を釈放する協約を締結し，さらにスペインから追われたモール人（モリスコ）の到来が布教に影を落とした。モリスコは復讐のためフランシスコ会の教会に侵入したが[217]，フランス大使が大宰相に働きかけて事態を鎮静化させた。1616 年にもイエズス会士は逮捕され，またしてもフランス大使の尽力により釈放された（14 章）。そして，1628 年にはイングランド・オランダ両大使（名前は出てこないが，インド篇に既出のトマス・ローと前掲のハーハ）とヴェネチア出

[217] ハザルトは，モリスコの「暴発」のように描くが，実際には彼らが政府に働きかけてガラタにいるヨーロッパ人キリスト教徒への締め付けがこの時期に強化されていた。Tijana Krstic, “The Elusive Intermediaries: Moriscos in Ottoman and Western European Diplomatic Sources from Constantinople, 1560s-1630s,” *Journal of Early Modern History*, 19-2/3, 2015, pp.129-151.

身のギリシア僧が手を組んで印刷所を開設し，カルヴァン派の文献を印刷しようとしたのを，またしてもフランス大使が止めたという。このギリシア僧が誰なのかはわからないが，彼を気に入っていたとされるコンスタンティノープル司教キリルがカルヴァン派に接近してこうした活動を行ったことは知られているし[218]，この妨害にはイエズス会士も加わっていた。トルコ諸帝を中心にした記述の下限は1656年で，ヴェネチアの勝利の記述で締めくくられる。

この後，最近のニュースとして，第19･20章ではユダヤ人の「偽メシア」サバタイ・ツェヴィの活動を詳細に追う。教会史と直接関係のない話題に20頁も費やすのは理解に苦しむが，ハザルトにとっては「全世界に流布した」ニュース（p.237）であり，この事件を見ていた人々（素性については述べない）の手紙や証言をここで紹介する価値があるとみたのだろう。ただ，実際には彼が諸資料をかき集めたのではなく，リストに挙がっているトマス・クーネン[219]の著書『ユダヤ人のむなしい希望』（アムステルダム，1669刊）によったものであろう（同書に載るサバタイ・ツェヴィの肖像画が本書に転用されている）。

確かにこの事件は国際的であり，ヨーロッパ各地に反響を呼んでいたが，ハザルトはここでは一切顔を出さず，傍観者の立場を取っている。トルコの衰退や終末観と結びつけるような記述もない。次章では1665年にローマ皇帝からトルコへ使節としてスコットランド人ウォルター・レスリー[220]が派遣されたことが紹介されるが，これはキリスト教の促進という名目においてであり，実際にキリスト教徒の囚人の解放を勝ち取っている。一方，ハザルトが偽メシアの出現をキリスト教会にとってどのような意味を持っていると考えていたかはわからない。

---

[218] キリル自身がヴェネチア領の出身なので，彼と混同している可能性がある。Richard Calis, “The Impossible Reformation: Protestant Europe and the Greek Orthodox Church,” *Past & Present*, gtac003, 2022. https://academic.oup.com/past/advance-article/doi/10.1093/pastj/gtac003/6687168 最終閲覧 2023.2.6. なお，前掲のホッティンガーは，ギリシア教会とプロテスタントの基本的信条は一致すると考え，キリルが著したとされる信条を再刊している。Jan Loop, *Johann Heinrich Hottinger: Arabic and Islamic Studies in the Seventeenth Century*, Oxford U.P., 2013, p.196.

[219] イズミルに駐在していたオランダ人牧師である。

[220] ハザルトは，スペイン王から金羊毛騎士に叙せられたことを記すが，それ以上の経歴は記さない。若いころはプロテスタントと何度も闘ってきた経験を持つ。

・モスクワ史（pp.265-285）

トルコの後に置いた理由は述べられず，**第 1 部「土地の状況，住民の風習・宗教」**（pp.265-271）では，ジギスムント・フォン・ヘルベルシュタインやアダム・オレアリウスの旅行記などを使って叙述する。**第 2 部「モスクワ大公」**（pp.273-285）では，イヴァン 4 世から話を切り出す。彼の治世にローマ教会からアプローチがなされたからである。その暴君ぶりが描かれ，神の怒りがポーランド王ステファン・バートリをしてロシア軍に勝たせたとし，怒り狂ったイヴァンは息子を鉄の十字架で撲殺した。和平の使者として本書でスウェーデン，フランスのところに登場していたイエズス会士ポッセヴィーノが教皇から送り込まれた[221]（1 章）。イヴァンの死後，国が混乱に陥るなかでカトリックが注目したのがイヴァンの王子「デメトリウスを称する男」（p.279）であった。彼の真偽についてはジャック・オーギュスト・ド・トゥーやゴットフリートらは偽だとするが，ハザルトはこれを「イエズス会に憎悪を向けさせるため」だという。イエズス会はデメトリウスを支持していたからである。彼が即位し，モスクワに乗り込んだ時にはイエズス会士も随行していた（3 章）。

最後はポーランド軍がロシアに勝利を収め，国王の凱旋をイエズス会士が迎えたところで幕が閉じられる[222]。ここで区切りをつけたのは，ロシア側の助っ人にイングランド・スコットランド人が送られていたからかもしれない。

・ペルシア史（pp.286-307）

サファヴィー朝の宮廷には 17 世紀初にアウグスティノ会士が伺候し，カルメル会が

---

[221] ポッセヴィーノには，『モスコウィア』の著作があり，ハザルトもリストに挙げているが（ただし，ケルン，1559 刊は全くの誤りで，初刊はリトアニアのヴィルナで 1586 年に出ており，ハザルトが使ったのは，1559 年ではなく，1595 年に出たケルン版だと考えられる。諸版本の異同については，Igor Melani, “Immagini della Russia tra Oriente e Occidente nel XVI secolo: politica, religione, culture nella Moscovia di Antonio Possevino,” Claudia Pieralli et al. eds., *Russia, Oriente slavo e Occidente europeo. Fratture e integrazioni nella storia e nella civiltà letteraria*, Firenze U. P., 2017, pp.85-109. 本文では最初と最後にリストにはない Oderbornius（パウル・オーデルボルン）の『モスクワ大公ヨハン・バシリデスの生涯』（ヴィッテンベルク，1585 刊）を引き，これに従ったように書いてある。

[222] この戦いについてハザルトは年次を示さないが，スモレンスクの戦いだと考えられる。しかし，前頁（p.284）でミハイル・フョードロヴィッチは 1633 年に亡くなった（実際には 48 年）とか，戦いの結果ミハイルが大公位を下りたとか（実際にはこの戦いの結果，ポーランド王がツァーリの称号を使うのをやめている），記述が不正確である。

これに続き，世紀後半ではカプチン会が存在感を示す。一方，イエズス会の布教はペルシアの辺縁部に限られた。こうした事情を頭に入れたうえで，本篇を読む必要がある。

ヨーロッパ人にとって，ペルシアは古代のイメージもあり，トルコ人に比べて文化的に見えていた。ハザルトも**第１部「王国の状況」**（pp.286-293）で，彼らの知識欲に言及している。また，ペルシアの政権はトルコとの対抗上，ヨーロッパ人の到来を歓迎してきた。その結果，ゴアから送り込まれたアウグスティノ会もシャーの歓迎を受け，第4･5章はその記述に充てられている。しかし，ハザルトはこの17世紀初で話を終え，**第２部「ホルムズでのカトリック信仰の普及」**（pp.293-307）に「本体」以上の紙数を費やす。ホルムズ島は大きくいえばペルシアに属するが，アッバースが1622年にイギリス人の助けを借りて制圧するまでは独立の王国であり，ポルトガル人が要塞を有していた。したがって，これをペルシアとするのにはかなり無理がある。

ハザルトが力を入れているのは，布教にあたったガスパール・ベルゼがゼーラント出身だからであろう。ザビエルにやや遅れて1546年にインドに向かった彼はホルムズに派遣される。同地は分派主義者（アビシニア，アルメニア，ジョージア，ギリシア・モスクワ）が集まり，異端（ドイツ，ルス，ポーランド）の人々が奴隷として売られる国際都市であり（p.296），ヨーロッパ人の男がムスリムの女性と結婚する「背徳」の街でもあった（p.294）。こうした多様な人々の間で布教活動を展開したベルゼはやがてアラブ人をも感化し，その評判はコンスタンティノープルに達したという。第4章ではユダヤのラビ，第5章ではペルシア人との論戦を描き，第7章でもサラセン人に対して勝利を収め，ホルムズ王を入信する気にさせたこと（結局してはいないが），第8章ではインドからきていたヨギを心服させて信者にするといった八面六臂の活躍が活写される。ベルゼは日本布教に向かうべくザビエルから召喚の命を受けるが，ゴアで説教後に忽然と亡くなる。彼についてはベルギー管区が1607年に列福申請し[223]，同管区出身のトリゴーが執筆した伝記が刊行されている[224]。

一人の宣教師に充てられる分量としては最多だが，それは出身地，そして書くだけ

[223] 前掲注11書 vol.1, p.427.

[224] リストに挙がっているのは，1611年にケルンで刊行されたものであるが，1610年にアントワープでも刊行されている。トリゴーが最初に東方に向かったのは，1607年のことだが，それまでに原稿ができていたか，あるいは旅先から送ったことになる。

の材料があったことに加えて，イエズス会のペルシアにおける存在感の希薄さを埋めるものでもあっただろう。

・フェズ・モロッコ王国史（pp.308-318）

本篇もまた特定の人物が際立っている。チュニス，フェズのムスリムの貴公子の改宗がテーマだが，特に後者に重点がある。すでに本書に登場しているバルタザール・ロヨラである。

まず 1219 年のフランシスコ会士のモロッコ派遣が記された（4 章）後に，チュニスの王子マメト（ムハンマド）・チェレビーの改宗が扱われる。王子はとらえられていたキリスト教徒の奴隷に接して入信を考えるようになり，1645 年 9 月に王宮を脱走しようとした。アウグスティノ会士の手引きによるものだったが，これは失敗した。その後，彼は結婚し，海軍提督に任じられるが，これが再脱走のチャンスとなった。今度は首尾よくマルタ島に脱走し，無事に入信した。大物の入信に寄せられた期待は，その洗礼名にフェリペ（スペイン王），インノケンティウス（教皇），そして彼に信仰を教えたイエズス会士にちなんでイグナチウスなどが並んでいることに表れている[225]。

そして既述のバルタザールについてはあらためて入信のいきさつを詳しくたどる。彼の場合は捉えられてマルタ島に来たのだが，そこで入会した後，ローマに向かい，イタリア各地で説教して 150 人以上のトルコ人を改宗させた。しかし，彼はこれに満足せずインド行きを希望し，教皇の贖宥を受けたうえで出発するが，直線的にリスボンに向かうのではなく，フランス各地をまわった（おそらく，彼の意思だけではなく，広告塔の役割を期待されてのことだろう）後，マドリッドで亡くなった[226]。最後に，神がマホメットの徒や異端が多く住むこの地域で鉄鎖につながれ呻吟しているキリスト教徒を救うことを期待して本篇を閉じる。

・タルタリア史（pp.319-390）

ここでいうタルタリアとは 13 世紀のモンゴル，そして 17 世紀の満洲を指す。当時

---

[225] Teobaldo Filesi, “Un principe tunisino tra Islam e crisitianesismo（1646-1686），” *Africa: Rivista trimestrale di studi e documentazione dell'Istituto italiano per l'Africa e l'Oriente*, 25-1, 1970, pp.25-48.

[226] Emanuele Colombo, “A Muslim Turned Jesuit: Baldassarre Loyola de Mandes（1631-1667），” *Journal of Early Modern History*, 13, 2017, pp. 479-504.

のヨーロッパではモンゴル人も満洲人もタルタルと呼ばれ，これらを区別するのもせいぜい東西で分ける程度で，両者の関係についてはあいまいなままであった。清朝の宮廷に仕えたイエズス会士には当然わかっていたことだが，ハザルトの時点ではまだヨーロッパにそれが明確には伝えられていなかった。

第１部「タルタリアの記述とキリスト教の普及」（pp.319-322）では，ヴァンサン・ド・ボーヴェ[227]やマルコ・ポーロなどを使い，モンゴル帝国の風習・宗教について述べ，**第２部「タルタル人への教皇使節の派遣」**（pp.323-327）では，第１の派遣として王（大カアン）のもとに派遣されたフランシスコ会士プラノ・カルピニを，第２の派遣として1247年にペルシアに向かったドミニコ会士アンセルモを，第３の派遣として1305年に派遣されたフランシスコ会士モンテ・コルヴィノを，第４の派遣として1318年にスルタニヤ司教として派遣されたドミニコ会士フランチェスコ・ダ・ペルージャを数える。1338年の大カアン（Grooten Cham）がアヴィニョンにあった教皇ベネディクト12世に送った書簡の引用[228]，1340年に「北タルタリアの皇帝」ウズベクが同教皇に使者を送ったこと[229]にも触れ，両会士の活躍によりキリスト教は栄えたが，戦乱が続く中で信仰は完全に消滅したとする。

タルタリアという大きな括りの中では，清朝においてキリスト教が「再興」したということになるが，その経緯を述べた**第３部「シナにおけるタルタル人の戦争」**（pp.328-335）は明末から清初にいたる変動期の記述である。ハザルトは本文で出典を明示しないが，末尾に見える「マルティニがブリュッセルで1654年にシナから受け取った手紙から理解されるように」という文言は，同人の『シナ・タルタリア戦記』（ラテン語，アントワープ，1654刊[230]）に載るもので，要するに本部はその抄訳である。出版

[227] ヴァンサンの *Speculum Maius* 中のモンゴル関連の記事については ,Gregory G. Guzman, “The Encyclopedist Vincent of Beauvais and His Mongol Extracts from John of Plano Carpini and Simon of Saint-Quentin,” *Speculum*,49-2,pp.287-307 を参照。

[228] 使者が送られたのは , 1336年で , 書簡がラテン語訳されたのが1338年。Igor de Rachewiltz, *Papal envoys to the Great Khans*, Faber & Faber, 1971, p.187.

[229] キプチャク・ハン国とカトリックの関係については , Roman Hautala, “Catholic Missions in the Golden Horde Territory,” Ovidiu Cristea and Liviu Pirat eds., *From Pax Mongolica to Pax Ottomanica*: *War, Religion and Trade in the* Northwestern Black Sea Region（14th-16th Centuries）, Brill, 2020, pp.39-65 を参照。

[230] 本書は複数の言語に翻訳されて , かなりの反響を得た。ハザルトはリストで1655年のアムステ

地・刊行年からして第 1 巻で取り上げられてもおかしくないのだが，なぜこの期に及んでなのかはわからない。

第 4 部「シナにおけるタルタル戦争の詳述とその続き，1668 年 10 月 5 日にそこから送られてきた手紙」（pp.336-369）も，手紙というだけで出典を明らかにしないが，文献リストにはイエズス会士フランソワ・ルージュモンの著作がみえる。ルージュモンはマーストリヒトの出身で 1668 年時点では後出する「暦獄」のために広東に収監されていた。彼の『タルタリア・シナ新史』は 1673 年にルーヴァンで出版（ラテン語）されるが，本書に収められるのはその原稿ということになる。ネーデルラント出身の会士だけにハザルトは入手できたのだろう。

刊本と見比べると，この手紙と叙述の結構はほぼ同じだが，その摘要である。第 1 ～ 10 章（刊本では第 1 部に相当）の記述の中心は清朝側ではなく，鄭芝龍・成功親子の側にある。ルージュモンは鄭成功が南京を攻撃する前年の 1658 年にマカオに到着し，以後暦獄で逮捕されるまで江南で活動していたのでこうした視点になるのだろう[231]。鄭芝龍はマカオでの修業時代にキリスト教に入信したことがあり，信仰を棄てた後もマカオとの関係は続いていた[232]。ふつう「背教者」のレッテルが貼られるが，ここでは「以前信者だった」とあるだけで非難めいた言辞は見られない。ただ，彼が北京に拉致監禁され，当時北京にいたブリオ・マガリャンイス両神父が危険を顧みずに獄中に彼を見舞い，回心を勧めても最後まで拒んだことを記す。

息子の成功のほうはキリスト教とは縁がなく，その分記述も淡々としている。ただ，彼は死ぬ前にフィリピンのスペイン人を恫喝して服従させようとしたこともあって，晩年の描き方には非難のトーンが混じり，彼の死は神罰とされる（p.356）。心ならずも使者としてフィリピンに送られたドミニコ会士ヴィットリオ・リッチョが終盤の狂言回しをつとめる[233]。彼がフィリピンから台湾に戻ると，オランダ占領期をかいくぐっ

ルダム版を挙げているが，これはラテン語である。

[231] ルージュモンについては，Noël Golvers, *Francois de Rougemont, S.J., Missionary in Ch'ang-Shu (Chiang-Nan: A Study of the Account Book (1674-1676) and the Elogium)*, Leuven University Press, 1999 参照。

[232] 拙稿「マカオ・メキシコから見た華夷変態」『京都大学文学研究科紀要』52, 2013, pp.35-134.

[233] Anna Busquets, "Vittorio Riccio: An Entangled Voice in the 1662 Chinese Uprising in Manila," Jos Gommans and Ariel Lopez eds., *Philippine Confluence. Iberian, Chinese and Islamic*

て生き残っていたカトリックの信者を探し出し，大歓迎を受けた話が述べられるが，ここで図らずもカルヴィニストの宣教師の布教事例に触れていることになる。オランダの占領期は短かったが，その間の宣教活動はなかなかに盛んであった[234]。

第11・12章では順治帝の晩年の軌跡がたどられるが，すでに1巻で見たシャールの記事に比べて，皇帝の仏教への傾斜がより目立っている。第13章で康熙の即位，第14章で永暦政権の消息が述べられ，これが刊本の第2部にあたる。ついで，第7章ではイエズス会士の復帰について簡述した1669年10月10月の書簡を引くが，刊本にはない。この後に暦獄（暦の作成をめぐる中西回の対立から発生）[235]の話が述べられるので内容的には重複するのだが，最新の手紙から引用することに価値があるのだろう。

第5部「シナのイエズス会士に対するタルタル人の迫害，驚くべき神の御業」（pp.370-390）は暦獄の発生から説き起こし，シャールの失脚，各地の会士の拘束[236]，シャールの死罪判決，その直後に起きた大地震，そして復権にいたる過程で，刊本の第3部にあたる。しかし，末尾のユダヤ人を迫害したエジプトのファラオに起きた災厄とユダヤ人に起きた奇跡の比較については，そうした言及は刊本にあるものの，かなりの敷衍がみられ，なかんずくここに「現代でもこうした奇跡が起きるのを見れば，今後ゴイセンも消え去るのではあるまいか」として一段を付け加えたのは，ハザルトの仕業であろう[237]。末尾の「イエズス会士ジャン・ド・ハイニンがマカオから1669年3月5日にブリュッセルのコレジオ院長アエギディウス・ファン・デル・ベークに送った書簡」は復権したフェルビーストの勝利宣言を伝えたものである。

Currents, c. 1500-1800, Global Connections: Routes and Roots. Leiden University Press, 2020, pp. 169-189を参照。

[234] Charles H. Parker, “Converting Souls across Cultural Borders: Dutch Calvinism and Early Modern Missionary Enterprises,” *Journal of Global History*, 8-1, 2013, pp.50-71.

[235] 本巻刊行と同年にパリで暦獄の経緯を記したイエズス会士アドリアン・グレロンの書が刊行された。同書の翻訳が矢沢利彦訳『東西暦法の対立：清朝初期中国史』平河出版社, 1986.

[236] 逮捕投獄された神父の名をワロン管区のミケル・トリゴー, フランス人のジャン・ヴァレ, そして「我が管区の」フランソワ・ド・ルージュモンとするが（p.378), ルージュモンが自分でこういう風に書くわけもなく, 神父たちの出身を加えたのはハザルトである。刊本にはルージュモンの名はなく, そのかわりにクリスティアン・ヘルドリヒトの名がある（p.258)。

[237] 刊本には末尾に1668.12.16の日付があるが, ハザルトがこれを消したのは, 自らが付加を行ったからであろう。

付録「東インド諸地方におけるカトリック信仰の状況についての直近の情報」（pp.391-412）では、ニュースソースは明かされないが，1660 年代の主に東南アジア各地の状況が述べられる。暦獄によるマカオの窮状と希望（1･2 章），日本（3 章），コーチシナ（4 ～ 8 章，13，14 章），マカッサル（9 章），シャム（10 章），カンボジア（11 章），トンキン（12 章），そしてコーチシナの殉教者の略述（1 ～ 3 章）で全編が閉じられる。コーチシナではかつての日本の状況が再現しており，信者に対しては「踏み絵」が使われていた。しかし，ここではハザルトはニュースを報じるだけで，コメントを加えることはない。

おわりに

長い道行きはようやく終わった。ここで本書の特徴を確認しつつ，その位置づけを試みよう。

まず，本書全体の結構についてあらためて考えてみる。これまでにも，多くの教会史が書かれてきたが，本書はとりあえず前・今世紀という，著者にとっての近代に対象を限定している。しかしながら，すでに見てきたように，全体的にその記述は 16 世紀に厚く，17 世紀に薄い。1 巻・4 巻では付録という形で情報をアップデートしているものの，全体的に見るとそそくさと「付け足した」という感が否めない。

歴史書編纂の視点からすると，こうなったのには材料の問題も作用しているように思う。本書のように一国ではなく，ヨーロッパさらには世界全体を個人の努力で一望のもとに眺めようとするのは至難の業であって，やはり土台はそれなりに必要であった。具体的には，ヨーロッパについて言えば「異端」の興衰史を描いたフロリモンであり，海外布教史については世界の半分（ポルトガルの布教保護権下にある地域）におけるイエズス会の布教史を扱ったジャリックである。ハザルトは，この二作品について特別扱いしておらず，表面的にみると二人が群を抜いて目立っているわけでもないが，実際には直接の引用部分以上に，本書に影響を与えている。

フロリモンについては，ナントの勅令を発したアンリ 4 世の時代を「異端」の衰退期ととらえる歴史観を示しているが，ハザルトはこの枠組みを踏襲するにとどまり，

17 世紀の三十年戦争期については，ほとんど取り上げない（同時期のイギリスの内戦はしつこくフォローしているが)。「異端」がヨーロッパの大半を席捲した 16 世紀の日の出の勢いを失って，日常的な存在となっていたにしても，カトリックとの争闘はいまなお続いており，ハザルト自身その戦士の一人であった。彼がヨーロッパ大陸の現代史をほぼスルーした理由はわからないが，17 世紀にはフロリモンのような参照系がなかった[238]ことも大きく作用しているのではないか。

ジャリックについては，やはり 16 世紀の海外布教史を俯瞰的に見るのに恰好の材料であった。17 世紀に入っても，布教の年報は世紀前半にはかなり盛んに刊行されていたし，会の正史編纂事業（歴代総長ごとにまとめられた）が進められてもいて，ハザルトはそれらを使うこともできたのだが，前者はいくつかの地域の年報を一～三年単位くらいでまとめたものであり，後者は「本紀」であるという性格上，海外布教についての記述は薄い。

ただ，海外布教についていえば，「異端」同様に 16 世紀の勢いが失われていたことも大きいだろう。実情はどうあれ，ハザルトが数え上げた異教の各君主が宣教師に与えた厚遇はほとんど 16 世紀の話であって，17 世紀でドラマチックな出来事と言えば，前半の日本での大量殉教（宣教師だけでなく，多くの俗人が死んでいることが重要)，後半の中国皇帝への親近くらいであり，ハザルトもこの二つの話柄については熱心にとりあげているが，それ以外にめぼしい話と言えば，個々の宣教師の殉教（とくにネーデルラント出身者）くらいである。ハザルトがアントワープで日々戦っていたように，世界各地の宣教師たちは現地の状況に対して適応・非適応を繰り返しながら悪戦苦闘を続けていたのだが[239]，ヨーロッパ在住の一個人にそうした日常的営みまでを取り上げろというのも無理な話である。また，本書は年代記のリジッドな枠組みを取っていないので，記述に厚薄があること自体は，著者にとって問題ではなかったかもしれない。

次に本書がアントワープで作られたことの意味を考えてみる。

マルテンスが言うようにこの本にはアントワープという都市が刻印されていること

---

[238] ただし , 彼が使った本書の第二部はフロリモンの死後 , 17 世紀の 10 年代くらいまでの記事を含んでいる。

[239] 注 51 斎藤編著に載る編者の序論「宣教師の異文化適応を再考する」（pp.1-52）は , 布教史を扱う者には必読の文献である。

は間違いない。ネーデルラント出身の宣教師，そしてアントワープ産の書物がフィーチャーされ，蘭語によって語りかけられるのは，今そこにいるアントワープの人々さらには蘭語を解する聴衆であり，それ以外の読者がいることはとりあえず意識の外にある。

しかし，そうした点とは別の意味で，アントワープのローカリティに着目してみたい。それは，イエズス会あるいはローマ教会にとってアントワープ・南ネーデルラントが持つ意味である。

1626 年時点でフラマン管区のイエズス会士は 860 人で，ローマ管区と首位を競うほどであった[240]。そして，「聖人伝」編纂という巨業に取り組み始めていたボランディストの手によって 1640 年にイエズス会創立百周年の書物 *Imago primi saeculi* が刊行された。これまでの活動を総括するとともに管区の歴史も称揚する書物であったが，当時台頭してきていたヤンセニストの批判も被った。対カルヴィニズムの最前線は同時にカトリック内部の敵の攻撃にもさらされていた。

ハザルトはそうした状況の中で数多くの著述を行い，本書もまたその一つであった。ここにはヤンセニストの影はまだ差しておらず[241]，異端に対してカトリックが一致して当たらねばならないというメッセージを読み取ることができる。

ただ，歴史書として本書を見るとき，「前線」にはもう一つの意味があるように思う。それは，ローマとの関係性における意味である。

当時，ローマではイエズス会の史官とでもいうべきダニエッロ・バルトリによってイタリア語で次々と各地の会史がまとめられていた。『聖イグナチオの生涯とイエズス会』（1650），インドを扱った『アジア』（1653），『日本』（1660），『チーナ』（1663），『イングランド』（1667），そして『イタリア』（1673）である。

バルトリは会の史官として世界からローマに集まってくる資料を利用してこれらの史書を編纂することができた。しかし，ハザルトはバルトリを使っていない。少なく

---

[240] John W.O'Malley, S.J., "The *Imago*: Context, Contents,and Controversy," Id.ed., A*rt, Controversy, and the Jesuits: The Imago primi saeculi*（*1640*）, Saint Joseph's U.P., 2015, p.14.

[241] マルテンスは本書の背景としてイエズス会とヤンセニストの抗争を挙げ，ハザルトが献辞を捧げたアントワープの教会人が反ヤンセニスト派だとするが，本文そのものにそれがどのように反映されているかには触れない。

とも彼の名前は本書には一度も出てこない。それが意識的に排除したものなのか，単純に参照することができなかっただけなのかは不明だが，結果としてできあがった書物の性格は相当に異なる。

バルトリが会の史官として当然イエズス会を中心として記述したのに対し，ハザルトは「贔屓している」と批判されてはいるものの，イエズス会の単純な顕彰史書では決してない。そして，バルトリはカトリックの中心ローマにいながら結局「世界」を描くことはなく，個々の地域を扱うにとどまったが，ハザルトは曲がりになりにも世界を相手取っている。

ハザルトがもう一つ異なるのは，前述したように年代記のスタイルを捨て去ったということである。彼は17世紀前半に作られたイエズス会の正史を少しだけ使っているが[242]，準拠枠としてではなく，あくまで材料の一部しかもごく微量しか使っていない。

これらの史書やローマで作られたバロニウスの『教会史』いやそれだけではない，普遍を志向する『教会史』はそもそも年代記的構成をとってきた。しかし，ハザルトはそれを放棄した。それは直接には彼が言うように編年体史料の欠陥をカバーするためだったかもしれない（ここで私はかつて研究したことのある『資治通鑑』のアポリアを想起せざるを得ない[243]）が，結果としてできあがったのは，年代記的記述に縛られない反面，クロノロジー的にはあちこちに穴ぼこが開いた作品で，その点から見ればできそこないなのかも知れない。それだけではない。バロニウスの『教会史』編纂はそもそもプロテスタント側の教会史『マグデブルクの諸世紀』に対抗するために編まれたものだが，チームによってつくられた後者に見られる編集方針や，先行する時代にフランスのジャン・ボーダンらが盛んに論じていた歴史叙述の方法論[244]が，ハザルトにあったようには思えない。

しかし，こうしたスタイルをとったからこそ，アジアを最初に持ってくることがで

---

[242] 第1巻のリストに，*Historia Societatis Iesu* の第1部～5部（1620-61刊）が挙げられるが，本文で明確に引用されることはほぼない。こうした総長ごとに編まれた「王朝の本紀的な」正史にも海外布教のことは記されてはいるが、中心は当然ヨーロッパの記述になる。

[243] 拙著『中国近世の福建人』名古屋大学出版会，2012, pp.364-365.

[244] Gregory B. Lyon, “Baudoin, Flacius, and the Plan for the Magdeburg Centuries,“ *Journal of the History of Ideas*, 64-2, 2011, pp.253-272.

きたのではないか（直接的には，「海外布教のアドヴァンテージ」をアピールするものだったにせよ）。彼もまた主観的にはカトリック＝普遍を標榜しているが，結果はそれとは異なるものになった。

本書第 1 巻と同じ年に，ローマにいたキルヒャーは『シナ図説』をアムステルダムから刊行した。掛けている看板は中国でも，中身はヒンドゥーの神の化身の話あり，さらにメキシコの話も出てくるなど,「普遍」志向の書物である[245]。キルヒャーは本書で，主観としてはキリスト教に帰一する異教の世界を描き出した[246]。

これに比べれば, 本書は『世界教会史』を標榜しながら, 異教の存在を包摂しない「後ろ向き」の書物に見えるかもしれない。同時期にオランダで出たダッペルの『アフリカ』（1668）『シナ』（1670）『アジア』（1672）, アルノルドゥス・モンタヌスの『日本』（1669）『アメリカ』（1671）のように，異教の世界は異教の世界として描く書物に比べても遅れているように見えるかもしれない[247]。

しかし，ダッペルもモンタヌスも（そしてバルトリも）一つの作品で世界を表象することはできなかった。本書がまがりなりにもそれを達成した力業であったことは確かである[248]。そして，それを実現させたのは，近くにいる異端，オランダ人の存在ではなかったか。

17 世紀はイエズス会に続いてオランダ人が世界各地に展開していった時期である。そして，ハザルトはオランダ人が現世利益のためにしか海外に出ないと言い，これは近年までの学界での通念でもあったが，近世におけるプロテスタントの海外布教の見直しが現在進んでいる[249]。また，この時期は東洋学の勃興時期で，その中でプロテスタントが果たした役割は極めて大きいが，彼らの営為にはムスリムへの布教意図が含ま

---

[245] ジョスリン・ゴドウィン『キルヒャーの世界図鑑』川島昭夫訳 , 工作舎 , 1986.

[246] ただし , 異端スレスレとはいえ , 本書はイエズス会の検閲を通った書物ではある。

[247] Joan-Pau Rubiés, “Theology, Ethnography, and the Historicization of Idolatry,” *Journal of the History of Ideas*, 67-4, 2006, pp.571-596.

[248] 同じくアントワープで一世代前に活躍した教会史家アウベルトゥス・ミラエウスの *Politia ecclesiastica, sive de statu religionis Christianae per totum orbem*（ケルン , 1609 刊）も、世界の四部分に各 1 書をあてて教会の現勢を伝えてはいるが , 歴史書というより報告集といったほうがよい。

[249] 注 234 パーカー論文。

れていたと指摘されている[250]。その代表的存在であるホッティンガーも浩瀚な教会史（9巻本 , 1651-1667）を著している。ヤン・ロープによれば，本書は17世紀の東洋学の一つの達成であるとともに，カトリック・イスラームの双方を撃ち，外界に向けて語りかけるものだったという[251]。また, 前掲のホールンベークのように海外布教の戦略を著作化する者が登場していたし，組織的なミッションが構想されてもいた[252]。また，ハザルトから見れば「分派」を繰り返し，相互に憎み合っていたプロテスタントの一部に汎キリスト教的な運動が展開しつつあった時期でもある。こうした事情をオランダ・プロテスタントに近接した世界に住むハザルトが知らなかったとは思えない。

彼にとっては，それは異端の病原菌の蔓延に他ならない。本書で普遍史の枠組みをとらなかった彼だが，この後メッセージとしては同工異曲の *Triomph der Pausen van Romen over alle hare benyders ende bestryders*, 3巻本を刊行し，あいもかわらず普遍的ローマ教会の勝利を高らかにうたい上げている。しかし，その一方でプロテスタントのこうした普遍化運動に彼は危機感を抱いていたのではないか。これに対するファイティング・ポーズを取るうちにできあがったのが本書であると，私は考えている。

その当否はさておくとしても，カトリックのために戦い，あるいはそれに抗った人々の奏でる不協和音の壮観を作り上げたハザルトの力業には深い敬意を覚える。

---

[250] Pierre-Olivier Lechot, *Luther et Mahomet*, *Le protestantisme d'Europe occidentale devant l'islam. XVIe-XVIIe siècle*, Éditions du Cerf, 2021.

[251] 前掲注218書。

[252] Jos Gommans and Ineke Loots, "Arguing with the Heathens: The Further Reformation and the Ethnohistory of Johannes Hoornbeeck（1617–1666）," *Itinerario*, 39-1, 2015, pp.45-68.